
起きたら異世界でした。

一ノ瀬 崇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

起きたら異世界でした。

【Nコード】

N5486X

【作者名】

一ノ瀬 崇

【あらすじ】

特技は現実逃避、趣味は日向ぼっこ、好きなタイプは小さな女の子。そんな僕、片桐悠里が異世界で繰り広げる剣と魔法と幼女のファンタジー。や、知らない内にトリップしてたけどね。

知らない間に異世界トリップ。

まず感じたのは、全身の気だるさ。続いて何かが僕へと向けている視線に気付く。

微睡む意識を強引に浮上させ、薄く開いた僕の目に飛び込んできたのは――

「……………あ、やっと起きた」

見知らぬ、幼女だった。

肩口まで伸びた紫銀の髪と、青紫の瞳が印象的な幼女。

顔立ちも整っていて、数年も経てば誰もが振り返る美少女になるだろう。

麻布で編まれたゆったりとしたチュニックとやや煤けた茶色のズボンを着ていて、何処となく漂う異国情緒が幼女のかawaiiさを引き立てている。

そんな美幼女が、僕の顔を覗き込んでいた。この娘は誰だろう？というか僕の部屋にどうやって入ったんだ？

そんな疑念が頭の中を駆け回り、質問として外へ出ようとするが、

「……………！」

声が、出ない。

今気付いたが口も喉もカラカラだった。

ぱくぱくと口を動かす僕を見て、幼女は首を傾げる。

――かわいい。じゃなくて、水、水をください。

僕の思いが伝わったのか、幼女はにこりと微笑む。

幼女は僕の寝ているベッドから離れて、部屋の左の方へ歩いていく。自然とその姿を目で追っていたが、上体を起こそうとした所で、

「……っ、あっ！」

背中が焼けるように痛み、ぐもった声を上げてしまう。

僕の声に驚いたのか、幼女が振り向く気配がする。

「あっ、まだ動いちゃダメだよ！」

幼子特有の甘く高い声に押し留められる。

僕は体を起こすのを諦め、ベッドに深く沈み込むように力を抜く。

右の肩甲骨から腰にかけてじくじくとした痛みが広がっている。

幼女は僕が無理に起き上がろうとしない事を確認すると、ドアを開け部屋を出て行った。

幸い首は動かせるようなので、目で幼女を見送る。

徐々に遠ざかる足音をBGMに、僕は深く息を吐き出した。

——何だろう、この背中の痛みは。怪我をした覚えは無いんだけど……。それよりあの娘は一体？

そこまで考えた所で、僕は気付いた。

——って、この部屋、僕の部屋じゃない？

混乱する僕の元へ、足音が近付いてくる。

行きと違い、足音は2つ。ドアがゆっくりと開かれ、先程の少女が水差しとコップを抱えてやってきた。

その後ろから、もう1人が姿を見せる。

少女と同じ紫銀の髪と青紫の瞳。恐らくは少女の姉だろう。少女よりもやや長い髪を頭の左で結んでいる。

——ああ、何て言うんだっけか。サイドポニー？

整った顔立ちは正しく美少女と言って差し支えない。

薄い青のローブに身を包んでおり、ゲームに出てくる修道女みたいな格好をしている。

何より目を引くのは彼女が手にした古びた杖。

一体何に使うんだろうか？

と、少女がコップを差し出していたのに気付く。

ありがとう、と心の中で感謝しつつ受け取ろうと手を伸ばそうとして、

——あ、あれ？

幾ら力を入れても腕が持ち上がらない。と、僕の体が動かない事を察したのか、少女はコップを引っ込める。

そして少女は水を自分の口に含むと、

「んう」

「んむっ！？むっ、んくっ、んくっ」

口移しで飲まされた。部屋の入り口の方で少女が何やら衝撃を受けているみたいだが、僕はそれどころじゃない。

口や喉を潤していく水に混じって、甘い香りが鼻へ抜ける。

反射的に舌を伸ばし更に水分を求めると、舌先に温かく柔らかな感触が生まれる。

舌で押せば絡まるようにうねり、逆に引けばおずおずと求めてくる。夢中でそれを吸っていると、幼女がゆっくりと唇を離す。

互いの舌を繋ぐ銀色の糸を見て、自分が今何をしていたのか気付いた。

——ちよ、ちよっ!？僕今この娘とデープなチツスを……!？

顔を真っ赤にする僕を、頬をほんのり桜色に染めながら幼女が見つめ返す。

幼女は目を少し潤ませながら上目使いで、

「おかわり、いる……?」

「な……何してるのよミナあ!？」

思わず頷き掛けた瞬間、少女が叫ぶように声を上げた。

「だってお兄ちゃん、体動かないみたいだったから」

「それにしたって、く、口移しは無いでしょう!？」

「でも喜んでたよ?」

待ちなさいお嬢さん。その発言はいろいろと危険です。

尚も口論を続ける2人を何とか宥めるべく、僕は口を開いた。

「えっと……取り敢えず2人共、落ち着いて」

「これが落ち着いていられますかっ!」

少女にあっさり一蹴された。
しかしここでめげる訳にはいかない。
心を強く持って再度声をかける。

「ほら、彼女も悪気が有った訳じゃないし、むしろ親切心というか献身的なアレで」

「だとしても方法に問題が有りすぎますっ！」

むう、なかなか手強い。

ここは幼女のした事を好意的に受け止めている、という所をアピールしてみよう。

「ぼ、僕はそんな、嫌じゃなかったから大丈夫」

「それはそれで問題です！」

ぐっ、確かにそうだ。言葉の選択を誤ったかな。

……な、なんだよう、ロリコンじゃないぞ！……多分。

その後も何とか説得を続け、漸く少女が落ち着いたのが10分後。
ベッドから起き上がれない僕の横で、丸椅子を持ってきて座り足をぶらぶらさせている幼女。その正面の椅子に少女が座る。

「……失礼しました。私はこの教会の修道女でシーナと申します」

そう言って少女――シーナは頭を下げる。

やっぱりシスターだったのか。というかこの建物は教会だったのか。シーナの落ち着いた声は何処か透き通っていて、賛美歌を歌ったらかきと天使の歌声なんて言われるくらいに聴いていて心地良い。

「私はミナだよ。修道女見習いなんだ」

幼女は僕の右手に指を絡めてにっこりと微笑む。

……ヤヴァイくらいにかわいい。というか、僕の人差し指を優しくきゅっと握るのは反則だと思います。

ちよっとドキッとした胸を落ち着かせつつ、僕は口を開いた。

「僕は悠里。片桐悠里。カタギリが姓で、ユーリが名前だよ」

僕の名前を聞いて、シーナが驚いた風に口元へ手をやる。

——何か変な事言ったかな？

2人の名前が外国人風だったから、一応姓と名を言ってみただけど。

もしかしたらシーナは椎奈でミナは美奈という日本人でした的なオチだったり？

うっわ、僕超赤っ恥じゃん。

みたいな事を考えていると、恐る恐るといった様子でシーナが切り出した。

「あの……カタギリ様は、貴族なのでしょうか？」

「へ？」

言われた意味は解っても、言われた経緯が解らない。
僕の何処を見て貴族だなんて思ったんだろう。

「僕は貴族じゃないよ、ただの平民。だから普通にユーリ、って呼んでくれればいいよ。……でも何で僕を貴族だと思ったの？」

貴族じゃない、という言葉を受けてシーナはほっと息を吐く。

「この国では、姓を持つ方は皆貴族ですので……。」

「そっかぁ。……ん、この国？」

あれ、何か今変な事を聴いた気がする。

この国、ってシーナ言ったよね。

何処かで、こんな感じの状況下で、こんな感じの台詞を聞いた事が有ったような……あ、ああ、思い出した。

確か異世界に召還された主人公が魔王を倒すRPGの出だしにこんなやり取りが有った筈だ。

はっはっは、成程なるほど。

つまりここは異世界で僕はトリップした訳か。

「うわぁ……マジかぁ……」

いきなりテンションがた落ちの僕を見て慌てるシーナ。

「あつ、あのっ、私何か失礼な事を!？」

「いや、うん、大丈夫。ちよつと現実逃避してるだけだから」

気に掛ける余裕も無いのでシーナを適当にあしらいつつ、深い溜息を吐く。

——状況を鑑みるに、80%の確率で僕は異世界トリップしたとみている。

まだ決定的な証拠を目にしていない事や、自分の感情を含めて20%くらいはまだここを地球——更に言えば日本だと考えている。

だって異世界トリップものの定めとして、元の世界に帰れないのは定石。運良く帰れる手段が有るとしても、どうせすぐには帰れない。そんなショッキングな出来事をすんなり受け入れるには、少々心のHPが足りない。

まだ救いが有るのは、そこまで元の世界——地球に未練が無い事、かな。

僕に家族が居ない。正確には、家族を失ったばかり。

今年の正月に両親と妹を事故で亡くし、祖父に引き取られて、やっとな両親と妹の死に自分の中で区切りを付けたのが2ヶ月前。

小さい頃から祖父とは付き合いが有ったけど、僕の方に照れや遠慮が有って今一つ打ち解けられていなかった。

だから祖父の事はそこまで心残りじゃない。

……いや、感謝はしてるよ?でも、ちよつと薄情かもしれないけれど、そんな簡単に割り切れるものでもないし。って僕は誰に言い訳してるんだ?

程良い感じにパニックっていると、ふわりと柔らかな感触が僕を包んだ。

視線を上げると、ミナが僕の頭を抱えるように抱き締めていた。

「……ミナ？」

「だいじょぶだいじょぶ。私がいるからさみしくないよ？」

ね？と笑い掛けるミナ。

小さな手で頭を撫でられる度、少しずつ自分が冷静になっていくのが解った。

「私が泣きそうな時はお姉ちゃんがこうしてくれるの。ユーリ、今悲しい顔してるから、私が撫でてあげるね」

ミナに言われて初めて気付いた。

——僕はミナが心配する程、悲しい顔してたのか。

いけないいけない、こんなに小さな娘に心配掛けてるような奴は男じゃない。

祖父に教わった教訓を思い出して、ネガティブな思考を追いつ出す。

頭が冷えると、幼女特有の甘い香りが鼻腔をくすぐる。そして僕の顔に当たるこのふにふにとした触感の間違いなくちっぱい。

——あれ、ひょっとしてここ異世界じゃなくて天国じゃ？

ポジティブ気分で現実を見据えると、目の前には幼女の胸。横目でちらりとシーナの位置を確認。

よし、この角度なら見えない筈。

僕は意を決して息を吐き出し、

「クンカクンカスーハースーハー……」

うん、堪能した。

大丈夫、再度確認したけどシーナは全く気付いてない。
え、ロリコン？それがどうした！

先程とはまた違ったベクトルで思考を暴走させる僕。
と、何やら視線を感じる。

目を上げると、ミナが軽く頬を染めて僕を見ていた。
そして僕の耳に口を近付けると、囁くように言った。

「……ユーリの、えっち」

はい、すいません。もう色んな意味でクリティカルです。
思わずミナを押し倒そうとして、

「っあ!？」

背中に激痛が走る。

ミナの色香にすっかり惑わされていたが、僕は怪我人だったのだ。
怪我をした経緯は知らないけどさ。

僕の悲鳴に2人が慌てる。

「ユーリ、だいじょぶ!？」

「ミナ、どいて! ユーリさん、今治療しますから!」

幸いにも強烈な痛みは一瞬で引いている。だからこそ、シーナが何をしようとしたのかを見れた。

シーナは古びた杖の先を僕へ向けると、流れる水のような声で何かを唱え始めた。

「生命の息吹よ、彼の者の傷を癒せ、ライブ！」

シーナの声に合わせて小さな光の粒子が杖の先に集まり、拳大の大きさまで膨れ上がる。すると光は弾け飛び、雪のように僕の体へ降り注いだ。

暖かい光が僕の体の中に染み込むように融けていく。

その光景に呆然としていたら、急に背中に違和感が走った。

もぞもぞとした妙な感覚。例えるなら背中の皮膚が意志を持って這い回っているような。

その気色悪さに思わず身を振る。

しまった、と思った時にはもう遅く激痛が背中を走……アレ？

「痛く……ない？」

背中のもずもずもすぐに収まり、全身が気だるい以外に体の異常は感じられない。

試しに体を起こしてみる。力が入りにくい以外は特に異常も無かった。

そんな僕の様子を見てシーナは満足そうに笑みを浮かべる。

「良かった、成功ですね」

「成功って……今何したの？」

僕の疑問に、笑顔で答える。

「ライブの魔法を掛けたんです。失った血は戻らないのでだるさは残りますが、傷は塞がったハズですよ」

異世界トリップもののお約束が出た。

——魔法かぁ。魔法って、魔法だよなぁ。

意味の解らない事を考えながら、僕は諦めて状況を整理する事にした。

どうやらここは本当に異世界みたいだ。

あの魔法も、光だけなら手品みたいにトリックがあるのかもしれない。でもさっきまで有った背中 of 激痛が、あの光を受けてから全く無くなった事の説明が付かない。

だからアレは魔法だと信じよう。

まず大前提として——地球には魔法は無い。

そしてこの世界には魔法が有る。

結論↓ここは地球じゃないよ。

「……うん、完璧な理論だ」

「どしたの、ユーリ？」

首を傾げて僕を見るミナ。

うん、その表情は止めようね？ かわいすぎて僕が壊れるから。

自己主張を始めようとするマイサンを気力で押し留めながら、どうしたもんかと天井を見上げる。

取り敢えず住む所を探さないといけない。

どこか宿屋みたいなのがあれば良いんだけど。そうなるとお金も必要だなあ。この世界にギルドみたいな施設は有るかな？

ぼんやりと考えていると、部屋の外から大きな音が響く。

『ゴーン……ゴーン……！』

「うわっ、な、何？」

「来客を知らせる鐘ですよ。私は少し席を外しますから、何か有ればミナに言い付けて下さいね」

鐘の音に驚いている間にシーナは部屋を出て行った。

これからの事とか魔法の事とかいろいろ話したかったんだけどなあ、とぼーっとしていたら、ほっぺをぶにとつつかれた。

そのままほっぺを摘まれたり、おでこをぺちぺち叩かれたり。

「えっと、ミナは何をしてるのかな？」

「んー、なんでもないよ」

尚もぺたぺた触ってくるミナ。
どこことなくご機嫌な様子で纏わり付いてくる姿は子猫っぽくてかわいい。
やられっぱなしだと負けた気がするから、両腕に無理やり力を込めてむぎゅっと抱き寄せる。勿論ミナが痛くならないように上手く加減して。

「ふわっ!?! え、えと、ユーリ?」

そのまま腕力で小さな体を持ち上げ、僕の上に寝かせる。
ミナは戸惑っているけど暴れたりはしないで大人しくしてる。と、

「……ふわぁ」

寝転がった所で急に睡魔が襲ってきた。

ミナを抱き上げた事で予想以上に体力を消耗したらしい。

目を閉じると意識がすぐに薄くなり、僕は夢の中へと入っていった。

こうして、いろいろ現実逃避したまま僕の異世界トリップ初日は終了した。

恩人はエルフでした。

僕がこの世界に来てから3日。

その間にシーナとミナからこの世界の知識や常識、それから僕が現れた時の事を教えてもらった。

まずは今僕が居るこの場所について。

ここは《西の大陸》って大陸の南西部に在る《リンディア王国》って国の更に南西部、森林地帯の入り口に在る《タマタ村》っていう小さな村。

村人達は主に農業や放牧、狩りなんかで生計を立てている。

村にある一番大きな建物がこの教会で、診療所や集会所みたいな役割も持っているらしい。

つい最近神父さんが亡くなって、代わりにシーナが村人達に支えられながら教会の仕事をこなしているみたい。

それと週に一度、行商人の一行がやってきて、村で穫れた野菜や動物の皮と、街で売っている日用品や食材なんかを売り買いしてる。

行商人の馬車やシーナの話聞く限り、この世界の文化レベルはまだ低い。

産業革命以前のまま停滞しているみたいだ。

その理由は魔法が有る所為だと思う。

多分だけど、魔法の技術を発展させようとすると、科学の技術は成長していかないのだろう。

——魔法かぁ。やっぱりまだ現実感が無いなぁ。

聞いて驚いたのは、この世界の人は大なり小なり皆魔力を持っているという事。

その魔力が多い人は、魔導師になる為に国が運営する学校へ行く。優秀な人材を集める為に入学金や生活費は国持ちらしい。シーナも学校に入っていたのか聞くと「私みたいに魔力が少ない人は入れませんよ」と笑って言われた。

僕の傷を治したくらいだから、きっと大魔導師なんじゃないかって思った、と伝えたらちよつと照れてた。

詳しく聞くと、シーナの杖に秘密が有った。

あの杖は神父さんが使っていたもので、大怪我でも治療出来る《ライブ》の魔法が込められたものだったんだ。

魔法を使うにはそれぞれの魔法が込められた杖や魔導書が必要で、治癒系の魔法が込められた杖は比較的高価な物らしい。

そんな貴重な物を僕に使って良かったのか、って聞いたらシーナは困ったように笑いながら答えた。

「ミナの命の恩人を放っては置けませんよ」

そこから、話は僕が現れた時の事に飛んだ。

事の始まりは3日前の朝。

ミナが1人で薬草を取りに近くの森へ入っていった。

この時期には珍しく大ぶりの薬草がいっぱい生えてて、取るのに夢中になる余り普段は立ち入らない森の奥へ進んでしまった。

昼近くになり、さあ帰ろうかと歩き出した所で《荒熊》に遭遇してしまった。

荒熊は文字通り熊なのだが、気性が荒く鋭い爪で獲物を切り刻んでから食べるという、残忍極まりない習性があるらしい。

恐怖で動けなくなったミナに荒熊が近付き、腕を振りかぶる。

ぎゅっと目を瞑るが、痛みの代わりにやってきたのは優しく包み込むような感触。

目を開けると、僕がミナを抱きかかえるようにして、荒熊の攻撃を防いでいたらしい。

荒熊は駆け付けた狩人に退治され、意識の無い僕はそのまま教会へ運び込まれた、という訳。自分でも知らない間に、僕は村のちょっとした英雄になってた。

ミナは命を助けてくれた――結果的にそうだった――僕に好意を持ったようで、甲斐甲斐しく身の回りの世話を焼いてくれた。

まあ、荒熊に襲われた時の恐怖が、そのまま僕へのドキドキにすり替わったんだろうなあ、って思う。

吊り橋効果だっけ？

そんな訳でミナに介護されて、やっとベッドから出ても大丈夫とシーナに言われたのが今朝。

なんだかんだですっかり鈍ってしまった体に喝を入れようと、教会の庭で軽くストレッチを始めた所で現在に至る。

朝の日差しが目に滲みるなあ、とぼやきながら両腕を上には伸ばす。ボキボキと療養生活で凝り固まった肩や背骨が音を立てた。

その音に混じって、背後から草を踏む音が聞こえる。

「いやはや、凄い音だね。おはよう、ユーリ君。もう起き上がっても平気なのかい？」

掛けられた声は、女性にしては低めだけど、つい耳を傾けたくなる

ような綺麗な声。

僕は振り返って声の主に笑顔を向けた。

「おはようございます、エアリィさん。もう怪我は完治したんですけど、流石に体が鈍っちゃいまして」

目の前に立つ女性はエアリィさん。

荒熊を退治し、僕を教会まで運んでくれた恩人の狩人さんだ。

身長は僕と同じ160cmくらいで、すごい美人なおトナの女性。切れ長の緑色の目と薄い金の長髪がとてもチャーミングだ。

何より目を引くのは、ピコピコと揺れる長い耳。

そう、エアリィさんはエルフなんだ！

いやあ、まさか本物のエルフを見られるとは思ってなかったから、最初にエアリィさんを見た時は衝撃だったね。思わず「その耳触っても良いですか!？」って聞いちゃったし。

あの時は顔を赤くしたエアリィさんに断られちゃったけどね。

「元気なのは良いけど、余り無理はしないようにね。あれだけの怪我をした後というのは、存外動けないものだから」

「あはは、解ってますよ。今日は精々散歩くらいにしておくつもりでしたから」

「それじゃあ散歩が終わったら、私の家に寄ってくれ。何も無いがお茶くらいならだすよ」

そう言って微笑むエアリィさん。

その姿は近所の優しくて美人なお姉さんって感じた。

今日も森へ入るのだろう、ゲームとかで狩人やアーチャーが着てそうな――グリーンサーコート？を纏い、背中には木で出来た弓と矢筒を背負っている。

ただ、僕の視線が向かうのはコートの盛り上がった部分。

エアリィさんはスレンダーな体型をして全体的には華奢なんだけど、胸元はしっかり女性らしさをアピールしてる。

――あれは間違い無くCはある！

と、僕の視線を感じ取ったのかエアリィさんは胸を隠すように腕を抱き、身を振りながら頬を赤く染めた。

「私も元気なのは良いと言ったが……あんまり見られると恥ずかしいものだよ？」

僕の理性はダメージを受けた！

いや、エアリィさん、それ反則です。かわいすぎです。

雰囲気はオトナの女性なのに、こういったちよつとした仕草が、どこことなく子供っぽくてかわいい。

屈託無く笑った時なんか、僕と同じ年――14、5歳の女の子にしか見えない。

前にお見舞いに来てくれた時のワンピース姿は永久保存版だった。

あ、思い出したら鼻血出そう。

反射的に鼻へ手を伸ばす。勿論鼻血は出ていない。

「……ふふっ、まあそれだけ元気なら心配はいらないか」

僕の動きが面白かったのか、エアリィさんが笑みを零す。

思わずぼーっと見ていると、

「ん、どうしたんだい？」

「笑ったエアリイさんが素敵だったので見惚れてました」

……ハッ！？僕は今何を口走ったんだ！？

上がりっぱなしのテンションに任せてとんでもない事を言ったような気がする。

見ればエアリイさんは顔を真っ赤にして俯き、ぷるぷると肩を震わせていた。

——うっわあ、エアリイさんマジ切れ状態？一体何を喋ったんだ僕！？

軽くパニックになっている僕をキッと見据えて、エアリイさんは腰に手を当て怒るように言った。

「そっ、そういう事は余り軽々しく言わないでくれないか？」

「は、はいっ！もう言いません！」

「いや、たまにというか、言うならもっと雰囲気の有る所で……」

最後の方は声が小さくなって聞こえなかったけど、取り敢えずエアリイさんが怒ってるのだけは解った。

もうテンションに任せて喋るのは止めよう、うん。

「それじゃあ、私はそろそろ行くよ」

「はい、あ、エアリイさん」

うん？と軽く首を傾げて僕を見る。やっぱりかわいいなあ。

恩人の無事と狩りの成功を願って、僕は自分に出来る100%の笑顔で言った。

「行ってらっしゃい」

「――ああ、行ってきます」

僕の言葉にきよんとしたエアリイさんだけど、花が咲いたような素敵な笑顔を返してくれた。

エアリイさんを見送ってから、僕は一通りの軽い運動を始めた。

目測50mダッシュや腕立て伏せ、スクワットなんかは少しキツかった。

筋トレって1日サボっただけでキツくなるけど、3日も寝転がっていたらここまでキツくなるのか。

額に汗を掻きながら、大きく深呼吸する。

吹き抜ける風が気持ちいい。

一息吐いて、僕は庭に生えている大きな木の根元に腰を下ろした。右手を伸ばし、隣に置いてある麻袋を掴む。

「はてさて、一体何が入っているやら」

実はこの袋、僕が肩に引っ掛けていた物らしい。

少なくとも僕はこの袋を見たのは今朝が初めてだ。そう言えば、とシーナが僕の替えの服を調達してきてくれた際に、思い出して持ってきた物だ。

見た目の割には随分と軽く感じるので、あんまり中身は入っていないんじゃないかと思う。

さあ、鬼が出るか蛇が出るか。

ちよっぴりドキドキしながら麻袋に手を突っ込んだ瞬間、

「ユーリっ♪」

「わひゃあっ!？」

突然掛けられた声と背中につつかる感覚に、妙ちくりんな悲鳴を上げてしまう。

そのまま僕の肩に手を回してきゅっと抱き付いてくる。むむっ、この甘い香りは――

「ミナ、脅かさないでよ」

「にへへ、ゴメンね」

ていつ、とミナの体を持ち上げて僕の膝の上に乗せる。

背面座……げふんげふん。

頭をくしくしと撫でると、ミナは嬉しそうに目を細める。と、僕の左手が入っている麻袋に目が行ったようだ。

「気になる？」

「うん、ユーリが何を持ってきたか点検しようよ」

「じゃあ一緒に見てみようか」

左手を突っ込んだまま袋ごと持ち上げ、ミナの前に置く。

袋の口を開け、中の物を取り出す。

「これは……折り畳み傘？」

取り敢えず足元に置いて他の物を取り出す。

次に出て来たのはなんとみかんの缶詰め。

更に手を突っ込むと栓抜きが付いた缶切りが見つかった。

その後も出るわ出るわ、折り畳み傘3つ、缶切り1つ、みかんの缶詰め5個、白桃の缶詰め3個、釣り糸50mが4つ、ガムテープ2つ、お土産の木刀1振り、2L入る水筒が2つ、招き猫の貯金箱が1つ、手動発電式の懐中電灯が2つ、露天商で売ってそうなアクセサリーが幾つか、他にも大量に出て来た。

最初はミナも物珍しい品に多様な反応を見せていたけど、流石にこの量を前に黙り込んでしまった。

僕も疲れやら呆れやらで、この四次元ポケットみたいな麻袋に手を突っ込むのを止めた。

多分、まだ何か入ってる。だって袋を振ったら中でガサゴソいってるもん。

「ふわぁ……すごいね、これ」

「取り敢えず手分けして倉庫に持って行こっか」

目的の倉庫は教会の隣に建っている。

ちよつと寂れた木造2階建てで、1階は壊れた家具なんかを置いてある所謂粗大ゴミ置き場。2階が余り使わない雑貨なんかを保管する場所。

たまに掃除しているのか、埃が積もっていない階段を2人で登っていく。

大半のガラクタを整理して倉庫に納め、やっと片付いたのは昼近くだった。

ふう、と一息吐いているとミナが一点を見続けているのに気付いた。その視線を辿ってみると、無造作に置かれたアクセサリーの山があった。

——やっぱり女の子だなあ。

なんとなく微笑ましく思い、僕は右手を麻袋に突っ込んだ。

目的の物を思い浮かべて右手を引き抜くと、想像してたのよりちよっぴりオシャレな物が指の間に挟まれていた。

手のひらに隠しながら、僕はミナに声を掛ける。

「ねえミナ、ちよつとこっち向いて」

「え、なあに？」

「いいからいいから。じゃあ目を瞑って左手を前に出して」

要領を得ない僕の言葉に首を傾げながらも、ミナは要求通りに動いてくれた。

ちっちゃなミナの手を両手で優しく包み込み、そっと、それを挿し込む。

「ん。ミナ、もう目を開けていいよ」

少しの不安と沢山の期待が混じった表情で目を開くミナ。
そして左手の中指に光るそれを見て、顔を輝かせた。

「わぁ……!!」

ミナの左手に光るのは銀の指輪。

蔦が絡まり合う装飾が施されていて、控え目ながらも気品のあるデザインだ。

ちなみに何故かサイズはぴったりだった。

「ありがとう、ユーリ♪でも、こんなに立派なの私がもらっているの？」

「うん、ミナにはいろいろお世話になってるからね。いつもの感謝って事で」

「……にへへ、じゃあ私からユーリにお返ししないかね」

そう言ってミナは、屈んだままの僕に照れたような笑顔を見せた。
お返しなんていいのに、って言おうとした僕の口が塞がれる。
頭の後ろと背中に腕を回して僕が逃げられないようホールドしながら、ミナは小鳥が餌を啄むように僕に唇を押し付けた。

「んっ、んちゅ、ちゅっ、はむう、ちゅ、ユーリ、んっ、しゅきい、ちゅっ」

動けない僕を貪るように情熱的なキスをするミナ。

小さな舌が僕の口内を弄り、唾液を舐めとっていく。

んくんく、と白い喉を鳴らして僕の唾液を飲み込む姿に理性が焼き切れそうになる。

僕の唾液を飲み干したミナが一息吐くと、今度はミナの唾液が僕に流れ込んできた。

鼻へ抜ける甘い香りに脳を揺さぶられた。

体が熱い。

今僕にキスをしている、この少女が欲しい。

そんな衝動に突き動かされ、僕は抱きかかえるように腕を回す。

急に動かれ驚いたのか、ミナの体が硬直する。

僕はミナが動かないのいい事に、舌で彼女の口内を蹂躪する。

夢中で舌を伸ばし唾液を舐めとっていると、舌先がミナの舌に触れる。

「んむっ、ふむうっ!? んっ、んくっ、んふううっ♪」

ミナの舌に触れる度、奥からじゅぷつと蜜が溢れる。

溜まった唾液ごと柔らかく小さな舌を吸ってみる。

幼い体がびくんびくんと軽く跳ね、ミナは力無く僕に凭れ掛かった。息が苦しくなって口を離す。

僕とミナを繋ぐ銀色の糸が服に落ち、妖しく輝いていた。

「んああ……っ♪ユーリい、しゅきい……♪」

僕の腕の中でとろけた笑みを浮かべるミナ。

ミナの胸の小さな突起が、服を押し上げていた。
それを摘もうと僕は手を伸ばし――

『ガラーン……！ガラーン……！』

突如鳴り響いた鐘の音に、僕もミナもびくうっ！と身を震わせる。

一瞬、誰か来たのかと思ったけどすぐに思い当たる。

あれは正午の鐘の音だ。

来客用の鐘は建物の中には良く響くけど、教会の隣に併設されているこの倉庫までは音が届かない。

それに若干音色も違う。

「……あは」

びっくりした反動か、どちらともなく笑い声が漏れた。

もうさっきのピンク色な雰囲気は無い。

ちよっと惜しかったかな？と思いつながら、僕はミナに右手を差し出した。

「それじゃあ、お昼ご飯を食べに戻ろうか」

「うん、戻ろう♪」

純真な笑顔で僕を見上げたミナ。

手を繋いで倉庫を後にする。

と、教会の入り口まで来た所でミナは手を離した。

数歩先に行くところと振り返り、僕にだけ聞こえる声で言った。

「……また、しょうね♪」

頬を赤く染めて教会の中へ駆けて行く。

残された僕は顔を真っ赤にしながら、ゆっくりとその後を追った。

だから待つんだ息子よ。君の出番はまだまだ先なんだから。

いや、まあ、ミナとキスしてた時は、僕のズボンに五重塔が建ってたけどさ。

閑話——私の好きな人。

突然だけど、私は今好きな人がいるの。

その人はやさしくてカッコ良くて……ちよっぴりえっち。

顔はかわいくて、髪の毛を伸ばしたら女の子に見えそうなの。

その人の周りの空気もやわっこくて、えっと……にゅ、にゅーわ？
日向ぼっこしてる時みたいにぼかぼかしてるよ！

その人の事を思い出すだけで、ちよっと幸せな気分になっちゃう。
……あ、いけないいけない。

ぼーっとして部屋を通り過ぎるところだった。

そっと扉を開けて、中をのぞき込む。

うん、まだ寝てるみたい。

最近の私の楽しみは、毎朝その人を起こす事。

「ユーリい、朝だよ」

体をゆすってみるけど、すやすやとかわいい寝息を立てたままのユーリ。

パツと起きるのは苦手みたい。

だから私は毎朝、ユーリにちよっぴりいたずらするの♪

「ていっ」

いきおいを付けて指をユーリのほっぺに伸ばす。
むにゅとやわっこい感触。

もちもちのほっぺを触つてると何だか癒される。

そのまま指を下にずらすと、ユーリのくちびるに当たる。

朝だからかな？ちよっと乾燥しててカサカサ気味。

私は振り返って部屋の入り口を見る。

……うん、お姉ちゃんに見られてない。

最初にユーリを起こした時はお姉ちゃんに見付かって、後で怒られちゃったからね。

同じ失敗はしないのっ！

私はドキドキする胸を押さえながら、ユーリのくちびるに顔をよせた。

舌を伸ばして、よだれをくちびるに薄くぬるように舐める。

チロチロ、ペロペロ、時々ちゅっちゅっ。

そんな音を立てて、ユーリのくちびるを味わう。

「はふう……♪」

今日はこれくらいかな。

最後にくちびるを舌でなぞって、ユーリから離れた。

「にへへ、ちゅうしちやったあ♪」

うれしさや恥ずかしさでほっぺが熱い。

ユーリにちゅってすると、ぽわぽわした気分になって、心が気持ちよくなっちゃう。

ちよっと癖になりそうなくらい。

やんやん、ってくねくねしてたらユーリがもぞもぞ動き始めた。

体をやさしくゆすつたら、閉じてた目がゆっくり開く。

「おはよう、ユーリ。朝だよ？」

「……んう……」

「起きないといたずらしちゃうよ？」

もうしちゃったけどね。にへへ♪

ユーリはまだ寝ぼけてるみたいで、すぐに目を閉じようとする。

だから私は布団をひっぺがした。

でもあんまりやったらかわいそうだから、はがすのはお腹の上くらいまで。

「うう……寒いよミナ……」

「ほら、起きたらあったかいよ」

寒そうに体をよじってるユーリ。

そしたら、急に腕が伸びてきて捕まった。

「わわっ、ユーリ!？」

「んう……ミナは暖かいなあ。……よし、今日からミナは僕の抱き枕に決定」

そのまま布団の中に引きずり込まれて、ユーリに抱きしめられる。
あ、ユーリのおいだ……。

ちよっぴりほっぺが熱いけど、なんだか幸せな気持ちになっちゃう。

「……にへへ、ユーリの抱き枕になっちゃったあ」

胸板に顔をこすりつけて深呼吸。

鼻の中いっぱいユーリのおいが広がる。

前にユーリが私にしたのと同じ事をしてみたけど、これはなかなかすごい。

全身にユーリのおいがついちゃう気がして、すごくえっちだ。

「わぁ……私、ユーリのせいでえっちになっちゃったかも……」

って、ユーリ起こさないとお姉ちゃんに怒られちゃうよ！

このまま一日中くっついてたいけど、お姉ちゃんのげんこつは怖いもんね、うん。

ゆーわくを振り払って、私は体を離そうとする。

「わひゃうっ!？」

逃げようともぞもぞ動いたら、がしつと強く抱きしめられる。

そして、ユーリの右手は私のお尻をつかんだ。

そのままむにむにと揉まれる。

「やつ、ユーリっ、んっ、んあっ」

変な声が出る。

なんだか恥ずかしくなって、ユーリに文句を言おうとして顔を上げたら、目を閉じてくーすか寝てた。ほっぺを叩いて起こそうと思っただけど、両腕はガッチリ押さえ込まれてる。

抜け出そうと動いたら、

「きゃふっ、んあっ、あっ、やあん」

お尻をむにむにと揉まれる。

——う、動けないよお……。

鼻からはユーリのおいが入ってくるし、動いたらお尻を揉まれるしで、だんだん頭がぼわぼわしてきた。

結局、様子を見に来たお姉ちゃんに助け出されるまで私は捕まっていた。

私はげんこつ、ユーリはお説教をお姉ちゃんからもらったけど、私にげんこつするのはなんだか納得いかないよお！

それとユーリは私に何をしたのか全然覚えてなかった。

寝ぼけてるユーリにあんまり近付いたらダメ、ってお姉ちゃんにもこっそり教えておいた。

……べ、べつに、ユーリの抱き枕は私だけでいいの、とか思っ
てないよ？

朝ご飯を食べて洗濯物を干し終わって。
お昼までやる事のない私はふらふらと歩いてた。

「……はふう♪」

今日の私はちよっぴりごきげん。

朝に抱きしめられたせいで、服からユーリのおいがいっぱい。
うれしいような恥ずかしいような、不思議な気分。

なんだかユーリに抱っこされてるみたい。

そんな幸せ気分でてくてく廊下を歩いてたら、外から声が聞こえてきた。

窓をのぞくと、ユーリが庭を走り抜けてた。

そういえば、ご飯の後でとれーにんぐをやる、って言ってたつけ。
よく解らなかったけど、あれがきつととれーにんぐなんだよね。

私は庭の入り口の木に隠れて、邪魔しないように観察をする事にした。

「49っ、50っ、51っ」

ユーリは地面に寝転んで、上半身だけを起こしてた。

なんだっけ、ふ、ふ………腹筋？

そうそう、腹筋。

ユーリすごいなあ、腹筋50回も出来るんだあ。

しばらく見てたら、ユーリは庭で一番大きい木の下に座り込んだ。
休憩かな？

朝の仕返しに驚かしちゃおう、って思って、私は足音を立てないよ

うにこっそりこっそり近付く。
後ろまでやってきて、いきおいよく抱きつく。

「ユーリっ♪」

「わひゃあっ!?!」

むぎゅっと腕を回したら、ユーリのおいがいっぱいいい。
ほわぁ……汗くちあいよぉ……♪

ユーリのおいにキュンキュンしてたら、ぐいって体を持ち上げられた。

そのまま膝の上に乗せられて、後ろから抱きしめられる。

頭にぽふり、って温かさが広がる。

くしくしとやさしく撫でられて、思わず顔がとろけそうになっちゃう。

その後2人でユーリの持ってた袋の中身を点検する事にしたの。

最初に袋から出てきたのは、青くて短いぼっこみたいなの。

「これは……折り畳み傘？」

他にも果物の絵が描かれた缶とか、キラキラした首飾りとかいっぱい出てきたの。

もしかしてユーリって商人さん？

……でも、普通はこの袋に入りきらないよね、この量。

実はユーリって整理整頓の達人さん？

次から次へと出てくる中身に、私はぼーんってしちゃった。
それから出てきた荷物を2人で倉庫に運んだの。

ユーリは私に軽い物しか持たせてくれなくて、自分は物がこぼれそうなくらい抱えてた。

時々ふらふらしながら歩いてく姿がちょっとかわいかった。

倉庫の2階で荷物をどさどさーって広げる。

首飾りや指輪だけでもちよっとした山になってるよ。

圧倒されてたら、ユーリに声をかけられた。

「ねえミナ、ちょっとこっち向いて」

「え、なあに？」

「いいからいいから。じゃあ目を瞑って左手を前に出して」

なんだろう？ちよっとドキドキしちゃうなあ。

言われた通り目を閉じたら、左手をやさしくきゅってされた。

くすぐたくてぴくん、ってしてたら何かが中指に当たる。

ユーリがもういいよって言ったから、ゆっくり目を開けてみた。

「わぁ……！」

私の中指に、キレイな指輪がはめられていた。

小さい私の指にしっかりぴったりな大きさの、銀の指輪。

何よりびっくりなのは、

——ユーリが、私の中指に……！

私たちのいる西の大陸では、男の人が女の人に指輪をはめる事には特別な意味がある。

左手の中指はさらに特別。

それは『あなたは私のもの』って意味。

つまり、私はユーリに『結婚してください』って言われたようなものの。

思わず顔が熱くなっちゃうけど、ここで慌てちゃダメ。

多分ユーリは、そういった事……この大陸の文化を知らない。

王国の事も魔法の事も知らなかったみたいだから、きっと別の大陸から来たんだと思う。

だから、これは逆に良い事かも。

今ならキセイジジツを作って、ユーリのお嫁さんになれる。

私はまだまだ子供だし、周りにはお姉ちゃんやエアリイさんもいるから、ユーリはいっぱいゆるわくされちゃう。

でも、私だってユーリが好きだもん！他のみんなには負けないからねっ。

心の中で手をぐって握って、私はユーリに笑顔を向けた。

「ありがとう、ユーリ♪でも、こんなに立派なの私がもらっているの？」

「うん、ミナにはいろいろお世話になってるからね。いつもの感謝って事で」

やっぱり解ってないみたい。

それなら、って私はずるい笑いを浮かべて言った。

「……にへへ、じゃあ私からユーリにお返ししないとね」

その後の事は……にへへ、ナイショ♪

だって思い出しただけで、体が熱くなってぴくんぴくんしちゃうもん。

そうそう、指輪を贈られたら、返事はちゅうでするんだよ！ちゅうして、私の全てをあなたに捧げます、って示すの。

つまりこれで、私はユーリ専用っ♪

だから今度ユーリが、その……さっきみたく、私のおっぱいさわりたくなったら……いい、いいよ？

恥ずかしいから誰もいないところで、ね♪

そんな気持ちも込めて、私はユーリに言った。

「……また、しょうね♪」

閑話——私の好きな人。（後書き）

今回は視点を変えてミナから見た世界を。

子供っぽく見せる為に漢字を平仮名に代えたり、言い回しを素直な表現にしたり……いやあ、難産でした。

そして今回はいつもより短い（もじかい）です。

それでも拙文に付き合って頂いた皆様に感謝を。

お茶会にお呼ばれます。

昼ご飯を食べて、ちょっとした雑用をこなして。

そんなこんなで時刻は午後2時。

何で正確な時間が解るかと言うと、袋から腕時計が出て来たから。

耐水耐圧耐衝撃が売りのゴツいやつだ。

取り敢えずアレは『四次元麻袋』ってあだ名を付けよう。

話を戻して、今僕は部屋の中にいる。

これまた四次元麻袋から出て来た、多分この世界風の衣服を着込んでいるからだ。

黒を基調として、肩から袖口まで蔦柄の刺繍が施されたシャツと、同じく黒の下地と側面に金の蔦柄が走るズボン。更にはこの編み上げ靴まで黒だ。刺繍はないけど、代わりに靴紐が金色。

——いやいや、派手っていうか趣味悪くない？

コスプレとかなら格好いい服装かも解らないけど、一市民が着る服装としてはかなり異彩を放ってる。

確かに、僕が最初に着た学生服は背中がバックリ裂けてるし、亡くなった神父さんの服を借りっぱなしって訳にもいかない。

でも、だからってコレが代案ってのはどうだろう。

そんな事を考えてると、ドアをノックする音が聞こえてくる。

「ユーリさん、準備出来ましたか？」

「一応出来たけど……笑わないでね」

僕の声に、頭に？を浮かべながらシーナがドアを開けた。

シーナは僕の姿を見て、部屋の入り口で息を呑み固まってしまった。

——そりゃそうだよなあ。幾らファンタジーな世界でもコレは無いよなあ。

気恥ずかしさで頬に血が集まるのを自覚しながら、どうしたもんかと頬をぽりぽりと搔く。

と、固まっていたシーナがぽつりと呟く。

「……素敵です……」

「へっ？」

「あ、いえっ！何でもないですっ」

何だろう？つい「キモッ」とか「ダサッ」とか口に出ちゃったのかな。

……考えてると悲しくなるから止めよう、うん。

それにシーナは良い子だからそんな事言わないもんね！

や、まだ年聞いてないけど多分僕とそう変わらないと思う。

同世代の娘さん捕まえて良い子も無いか。

取り敢えず現実逃避を止めて真実へ一歩踏み出してみる。

「えっと……ど、どうかな？」

意を決して聞いてみる。

願わくばポジティブに受け取れる罵倒でありますように！

「服の落ち着いた気品がユーリさんの魅力を引き立てていてすごく格好いいですよ。おとぎ話に出て来る勇者様みたいです」

——イイイイヤッホオオオオイ！

まさかの全肯定きたあああ！

お世辞でも何でもいい、罵倒じゃなかったから何でもいい！
嬉しさの余りシーナの手を握りぶんぶん振りたくる。

「ありがとうシーナ！」

「きゃー！？えっと、あの……どういたしまして？」

シーナは戸惑ってるみたいだけど、今は僕の感謝を受け取って欲しい。

小さい頃から妹の着せ替え人形役をやっていた成果がここで出たのかな。

妹よ、天国から見てるか？お兄ちゃんは妹のおかげで格好良くなれたよ。

あ、いけない。妹の事思い出したら涙がちよきれそうだ。

今度は突然しんみりしだした僕に、シーナは更に戸惑いを深くした。

「あ、あの、ユーリさん？」

「ん、ああ、大丈夫。ちよっと色々思い出しちゃったただけだから」
「そう、ですか？」

握ったままだったシーナの手を離す。

細くて白くて小さな手。

細工品のような、って言葉はシーナの為にあるんだなあ。

そんな風に思いながら、僕はシーナに思い付いた事を言う。

「先にミナと外で待っててもらえる？」

「どうかしたんですか？」

「せっかくだから、お土産持って行こうと思って。勿論2人の分もあるよ」

「私達にはそんな気を使って頂かなくても……」

「いいからいいから。じゃ、ちよっと行ってくるね」

何か言いたげなシーナを残して、僕は倉庫へ向かう。

ふっふっふ、3人共喜んでくれるかな？

ニヤニヤしながら階段を駆け下り、教会の玄関を抜ける。

朝より数段傾いた太陽に出迎えられ、一瞬だけ目が眩んだ。

すぐに目は慣れ、倉庫の古びた扉を開けて、階段を上へ。

とんとんとん、とリズムを刻みながら2階に到着。

あったあった、みかんに桃……ついでにパインもあった方がいいかな？

僕は倉庫の隅に置いておいた麻袋に手を突っ込み、無造作に中の物を掴み取る。

うん、あったあった。

目的の物を腕に抱えて、僕のニヤニヤは更に濃くなった。

3人の――特にエアリィさんのびっくりする顔を早く見てみたいなあ！

「3人共、いらっしやい。今か今かと待ちわびたよ」

「エアリィさん、今日はお茶会に呼んで頂きありがとうございます」

「はっはっは、相変わらずだなシーナ君は。もっと気さくに話してくれても構わないよ？」

「エアリィさん、こんにちは！」

「こんにちは、ミナ君。今日も元気いっぱいだね」

「さつき振ります。あ、これお土産です。みんなで食べましょう」

「ああ、わざわざ済まないね。ありがたく頂くとしよう。……それはそうとユーリ君、すごい格好だね。王国の舞踏会にでも出るのかい？」

「うぐっ。に、似合ってますか、やっぱり」

「いやいや、余りに素敵なのでね。貴族様よりも格好いいよ」

そんな会話を交わしながらエアリィさんの家にお邪魔する。

出迎えてくれたエアリィさんは朝の時とは違って、薄い水色のワンピースを着てた。

清楚な雰囲気と柔らかな微笑みが合わさって、どこかのお姫様みたいだ。

家も4LDKくらいありそうなログハウスで、小綺麗な内装が落ちていた雰囲気醸し出してる。

もうお茶の用意はしてあったようで、いい匂いが漂ってくる。

「まあ、掛けて待っていてくれ。すぐにお茶を持ってくる」

「あ、僕もお手伝いしますよ。お土産も広げようと思いますし」

「そうかい？じゃあミナ君とシーナ君はそのまま座っていてくれ」

足取りも軽やかなエアリィさんに続いて台所へ。

お茶会が余程楽しみだったのかひどくご機嫌な様子。長い耳もピクピク動いてるし。

触りたいなあ。ハムハムしたいなあ。

と、僕の邪な視線に気付いたのかエアリィさんが振り返る。

どうしたんだい？と微笑みを浮かべて僕を見る姿が、もうたまらんです。

「ちょっと大きめの器を3つと、フォークを人数分お願いします」

「ああ、解った」

僕はみかんの缶詰めを手にとると、缶切り片手に開け始めた。

きこきこきこ、と軽快なリズムに乗せて鼻歌なんかも歌っちゃってみたり。

「集え、銀河の守護神、♪砕け、悪の野望を、♪」

「なかなか勇ましい歌だね、ユーリ君。何を謳い上げた曲なんだい？」

「全てを手に入れるんだ……♪あ、これですか？この曲は昔妹が僕のテーマソングとして作ってくれたんですよ」

「そうだったのかい？いやはや、才能に溢れた妹君だね」

ちょっと自慢げになる。

妹はかわいくて賢くて優しくて、まるで天使みたいな子だった。絵も上手だし声も綺麗だし作詞作曲も出来て運動も得意。

その上僕を「おにいちちゃん」って慕ってくれたし。

え、シスコン？ハハハ、何をおっしゃる。

っと、もう一周してみたいで缶の蓋が上がっていた。

手を切らないように注意しつつ、蓋を開けて木のボウルに中身移す。

うん、まずみかんは出来上がり。

エアリィさんを見ると、目をキラキラさせてみかんを見ていた。

「ゆ、ユーリ君っ。この美味しそうなのは一体何だいっ？」

テンションが振り切っているのか、少し語尾に力が入ってる。

なんて言うか、初めて見るご馳走を前にした子供みたいですごくかわいい。

「これはみかんっていう、僕の国で一般的に食べられていた果物をシロップ漬けにしたものですよ。他にも桃とパイナップルって果物も持ってきました」

「なるほど、これは、その、ううむ。いや、はっきり言おう、早く食べたい！」

言いながらも目はみかんに釘付けなエアリィさん。
実はちょっぴり食いしん坊さんなのかな？

なんて事を考えながら、僕は桃の缶詰めに手を伸ばした。

開けて中身を移す度に、エアリィさんは黄色い悲鳴というか、感嘆の声を上げる。

どの世界の女の子も、果物には弱いんだなあ。

予想以上にかわいい反応を見せるエアリィさんを微笑ましく思いながら、僕は缶詰めの空を片付け始めた。

「ずいぶんと盛り上がっていたみたいですね……え、何ですかこれ？」

「ん、なんだか甘い匂い……ほわぁっ、ナニコレ!？」

器を持ってリビングに戻ると、2人共目を丸くしてた。

やっぱりこの世界の食べ物と地球の食べ物は少し違うみたいだ。

シーナはフォークで桃をつんつんして、ミナはパインに鼻を近づけて匂いを嗅いでる。

エアリィさんは待ちきれない様子で視線をみかんに向けながら、香草茶——多分ハーブティー的なものを注いでいる。

やばい、みんなかわいすぎて鼻血出そうだ。

取り敢えずみんなにお茶が行き渡ったのを確認して、フォークを握らせる。

「今日集まってくれた皆に精霊の祝福があらん事を……。待ちきれん、突撃だ!」

「おー!」

ファンタジー特有の、食べる前に捧げるお祈りが見れるかと思った
らそんな事はなかった。

勇ましくフォークを握り締めるエアリイさんと、腕を振り上げてノ
リノリなミナ。

シーナなら修道女だし真面目にお祈りしてるハズっ、と目を向けた
ら既にお祈りを終えて臨戦態勢だった。

いやいや、何倍速でお祈り終わらせたのん？

女の子パワーに圧倒されて若干言葉が怪しくなる僕。

シーナは桃を小さく切り分け、とても上品に食べている。

うん、お嬢様っぽくてかわいい。

ミナは口いっぱいパインを頬張ってる。

なんだかりスみたいでかわいい。

エアリイさんは、みかんをいっぺんに5個くらいフォークに刺して
口に放り込んで、幸せいっぱいな顔でもぐもぐしてた。

やだ、なにこのかわいいイキモノ。

今日はエアリイさんの破壊力が半端じゃないなあ、とみんなを見て
ヘラヘラ笑いながら、僕は温くなった香草茶をすすった。

「で、取り敢えず今日はみんなに僕の事を知ってもらおうかと思う
んだ」

果物との死闘も終わってまったりとした空気が流れ始めた頃、僕は
そう切り出した。

その言葉にエアリイさんとシーナは姿勢を正すけど、ミナはへにや
つと首を傾げる。

「ユーリの事？」

「そうそう、僕の事。例えば……ミナは僕が、別の国から来たって言ったら信じる？」

「うん、ユーリの事ならなんでも信じるよ！」

いや、嬉しいけどね、そうじゃないんだよ。

聞き方を間違えたかなあ、と頬をぽりぽり搔いているとシーナが助け船を出してくれた。

「確かに、この国に住む方なら知っている事を、ユーリさんはご存知無かったですからね。異国の方と考えるのが自然ですね」

「ありがとうシーナ、まあ、言いたいのはそのう事。で、こんな事言ったら冗談だと思われるかもしれないんだけどさ」

僕はみんなの顔を見渡して、爆弾を投下してみた。

「もし、僕が『別の世界』から来たって言ったら、信じる？」

うわ、みんなぼかーんってしてる！

そりゃそうだよなあ、いきなり異世界人です、なんて言われてもなあ。

何言ってるんだコイツ的な視線を向けられて、最悪脳に蛆が湧いたって思われるのがオチ……いやいや、みんなを信じるんだ。

果物であんな幸せそうに笑う女の子達ならそんな酷い事は言わないハズ！

戦々恐々としながらみんなの様子を窺ってみる。

ミナは、僕が何を言っているのか解っていないみたい。

そもそも別の世界って何？って顔してる。

シーナは軽くパニックになってるみたい。

うん、その気持ちはよく解るよ。最初僕もパニックだったからね。

エアリィさんかというと、何やら考え込むように僕をじっと見てた。

あ、その目で僕を見ちゃダメ、なんかゾクゾクきちゃう。

「そう言ったって事は、ユーリ君自身そう思える理由を見つけたのかい？」

おおっ、エアリィさんひょっとして信じてくれた！？

ちよっと感激しながら、僕は口を開いた。

「僕の世界と違う所を見つけて、そう考えたんです」

「違う所、とはなかなか抽象的だね。例えば何が違ったのかな？」

「そうですね、一番の違いは……この世界に魔法がある事、ですかね」

僕の言葉に耳をピク、と動かす。

反応が解りやすくていいな。

「僕のいた世界では魔法は空想の産物でしかありませんでした」

「それは大きな違いだね。少なくとも、私からしてみれば魔法が存在しないなんて信じられないよ。空気と同じ、在って当たり前のものだからね」

「それから、エアリイさんみたいなエルフもいません。会話が出来る程の知性を持った生物は人間しかいません」

「それは……絶滅した、という訳ではなく？」

「ええ、最初から人間しか種族として存在していません」

ううむ、と考え込むエアリイさん。

別の大陸にもエルフや獣人なんかが大勢いるって話だし、全体から見ると少数民族な人間しか存在しない世界ってものが想像付かないんだろう。

「ただ、幾ら僕が自分の世界と違う所を並べても、僕が異世界人だと証明するのは難しいですけど」

「え、何ですか？」

それまで聞き役に徹していたシーナから疑問の声が上がる。

答えようとした僕より早く、エアリイさんが綺麗な声を響かせた。

「簡単な事だよ、シーナ君。彼は自分の世界と私達の世界、両方を知っているから2つの世界が違うものだ判断出来る。しかし私達は彼の世界を知らないから、私達の世界を基準にする事でしか思考出来ない。つまり、彼がどんなに説明しても、私達からしてみれば証拠の無い作り話にしか聞こえない、という事だよ」

僕が言いたかった事を完璧に全部言われちゃった。

流石エアリィさん、知的な所も素敵です。

ただ、ミナが睨むような視線を向けているのが心苦しい。

最初から僕を全肯定してくれるミナにしてみたら、今のエアリィさんの話は僕の言葉を信用してないって取れるからなあ。

……いや、僕もエアリィさんがどう思ってるのか解らないからドキドキだけだね。

「エアリィさんの言う通り、僕が異世界人だって証拠が無いんだ。異世界が在るって証明する方法も解らないし」

「おや、証拠ならここに在る……在ったじゃないか」

「へ？」

微妙に言い直して、エアリィさんは空になったボウルを指差す。

そこに在ったもの……みかん？

「私の知る限り、どの大陸にもこんなに美味しい果物は無いよ。それにこれが入っていたあの缶。あれを作る技術も、この世界には無いものだ」

ああっ、言われてみれば！

さっきまで散々その事でニヤニヤしてたのに、すっかり忘れてた。みんなの笑顔がかわいかったせいにしておこう。

ん？という事は……、

僕の視線をいたずらっ子のような笑みで受け止めるエアリィさん。

「ふふ、意地悪な言い方をしてすまなかったね。いやなに、存外君が困ってる姿がかわいかったのね」

「あぁっ、エアリィさん僕をからかってたんですね!？」

「ははは、許してくれないか。ただ、私は最初から君の言う事を信じていたよ?」

そう言って手を合わせ上目遣いに僕を見るエアリィさん。

そんな事で騙されな……騙されました。

だって反則級にかわいいんだもん! あぁ、こうやって男は女の子に騙されていくんだなぁ。

そんな事を考えていると、ミナが僕の膝に座り抱き付いてきた。

そのまま首だけエアリィさんに向けて、威嚇するように睨んでいる。

「ユーリをいじめたらダメなの!」

ミナの健気な言葉に僕のハートは撃ち抜かれた。

もう、ズギューンって。

頭を優しく撫でると、くすぐったそうにすり寄ってくる。

慌てたのはエアリィさんだ。

「い、いや、いじめた訳ではないよ?」

「でもユーリを困らせて笑ってたもん!」

「そ、それはなんと言うか、ミナ君もかわいいと思わなかったかい?」

「それとこれは別なのー！」

あ、ミナも思っただ。

言っとくけど、男にかわいいは褒め言葉じゃないんだからね？

やいのやいのと賑やかになる2人とは対照的に、シーナは黙ったままだ。

どうしたんだろ？と首を向けてみると、丁度顔を上げたシーナと目が合った。

「なるほど……ユーリさんは異世界人だったんですね」

「え、いまさら！？」

マイペースさんめ。

意外とシーナって天然さん？

普段しつかりしてるから、こういうシーナはなんか新鮮な気がする。取り敢えず収集が付かなくなったから、僕は香草茶をすすってまったり流れに身を任せる事にした。

投げっぱなし？勿論。

ハハハ、流されるのは得意なんですよ。

場所を移して教会の裏庭。

あの後僕に魔法が使えるのか気になって、エアリィさんに教えてもらう事になった。

すぐに仲直りしたみたいで、ミナはエアリィさんと一緒に的を準備

してる。

仲睦まじい2人を見てると和み度数が半端じゃない。

シーナはと言うと、万が一の時の為にライブの杖と傷薬、それに包帯なんかも用意しておくって教会の中へ引っ込んでいった。

大げさに思えるけど、失敗したらそれだけ危険って事だよね。

よしっと気合いを入れて、僕は気持ちを新たにした。

丁度準備も終わったみたいでやり遂げた感を滲ませながらミナが駆け寄ってくる。

そのままぽふって抱き付かれ、ミナは褒めて褒めて、としっぽを振る子犬みたいにじゃれついてきた。

頭をくしくし撫でると気持ち良さそうに目を細める。

「はぁ……癒されるわぁ」

「にへへ、ユーリの手やさしいから好き♪」

ミナを撫でているとエアリイさんも僕の元へやってきた。
ほぼ無意識に手が伸びて、

「うなっ!？」

気付くと僕の右手はエアリイさんの頭に。

ナデナデナデナデ。

さらさらの髪の毛は手触りが良くて、いつまでも触っていたくなる。
っていうか「うなっ」って。

エアリイさん猫みたいな声上げたね。かわいいからいいけど。

——って、僕は何をやってるんだ!?

つい勢いのままぬエアリィさんの頭撫でてたけど、ひょっとして怒ってるかな?

うわぁ、エアリィさん俯いて肩ふるふるさせてるし。

ていうか、大人の女性を子供扱いしちゃ怒るよね、普通。

あ、でも撫でると気持ち良いや。

なでなでなでなで。

勿論左手でミナを撫でるのも忘れない。

おおう、両手が幸せいっぱいだ。

「——何してるんですか、ユーリさん」

突然背後から聞こえてきた声にびくうっとする。

振り向いたら半目で僕を見るシーナの姿が。

「いや、えっと、なんていうか」

からからから。

いい感じに僕の頭は空回りを披露した。

別にやましい事をしてた訳じゃないから慌てなくてもいいけど、小心者でチキンな僕はこういう時に思いつ切り慌てる。

シーナは溜め息を吐いて、腰に手を当てるとお説教を始めた。

「いいですかユーリさん、年上の方を子供扱いしてはいけません。ミナのように小さい子ならまだしも、エアリイさんのように大人の方の頭を撫でるなんて失礼ですよ。まだエアリイさんだったから良かったですけど、貴族様相手にやってしまったら不敬罪で投獄される事もあるんですから。だいたいユーリさんは礼儀を知らなすぎます。異世界人だからといって、全てが許される訳ではありませんからね。丁度いい機会です、この際礼儀作法をみっちり教えてあげます」

うわぁ、シーナのマシンガンお説教タイム始まったよ。
スイッチ入ると途端に喋り出すんだよねえ。

「い、いや、シーナ君。せっかくだけど、今は魔法の練習だから、その話は夕食後にでもじっくりやってくれないか？」
「む、そうでしたね。仕方ありません、お説教はまた後でやりましょう」

ナイス、エアリイさん！

お礼に後でみかんの缶詰めと缶切りをあげちゃう。

ミナは僕の陰に隠れて様子を窺ってた。シーナのげんこつ痛そうだったもんね。

取り敢えずシーナも引き下がったくれたし、心置きなく魔法の練習が出来る。

ミナも僕から離れて、後ろの長椅子に座って足をぶらぶらさせてる。

「それじゃあ、やり方を教えるよ。まずは体を楽にしてみてください」

言われた通り全身から無駄な力を抜く。魔法の練習、って聞いて思わず体が緊張してみたい。

「次に意識を体の内側に向けるんだ。目を閉じると集中しやすいかもしれないな。全身の血流を感じるように、指先、腕、足先、太腿、背中、首、心臓なんかを意識してみるといい」

目を閉じて意識を巡らせてみる。

血流を感じる、ってどんな感覚なのかな？

運動した後には耳の血管がドクンドクン煩く鳴るような感覚かな。

あれだったらイメージしやすいんだけど。

まあ、試しにやってみよう。合ったらエアリイさんがなんか言ってくれるはずだし。

最初は心臓から。首、左腕、両足、右腕って順番に意識を広げていく。

「すごいな、ユーリ君は。もうコツを掴んだようだね、今度はその感覚を指先に集めるように意識してごらん」

やっぱりあの感覚で合ってたみたいだ。

今度はそれを指先に集める……何かイメージが有った方がやりやすいよね。

なんかそれっぽいイメージ……あ、魔○光殺砲でいいか。

指先に意識を集めて、と。
なんだか指先が熱を持ってきた気がする。

「充分出来たと思ったら、指先を対象——あの的に向けて、使いたい魔法を唱えるんだ。ファイアーの魔導書があるから、これを使ってみると」

「ファイアー！」

あ、なんか先走って呪文唱えちゃった。

さっきミナとエアリィさんが木の枝を組み合わせて作った人形の足の元から、高さ2mくらいの火柱が上がる。

でもすぐに炎は消えちゃって、失敗したかな？って思ったんだけど、よく見たら炎が燃え尽きてて灰一つ残って無かった。

——うわぁ……ファイアーって名前でしょぼいの想像してたけど、威力凄まじいなあ。丸く地面禿げてるし。

なんとも言えない表情でエアリィを見ると、真っ青な顔をしていた。

え、もしかしてなんかマズかった？

「……ユーリ君、正直に答えてくれ。今、君は、何をした？」

「え、えっと、言われた通りのを狙って呪文唱えただけなんですけど」
「質問を変えよう。君は今、魔導書を持っていたりしないかい？」

「持って無いです……っていうか、魔導書無いまま魔法使えちゃい

ました」

「……そう、か。いやはや、つくづく君は私を驚かせてくれるね」

感心半分呆れ半分、といった感じでエアリィさんは苦笑を浮かべた。僕も自分にちよつと呆れてるけどさ。

この世界の理を無視して、理魔法を放つてのもどうなんだろう。理魔法といえば、この世界の魔法ってファイオーエブレムっぽいよね。

でもエルフや獣人もいるし、まるつきり同じじゃないよねえ。

その内マムクートとか出るのかな？

竜族の女の子とかかわいいんだろぅなあ。

しかも合法ロリかぁ……ごくつ。

「……いや、信じらんない気持ちは解るがそろそろ帰ってきたまえユーリ君」

おっと、現実逃避してたらエアリィさんに怒られちゃった。

失敗失敗。

「取り敢えず、この魔導書を渡しておくよ。誰かに見られてもこれで言い訳出来るだろうからね」

「ありがとうございます。まあ、極力誤魔化すか使わない方がいいですよね」

「加えて異世界人だというのも黙っていた方がいいだろうね。心無い人が聞けば研究の為に飼いや殺しにされるか、危険だと思われて命を狙われるか」

「うへえ……おっかないですね」

一気に話が血腥くなってきた。

ゲームなら幾らでも返り討ちにしてきたけど、現実として降りかかると考えたくも無い話題だね。

それにしても、つくづくテンプレだなあ。

異世界に飛んだらチート級の魔法が使えるとか、周りは美少女ばかりだとか。

まあ、今日の所は平和に終わりそうだし、特に心配は無いかな。

「山賊だ！山賊が出たぞお！」

ああ、もう！

どこまでテンプレな展開が続くんだよお！

したくなかった初体験です。

山賊が現れたって聞いて、村は大騒ぎだった。

村の自警団が防衛と迎撃に出るようで、エアリィさんもそっちへ向かった。

僕はと言うと、村人の避難誘導と教会の警戒に当たっていた。

いやいや、怖くて戦場なんか行けないって。

足腰の弱いお婆さんを背負って教会へ運んだり、鳴子を設置したり。僕に出来る精一杯の事をやる。

本当にいざとなったら……魔法で、山賊をやっつける。

出来れば戦いたくもないし、その辺の事は考えたくもない。

シーナとミナは教会の中に避難させて、村のみんなと待機させてる。今は村の東側から山賊が攻めて来ているみたいだけど、こういうパターンの戦いだとか北の森を抜けてくるはみ出し者が1人くらいいるんだよね。

——って、落ち着け僕。思考が分裂し始めてるじゃないか。

色んな事を思い浮かべては考える前に別の事を思い浮かべて気を逸らす、僕特有のパニックだ。

普段ならいいけど、今はそれが命に関わってくる。

だから僕は深呼吸をして無理矢理にでも落ち着く事にした。新鮮な空気が肺を満たして、少し頭が冷える。

——よしっ、ちょっと落ち着いた。

妙な緊張で強張っていた右手の握り拳をほどく。

大丈夫、いざとなったらファイアーで脅かしてやればいいんだ。

流石に持っている武器が手元だけ残して燃え尽きたらびっくりするだろうし。

それに上手く撃退出来たら、ミナがキスしてくれたりして……？

でへへ、と妄想に頬を緩ませる。

おっといけないいけない、ちゃんと警戒しないと。

敵なんか来る訳無いって決めつけてる歩哨は間違い無くスナイポさ
れてお陀仏だし。

でもエアリィさんは大丈夫かなあ？

心配はいらないよ、って僕に微笑みながら弓と矢束を背負って家の
外へ。

その姿が格好良くてちよつと憧れた。

凛々しいエアリィさんもいいなあ。

僕がまだ避難してない村人を探しに出た所で、村の入り口で弓を使
える数人と合流して引き連れて森の中へ向かうエアリィさんを見掛
けた。

なるほど、森の中から弓を射掛ければ、すぐには見付からないだろ
う。

自警団の人達は鉄板をくつつけまくった、ガチムチアーマーみたい
な鎧を着て行った。

あれならレイピアでも使われない限り致命傷は負わないだろう。

まあ山賊がレイピアなんて持ってないよなあ。手斧を振り回してそ
うなイメージがある。

——つと、また思考が走ってるよ。落ち着けて僕。

妙な高揚と緊張が混ざって、自分じゃどうしようも無いくらい浮き足立ってる。

やっぱり僕ってチキンだなあ……って、ちょっと自嘲してみる。シーナや、ミナだって取り乱さずに他の人達を気に掛けていたっていうのに、僕は見えない何か相手に独り相撲状態だ。

そんな落ち着かない時間が、5分、10分と過ぎた頃。

『カランカラン!』

一瞬息が、心臓が止まる。
来た。

鳴子が響いたのは教会の裏手に広がる、ちょっとした藪の中。
震える足を叱咤して教会の裏庭へ急ぐ。
教会をぐるっと囲む2mくらいの塀を、勢いを付けてよじ登る。

『ヒュン!』

「うわぁっ!?!」

目の前を何かが通り過ぎる。それに驚いてバランスを崩し、地面にべちゃっと落ちた。

この地面に這いつくばる感じ、久し振りだなあ。

っと、ふざけてる場合じゃない。

一歩間違ってたら死んでたね、アレ。

立ち上がって前を見ると、筋肉ムキムキでスキンヘッドで煤けたタンクトップとズボン姿の男性が1人。

「うわ、テンプレ通りの山賊だ」

「あぁん!？」

「柄も悪いなあ、って山賊だから当たり前か」

ある種の感動を覚える。

山賊は右手に切れ味の悪そうな大きい手斧を提げて、僕を見てニヤニヤ笑い出した。

「辺境の村に貴族の坊ちゃんとはツイてるぜ。たんまり金が手に入りそうだ」

え、貴族？どこにそんな人が？

キヨロキヨロと辺りを見渡すけど、そんな人は見当たらない。

ああ、貴族って僕の事か。やっぱりこの服一般的な服装じゃないんだよ、きつと。

ちよっと天然だった僕の行動を、山賊は素敵に勘違いしていた。

「残念だったなあ、お前の味方は誰もいないぜ？逃げ道も無いようだしなあ」

下卑た笑い方をする山賊。

あれが俗に言う悪い笑みかあ、僕には真似出来そうにないなあ。ともあれ、油断している今がチャンスだ。

1回だけなら奇襲も出来るし、上手くいけば退かせる事も可能だ。

——よし、落ち着け僕。絶対に成功させるぞ。

出来るだけ体を動かさないように意識しながら、少しずつ指先に感覚を集中させる。

さっきの練習の時よりも、強い熱と鼓動を感じる。

狙いは右手に持つ手斧。

しっかりと見据えて言葉を放つ。

「ファイアー！」

僕の掛け声と同時に、山賊の右手に火柱が上がる。

でもそれは一瞬で掻き消える。

僕のように注視してなければ視界に赤いフラッシュが焚かれただけにしか見えないだろう。

そこから、更に動きが生まれる。

手首から先を失った腕が跳ね上がる。それまで支えていた重さが手首毎無くなった反動だ。

「うおあっ！？な、なんだこりゃあ！？」

跳ね上がった自分の腕の動きに、次いで自分の手首から先が消失している事に顔を驚愕で歪める山賊。
間髪入れず、僕は声を張り上げた。

「今のは脅しだ！大人しくしないと、次は命を失うぞ！」

声が震えなかった自分を褒めてやりたい。

だって、あんな、手首から先が無くなるとか思って無かったし！

やだよお、グロいよお、威力高過ぎだってば。

断面は炭化したのか真っ黒だし。

出血は無いみたいだから、遠目から見たら特撮の特殊メイクに……
ごめんなさい、無理です。見えません。

胃から上がってくる酸っぱい液に辟易しながら、僕は山賊を睨み付けた。

勿論視線は山賊の眉間に集中させる。じゃないと吐きそう。

対する山賊はまだ何が起きたのか理解出来ていないみたいで、目を白黒させている。

けど、僕がファイアーの魔導書を構えているのを見て、何が起きたのか悟ったようだ。

忌々しげに僕を睨み返す山賊。

「てめえ、舐めた真似してくれるじゃねえか！」

「っ、動くなっ！」

わざと魔導書を前に突き出すように見せる。けど山賊はそんなのお構いなしに、僕へ突っ込んできた。

「うわあっ!？」

「このガキ、ちょこまかと！」

「ちょ、ま、危ないって！」

僕の首くらいある太い腕を振り回す山賊。

それを不格好だけど何とか避けていく。

冗談じゃない、あんなの当たったら肋骨折れるって！

山賊は怒り狂って僕を殴り殺そうと腕を振り上げる。

顔や脇腹を拳が掠める度、新たな恐怖が湧き上がってくる。

初めの内はまだ機敏に反応出来たけど、怖くて体が言う事を聞かなくなってきた。

ぎりぎりの所で避け続けるけど、遂に壁際へ追い詰められた。

「手間掛けさせやがって。悪あがきもここまでだ！」

ヤバい、逃げたくても膝に力が入らない。

恐怖と疲労で地面に張り付いた両足が、がくがく震えだした。

いきなり濃厚に薫りだした死の臭いに僕の思考は恐怖一色に染まる。

左腕を振り上げる山賊。

眼前に迫り来るそれを、僕は混乱と恐怖に塗れた眼で見ていた。

『――ヒュン』

突然生まれた音と共に、山賊の左腕が左に逸れる。

僕の顔を掠めて背後の壁に当たった衝撃が背中を伝う。多分扉にはヒビが入ったんじゃないだろうか。

目に飛び込んできたのは山賊の肘に刺さった一本の矢。

さっきの音は矢の風切り音だったみたい。
不意に山賊の体が揺れて、そのままぐらつと地面に倒れ込んだ。
その側頭にもう一本矢が刺さっていた。

「大丈夫か、ユーリ君っ!？」

聞こえた声に、僕はやっと状況を理解した。
右へ振り向くと弓を持ったまま駆け寄るエアリイさんの姿が。
ああ、エアリイさんが女神様に見える。

「怪我は無いかい？向こうは片付いたから様子を見に来たんだが、
間に合って良かったよ」

ぺたぺたと僕の体を触って怪我が無いか確認する。
傷を負ってないのが解りほっとした笑みを浮かべるエアリイさんを見
て、僕の緊張の糸が切れた。
思わず両手を広げてエアリイさんに抱き付いた。

「エアリイさあゝん！」

「な、わ、ユーリ君っ!？」

「怖かったよお。殺されるかと思ったあ」

「だ、大丈夫、ユーリ君をイジめる奴は私が成敗したから!だから、
その、ユーリ君っ、落ち着いてくれ」

「大丈夫?怖いのではない？」

「あ、ああ、大丈夫だよ」

「えへへえ、エアリィさん強くて優しいから好き」

「うなっ!? ちょ、待ってくれ、ユーリ君っ!?」

「むぎゅう」

「……………っ!?」

……はい、落ち着きました。

さっきの僕は黒歴史なので忘れて下さい。忘れろ、忘れるんだあ！……まあアレだよ、恐怖の反動でちょっぴり幼児退行しただけさ。

今じゃすっかり落ち着いて普段通りの僕に戻ったさ！

って言いたいけど、僕は今エアリィさんに背負われてる。

情けない事に腰が抜けて立てないんだ。

色々恥ずかしい所も見せちゃったし、エアリィさん呆れてなかったらしいなあ。

「ユーリ君、もっとしっかり掴まってくれ。落ちてしまうよ?」

「ああすいません。重くないですか?」

「軽過ぎるくらいだよ。まるで女の子みたいだ」

女の子みたい、かあ。

ちょっぴりショックを受けつつ、僕は前に回した手をエアリィさんに巻き付けるように動かしてしがみついた。

「きゃん!」

かわいらしい悲鳴と左手の掌に広がる柔らかく幸せな感触。
擬音で表すなら、もにゅっ、と言った感じ。

ちようど掌にぴったりフィットする大きさで、沈み込んだ指を優しく包む弾力性。

——これはまさしく、おっぱい！

って、幸せに浸ってる場合じゃない。

ただでさえ格好悪い所を見せてるのに、この上エロ魔神だなんて思われたらエアリィさんに嫌われちゃうよ！

慌てて手を退けようとするより一瞬速く衝撃が左手首を襲った。

『バリン！』

突然の衝撃に僕もエアリィさんも驚いて後ろに倒れ込む。

あ、エアリィさんの髪からいい香り。

思わずまったり仕掛けた僕の目に映ったのは、左手首の時計に突き刺さった鉄の矢。

液晶が割れ中部まで食い込んでいるけど、底部の板に遮られて僕の手首には傷一つ付いて無かった。

慌てて矢の飛んできた方を見ると、森の中で大柄な男が僕に弓を構えているのが見えた。

恐らく山賊の一味だろう。

僕達が無傷なのを見て次の矢をつがえ始めた。

——今の矢、エアリィさんを狙ってた？

結果的に僕の時計に命中したとは言え、それはイレギュラー。最初に狙ってたのはその奥、エアリィさんの心臓付近だ。

——アイツは、エアリィさんを殺そうとした？

僕の冷静な部分が早く逃げろ、って叫んでる。

エアリィさんを担いで物陰に走れと悲鳴を上げる。

でも、アイツが何をしようとしたのかを理解した時、僕はぶち切れた。

——許さない。

上体を起こしてアイツを睨み付けた。

頭から熱が全身に回って、燃えているような感覚が広がる。

アイツから僕を庇おうと動くエアリィさんを優しく抱き締めてその動きを封じる。

今なら全身に流れる魔力を感じられる。

アイツがつがえた矢が空を疾りながら僕の頭部へ向かう。

「ユーリ君っ！」

叫ぶように僕の名前を呼ぶエアリィさん。

鏃が僕の額数c mまで迫って、そのまま消失した。

なんの事は無い、鏃から順に熱で蒸発させてやっただけだ。

周囲に汗ばむ程の熱が広がり、一瞬で収束する。

僕の胸の辺りから見上げるエアリィさんは、今日の前で起きた事が理解出来ないのかポカンとした顔をしていた。

そっと抱き寄せ、長い耳に口を寄せて囁く。

「大丈夫、エアリィさんには傷一つ付けさせないから」

視線を外しアイツを睨み付ける。

今の芸当を見て分が悪いと悟ったのか、こちらを警戒しながら撤退を始めようとしていた。

逃げられるとでも思ってる？

エアリィさんを傷付けようとした報いは受けて貰わないとね。

出来る限り苦しんで死ぬような魔法がいいなあ。

暗い思考を巡らせていると、一つの魔法が脳裏に浮かぶ。

ある程度離れて大丈夫だと思ったのか、アイツは背を向けて駆け出す。

その背中へ落とすように、僕は呪詛を呟いた。

「ノスフェラート」

言い終えると同時、アイツの周囲に紫色の暗い炎が浮かび上がる。
人の頭程の大きさを持つ炎は五肢に喰らい付くようにアイツへ殺到

した。

叫ぶ間も与えられないまま、暗い炎が全身を喰い尽くす。
吸血鬼の名を冠するこの魔法は、死を与えながら『死』という安息を許さない。

永遠に近い時を掛けて少しずつ魂を喰らい、耐え難い苦痛を最期の時まで与え続ける。

しかも、喰われた魂は転生の輪廻には戻れず永久に失われるんだ。
不意に、腕の中で震える動きが生まれる。

視線を下げると、僕の腕に抱かれたままのエアリイさんと目が合った。

見上げる瞳にはありありと恐怖の色が浮かんでいる。

——怖がらせちゃったかな？

出来るだけ優しく声を掛ける。

「エアリイさん、怪我は無いかな？」

「あ、ああ、大丈夫だよ。ユーリ君こそ平気かい？」

「うん、僕は大丈夫。……良かった、エアリイさんが無事で」

ほっとした途端、強烈な眠気が襲ってきた。

そのまま後ろにパタッと倒れ込む。

少し赤みが差してきた青い空が広がっていた。

瞼を閉じる直前に浮かぶのはエアリイさんの事。

——情けない所もえっちな所も、怖い所も見せちゃったなあ。それでも嫌われちゃっても、エアリィさんが無事だったから……いっか。

色々悩みが増えました。

山賊騒動から2日。

とある理由で僕の精神力はガリガリ削れてきている。

1つは自分の責任というか、僕が受け止めなくちゃいけない事。

あの時僕は、僕の意志で、1人の人間を殺した。

それも正当防衛なんかじゃない。

小さな子供が蟻を踏み潰すみたいに、僕は人間の命を弄んだ。

単に殺した訳じゃない、僕が思い付く最も残虐な方法で殺したんだ。それを思い出す度、胃から酸っぱいものが上がってきて、胸の辺りが酷く病む。

——やっぱり、ゲームみたいには慣れないなあ。

ゲームの中なら襲ってきた山賊の身包み剥いで頭にプスプス弓矢撃ち込んだり、スタアアアアップ！してきた衛兵を沈静化した後で背後から斬りつけたりしてたんだけどなあ。

まだ魔法だったから良かったけど、もし剣なんかで殺していたら、手に残る肉を断つ感触に眠れない夜を過ごしていたハズだ。

異世界だから法で罰せられる事は無いけど、だからって割り切れるものでもない。

時折込み上がる酸っぱい液に辟易しつつも、どうにか折り合いを付けなくちゃ、とも思う。

ただ塞ぎ込むだけの暇が無い事は幸いかも知れない。……最も、それが僕の精神力を削り取っていくもう1つの理由なんだけど。

「どうしたんだい、ユーリ君？ 疲れているなら少し休むといい、それにユーリ君が望むなら……その、添い寝くらいならしてもいいよ？」

「ユーリ、お腹空いたの？ 私がクッキー食べさせてあげるね♪ それとも……口移しの方がいい？」

教会の居間で椅子に座る僕に、背後からエアリイさんがきゅっと抱き付き、膝の上に乗ったミナがむぎゅむぎゅすり寄っている。

エアリイさんは先日山賊騒動の時に取った僕の行動——偶然にエアリイさんの命を救ったパイタッチ——のせいで、何故か好感度が鰻登りになっている。

曰く、命の恩人だからって事だけど、エアリイさんも僕の命の恩人なんだけどなあ。

それを指摘したら『ふふっ、お揃いだね』なんて顔を朱く染めて言うもんだから、僕のHPは赤ゲージですよ。

どうやらこの世界のエルフ族は、命を救ってくれた人に一生尽くすらしい。

それも一族のしきたりじゃなく、遺伝子に刻まれた本能に因るものだとか。

以来毎日……といっても2日しか経ってないけど、エアリイさんは僕の側を離れようとしなない。

それを見たミナが対抗心を燃やして、僕に引っ付いて離れない。

流石にトイレに行く時とお風呂に入る時は付いて来ないけど、それ以外はずっと一緒。

加えておはようのキスとおやすみのキスをねだってきた。

余りにかわいかったから二つ返事で了承したのはナイショだ。

そんな訳で、今僕の後ろを付いて回るピク○ンが2人。

まあ2人共かわいいし癒されるからいいか、って思い始めた。

ただ、1つ問題が。

「……………じー」

正面から感情の読み取れない三白眼で僕を見据える少女。

シーナだ。

修道女らしく貞操観念がしっかりしてるせいか、僕がデレデレしてるのがお気に召さないようだ。

もっと健全な男女の関係を築いて欲しいみたいだけど、そもそも2人と男女の関係にすらなっていないし、この2人に抱き付かれて反応しないのは年老いた人だけだと思う。

それでも妹のミナと友人のエアリィさん、2人の恩人——僕自身に自覚はないけど——という事もあってか、余りキツくは言ってこない。

代わりに、じっと何か言いたげに僕を見据えてくるんだ。

シーナもかわいいから別に見られる分にはいいか、って最初は思ってたけどコレはなかなかキツイ。

「あの、シーナ？」

「なんですかユーリさん」

「……………なんでもないです」

取り付く島もない。

それも目が乾いて痛くなるんじゃないかってくらい僕を見ながら。若干怖いですヨ。

「シーナ君、そう目くじらを立てなくてもいいんじゃないか？」
「そうだよ、ユーリ悪い事してないよ？」

援護射撃をしてくれる2人。

その気持ちはありがたいんだけど、出来れば抱き付きながらは言わないで欲しい。あぁっ、シーナの僕を見る目が濁ってる！濁ってるよ！

誰でもいいからこの状況なんとかしてくれないかなあ。

そんな風に早くも他力本願な僕の願いが届いたのか、来客を知らせる鐘が響いた。

「あ、はい。すぐ行きます」

いつもの表情に戻して玄関へ向かうシーナ。

うん、やっぱりいつもの方がかわいいよ。

そんな事を考えてると、後ろから耳に熱い吐息を吹きかけられた。

「うひいあ!？」

「酷いなユーリ君、私にはその熱い目を向けてくれないのかい？」

そう言ってご自慢のCカップおっぱいの谷間に僕の頭を埋めるエア
リイさん。

むにむに、ふによふによ。

なにやら幸せな感触が首や後頭部を包み込む。

そして顎を僕の頭に乗せて凭れ掛かる。

いや、もうデレデレですねエアリィさん。

もう喋り方にしかクールキャラ残って無いですよ。

意識を背後に向けていると、胸元にもぞもぞした感触が。

見るとミナが僕のYシャツの中に潜っていた。

流石に先日のは格好は恥ずかしかったので、今の僕の格好は無地の白Yシャツに濃紺のスラックス。

スラックスはぴったりサイズなのにYシャツはかなり大きめで、仕方なくダボっとさせて着ている。

袖も捲ってみたけど動きにくくて、なんでこのサイズなんだろうかと麻袋片手に悩んだけど、今ならその理由が解る。

「ぶはっ。にへへ、ユーリとみっちゃく♪」

2つ目まで開放したボタンの辺りから頭だけ出したミナと目が合う。僕のシャツの中に潜り込んで密着してるんだ。

確かにぴったりサイズだったらYシャツがパツツンパツツンになって苦しくなったただろう。ゆったりサイズだからミナがこうして入っても丁度良いくらいだ。

しかも今日は日差しが強いからみんな服は薄手。

ミナも薄いベージュのTシャツを着てるから、柔らかいふにふにや擦れると堅くなるさくらんぼの感触が直に伝わってくる。

——落ち着くんだ僕、落ち着くんだ息子。いつ如何なる時も平常心を保つのだ。

出来るだけ意識を逸らしながら必死にうろ覚えの般若心経を唱える。

と、ミナがくいつと体を伸ばして僕の唇を奪う。

一瞬で思考が止まった僕に、とろけるような笑みを見せるミナ。

「……にへへ、ユーリ大好き♪」

がらがらがら。どんがらがっしゃーん。ばりばりばり。きゅーん。そんな音を立てて僕の平常心は脆くも崩れ去った。

いやね、この素敵な天使を相手に平常心を保つだなんて土台無理な話なんですよ！

思わずむぎゅーっと抱き締めようとした所で、部屋の扉が開く。

「ユーリさん、あなたにお客様……」

「……あ」

一気に部屋の温度が氷点下まで下がった気がした。

○がつ×にち、はれ。

きょうは、おそとがはれてるのに、かみなりがおちました。

……ゴメンナサイ、取り乱しました。

いやあ、流星にシーナも我慢の限界だったみたいで遂に雷が迸ったね。

いつものように——これがいつもと表現されるのも問題な気がするけど——床に正座してシーナのお説教を受ける。

今回はミナとエアリィさんも正座だ。

シーナの後ろで所在無さげに頬をポリポリ掻いている男の人も、余りの剣幕に口を挟めない様子。

「聞いているんですか、ユーリさんっ」

「は、はいっ！」

「あ、あの、シーナ君？」

「なんですかエアリィさん。お説教はまだ終わってませんよ」

「あうっ、い、いや、その」

「言いたい事があるならハッキリ言う！」

「は、はいっ！後ろの方が困ってますっ！」

「へっ？」

シーナの三白眼に気圧されながらも、背後を指差すエアリィさん。

うん、怯えた子猫みたいで保護欲をそそるけど、人を指差すのは失礼になるから止めようね。

慌てて振り返るシーナから見えないように頭を撫でてあげると、エアリィさんはくすぐったそうに目を細めた。

「ええっと、宜しいでしょうか？」

「ああっ、申し訳ありません！すっかりお待たせしてしまって」

「いえいえ、とんでもない。……それでは、貴方がユーリ殿でしよ
うか？」

人懐っこそうな笑みを浮かべる男の人。

紫紺の髪の毛に眼鏡、細面で柔和な顔に全身から滲み出る苦労性の

オーラ。

あ、なんかこの人と友達になれそう。

灰色のローブを着てるし、学者か魔術師かもしれない。背格好は僕よりちょっと高め。……ちょっとだからね！

「はい、僕がユーリです。あなたは？」

「申し遅れました。私は魔術師ギルドの者でナカシユといいます。どうぞ宜しく」

そう言って腰を折るナカシユさん。

僕も慌てて頭を下げようとしたらナカシユさんに制される。

「そのまま構いませんよ。……今動いたら悶えますよ、きっと」

右を見ればお説教が終わったと喜んで立ち上がろうとしたミナが、顔を苦悶に歪めて倒れていた。

ああ、その表情もかわいいなあ。

なんかゾクゾクきそう……じゃない、アブナイ性癖に開花しそうだった。

ずっと正座してたから足の感覚無いなあ。

これで立ち上がったら間違いないで倒れて頭ぶつけるね。

目に涙を溜めてうるうると僕を見上げるミナ。

ああっ、ゴメンよミナ。僕にはどうする事も出来ないんだ。いや、よからぬ意味でならどうか出来るけど。そんな目で見上げたら襲っちゃうよ？……だから息子よ、お前の出番はまだ先だ。収まっていなさい。ハウス！ゴーホーム！

「どうも、お見苦しい所をお見せしました」

「いえいえ、こんなに素敵な方々に囲まれて羨ましい。……大変で
しょう？頑張って下さい」

最後の方は僕にだけ聞こえる音量で喋るナカシユさん。

良い人だ。気遣いが心に沁みるなあ。

来客用の部屋に移ってまったりとお茶をすすりながらのお話。

教会が広いから部屋は有り余ってるんだ。

シーナとミナとエアリィさんは黙って僕とナカシユさんの会話に耳
を傾けている。

ミナとエアリィさんの頭に真新しいたんこぶがあるのが痛々しい。
げんこつ1発でお説教は無しにしてももらえたみたいだけど、エアリ
ィさんまでげんこつ落とされるとは思ってたよ。

朝早くにミナが焼いてくれたクッキーをかじりながら、ナカシユさ
んに尋ねた。

「本題に入る前に幾つか質問したいんですけど、いいですか？」

「ええ、勿論。ただその前に1つお願いしたい事が」

「なんですか？」

ナカシユさんは頭をポリポリ掻きながら苦笑いを浮かべて言った。

「お恥ずかしながら、余り敬語には慣れていませんので良ければお

互い気楽に喋りませんか？」

——よっぽど頭の中が平和な人か、それとも凄腕の諜報員じゃなきゃ、こんなまったりした空気は出せないよなあ。

僕としては平和な人って考えて起きたいけど、初対面でこれだけ空気を緩ませるっていうのも不思議な事なんだよ？

横目で伺ってみるとエアリイさんだけがその事に気付いた様子で僕を見ていた。

まあエアリイさんがいれば大丈夫かな。

「うん、了解。ナカシュって呼べばいい？」

「ああ、それで構わないよ」

「じゃあ早速だけど、ナカシュ」

僕の言葉に身構えて背筋を伸ばすナカシュ。

……聞いたら多分、一気に脱力するだろうなあ。

僕の考えが伝わったのか、3人共ちょっぴり口の端がニヤニヤしてる。

「魔術師ギルドって何？」

「……は？」

その反応がツボに入っただのか、シーナは顔を背けて口元を手で隠し

ぶるぶる震えている。エアリィさんは頑張ってお茶を口に運ぶけどカップがカタカタ震えている。ミナに至っては普通に座ってるように見せてテーブルの下に左手を伸ばして僕の膝をバシバシ叩いてる。いやまあ、僕に取っては当然の疑問なんだけど、みんなにしてみたらギャグにしか思えないんだろうなあ。

そう言えばシーナはギルドについては説明してくれなかったなあ。まあシーナも関わる機会がほとんど無いみたいだし。

気を取り直したナカシュが説明してくれたのはこんな感じ。

魔術師ギルドは、この大陸だけじゃなく他の大陸にもあるかなり大きなギルド。

細かい所は各大陸で違うけど、魔術を悪用させないよう魔術師をまとめて、みんなで便利な魔術や人の役に立つ魔術を研究しよう、ってギルドらしい。

有事の際、魔術師ギルド所属の魔術師は市民の救出や怪我の治療、瓦礫の撤去作業なんかをするけど戦争に参加したりはしない。

ギルド所属の魔術師には毎月の手当てと国営の宿泊施設やギルド直営の魔導書店なんかで多少割引してもらえる。

と、そこまで聞いてちよっとした疑問が湧いてきた。

「ナカシュ、魔法と魔術と魔導って何が違うの？」

「ああ、簡単な事さ。魔術は魔力を使って火を出したり水を出したりする事、魔法はその水を出す時に用いる理——つまり方法、魔導は魔力をどう扱えば魔術を行使出来るかの指針。それを理解してきっちり分けて話すのはギルドの老人達しか居ないけれど」

「じゃあ魔法使いや魔術師や魔導師も別物？」

「その通り、魔術師は行使出来る魔術の種類が豊富な人、魔導師は扱える魔力が普通よりも多い人、魔法使いはちよっとした魔術が使

える人だね。基本的には魔法使いが成長して魔術師か魔導師になる
って思ってくれればいいよ」

なるへそ、雑多な呼び方じゃなくちゃんと分類されてたんだ。

さて、諸処の疑問が解決された所で、いよいよ本題に入るとしよう
か。

「ねえ、ナカシュ。僕を尋ねてきたって事だけどさ」

「ああ、その事なんだけどね、実は」

「なんで僕がこの村に居るって知ってたの？」

話を進めようとするナカシュを遮って、僕は言葉を続けた。

そう、一番気になってたのはそこなんだ。

僕がこの世界に来てからまだ一週間も経ってない。

なのにナカシュは僕の存在を知っていた。聞けばナカシュは首都『
リレジー』から来たって言うし。

リレジーからここタマタ村までは早馬で1日、普通の馬車でも3日
掛かる。

考えられるのは僕の事を村長さんが「こんな人を保護しましたよ」
って届け出たのを、どんな人か確認しに来たって所だろう。

でもそれなら王国の衛兵や警備隊の人が来るハズだし、わざわざ魔
術師ギルドから人を寄越す理由が解らない。

僕の視線を受け止めて、ナカシュは事も無げに話し始めた。

「こちらの村長から報告を受けてね。怪我をした旅人を1人保護し
た、と。別にそれだけなら警備隊の人達に任せておくんだけど、上

司の気紛れで派遣されてね」

「気紛れ？」

「村長の報告書を読み上げた新入りが、突然現れただなんて転移でもしてきたんスカねえ、なんて言うもんだから上司が興奮しちゃって。事実関係を確かめて事の次第に因ってはギルドに勧誘、いや拉致してきなさい！と言いついてね。それで私が派遣されて来たんだよ」

うわあ、また滅茶苦茶な。

上司の言う事も滅茶苦茶だけど、それに従ってここまで来たナカシユも色んな意味でひどい。

ああ、だから苦労性なオーラが出てたのか。

しかしこれは参ったなあ、と僕は頭を抱えなくなる。

確かに突然現れたのは事実だけど、聞く限り転移魔法はかなりの難易度らしい。もしかしたら伝説級の魔法かもしれない。

そんな中「実は転移しちゃって」なんて言おうもんなら、間違い無くその上司のオモチャにされる。

気は進まないけど、僕は嘘を吐く事にした。

「まあ、ある意味転移はしたみたいなんだけどね」

僕の言葉に顔色を変えるエアリィさん。

大丈夫、と1つ頷いて言葉が続ける。

「元々僕は拾われっ子でさ、爺ちゃん――僕を育ててくれた人が魔術の研究しててね。多分術の失敗で転移というか、吹き飛ばされた

んだと思うよ」

「術の失敗で、という事はかなり大掛かりな術を？」

「らしいよ？」

「随分と曖昧に喋るね」

「僕は魔術について余り知らないし、もっぱら爺ちゃんの身の回りの世話をしたからね。得意なんだよ？鳥を焼いたり野菜を炒めたり」

得意と言いつつ敢えて料理が上手そうに思えない言い方をする。

事実そこまで料理する訳じゃないし。

けど、こういうちょっとした搦め手が後々効いてくるんだ。

「ならどの辺りに住んでいたとか、どうやって戻るのかとか、何か当ては有るのかい？」

「全く。住んでいたのは暗い森の中だったし、爺ちゃんに聞いた事も無かったなあ。おかげで帰り方も解らない状況だよ」

「余程君のお爺さんは変わった方のようなだね。だけど失敗の結果とはいえ1人でそれだけの術を作ろうと言うんだから、実力も折り紙付きなんだろう。どうだい、魔術師ギルドの方で君のお爺さんを探してみようか？君さえ良ければ魔術師ギルドで君を保護してもいい。その方が早く戻れるかもしれないよ？」

きたか、と身構える。

僕の話を全部信じた訳じゃないだろうけど、仮にそんな人がいるなら是非とも接触しておきたいハズ。

それに僕の身柄を魔術師ギルドに置いておけば、将来僕を迎えに来る時に会える。

僕には魔術師ギルドからの保護という形で給金や情報提供が入るから、今考えられるデメリットは皆無に等しい。

さあ、どうやって切り抜けるか。

このやり取りにちよつとワクワクしながら、僕は口を開いた。

「探してもらえるならありがたいけど、魔術師ギルドはなんか怖そうだね」

「おや、なんでそう思うんだい？」

「だって人間を1人拉致してこい、だなんて普通に言えちゃうような人が上司なんでしょ？ そんな人身売買みたいな事を平然と言えちゃうなんて、やだよ」

軽く身震いしてみせると、ナカシュはしまった、って顔を歪めた。上司も冗談で言ったと説明しても不安と不信が残りそうな反応を見せる僕に、なんて言えいいのか解らないようだ。

——僕、ひよつとして役者になれるかも？

妹に付き合ってよくごっこ遊びをした経験がこんな所で役に立つなんて。

妹よ、お兄ちゃん俳優デビューしちゃうかもしれない。

あ、妹の事思い出したらちよつぱり涙が滲んできた。

いけないいけない、心を強く持たないと。

ただナカシュは僕の涙を勘違いしたのか、慌てて取り繕い始めた。

「ああ、無理にとは言わないよ。魔術師ギルドには変人が多いから、私の方から余りユーリには近付かないよう言い含めておくから」

そう言ってチラリと左右を伺う。

何を……ああ、なるほど。

テーブルの左では僕の涙を見たエアリィさんが刺すような視線を向けて、僕の右ではミナがほっぺを膨らませて睨んでいる。

ミナかわいいなあ、そのほっぺにキスしちゃうぞ？

邪念を振り払いつつ、僕は次の一手を指す。

「最初に目が覚めたのがここだし、余り場所を移さない方がいい気がするんだ。ほら、山で遭難した時とかも無理に歩き回らないでその場にいた方が早く発見されるって聞くし」

「それはそうかも知れないけど」

「それにさ」

なおも食い下がるナカシュに奥の手を使う。

といってもやる事はそんなに無いけど。

ミナの体をひよいと持ち上げ、僕の膝の上に座らせる。

勿論後ろからむぎゅーのおまけ付きだ。

ミナはちよつと驚いたみたいだけど、僕の意図を読み取って甘えてくる。

「好きな子の側にいたいなあ、って思うのはいけない事かな？」

その言葉にぽかんとするナカシュ。
毒気を抜かれたのか力無い笑みを浮かべて頭を振った。

「……解った、一応こちらでもそのお爺さんの事は調べてみるけど、必要以上に干渉はしないよ。上司には上手く私から伝えておくよ」

「ありがとう、ナカシュ」

「気にしないでいいよ、慣れてるから」

そう言ってナカシュは席を立った。

玄関まで見送りに行って、トボトボ歩くその背中を見ていると何故か悪い事をしたような気持ちになる。

——多分、上司の人に振り回されてるんだろうなあ。

話を聞く限りやんちゃな幼なじみタイプだね、上司の人って。

ツインテールで縦ロールなんだろうか。

居間に戻ってソファーに腰掛けて脱力する。

ふひー、と大きく息を吐いたら一気に全身がだるくなった。

やっぱり慣れない虚勢は張るもんじゃないね。

来客用の部屋の後片付けを終えたミナがとことこやってきて、だらしなく体を投げ出している僕の上にぼむっと乗っかる。

紫銀の柔らかな髪を優しく撫でると、甘えるように抱き付いてきた。

「さっきはゴメンね、ダシに使っちゃって」

「ううん、私の体も心もユーリのものだから、好きに使っていいん

だよ？」

お待ちなさいお嬢さん、その台詞は非常に危険です。

そんな幸せそうにとろけた顔をしちゃいけません！僕の理性が壊れちゃうでしょ！

と、頭に2つの柔らかい感触が。

上から肩に手を回され抱き締められる。

「ユーリ君、私の事も忘れないでくれよ？私だって君になら全て奪われても構わないんだから」

「むー、エアリィさんはユーリをゆうわくしちゃダメ！」

「おやおやミナ君、独り占めはズルいよ？」

「エアリィさんは私より大人なんだからガマンだよ」

「ならガマンした分ミナ君が寝てから、私はユーリ君と大人な時間を過ごそうかな？」

なにやらバトルが始まったけど、2人にはケンカして欲しくないなあ。

しかも原因が僕って……いやあ、異世界トリップして良かった。

しみじみ思いつつ、僕は体を起こしてミナを左手で抱き寄せ「わあっ」エアリィさんの右手を掴みぐるっと回すようにして「うなっ」

腰元の辺りに座らせる。

驚いた声を上げる2人の頭を撫でながら、ゆっくり諭すように言った。

「2人ともケンカしちゃうだよ？一緒に仲良く笑ってるのが一番い

いし、2人が仲良くしてるのを見てると、僕も嬉しいからね」

「にへへ、はぁい」

「ユーリ君にはかなわないな……ふふっ」

うんうん、お兄さん聞き分けのいい子は大好きですよ。

え？解決方法がヘタレ？

ハハッ、何を今更。

本当は自分の気持ちを整理して、本気で2人の気持ちに向き合わないといけない事くらい、解ってるつもり。

だけど僕にはそんな度胸も甲斐性も無いし、なにより、

——愛しいって気持ちは解るけど、好きってどんな気持ちなのかな……。

恥ずかしながら齢15にして、まだ初恋の1つも経験してない。

正直2人が僕に向けてくれる好意も、イマイチ実感が湧かないっていうか、なんだろう。自分でもよく解んないや。

えっちな気分になる事はよくあるけど、それで突っ走って傷付けちゃうのは絶対に嫌だし。

……冷静に観察したら僕って本当にヘタレでチキンだなあ。

おっと、また思考が沈みがちになってたよ。

ちょっと下がった気分をごまかすように2人の頭を撫でる。

「ユーリさん」

びくうっ！と僕の体が跳ねた。

ギギギと錆び付いたロボットみたいな動きで振り返ると、そこには聖母のような微笑みを浮かべたシーナが。

ああっ、微笑みは素敵なのに、おでこに血管浮き出てるよ！バツテンが、バツテンが浮き出てる！

「そういえばまだユーリさんはお説教の途中でしたね。……ミナ、エアリィさん、ちよつとユーリさんを借りていきます。文句は無いですよね？」

夜叉のような凍える声に顔を青くしてブンブン首を振る2人。

僕は首根っこを掴まれて、廊下を引きずられて行く。

勿論BGMはドナドナだ。

「あ、あの、シーナさん？」

「ふふふ、なんですかユーリさん？階段を上りますから、喋ると舌嚙みますよ」

「ちょ、それは死んじゃう、死んじゃうよ！？だ、誰か、ヘルプミ
ー！ー！」

やたら広い教会の中に僕の悲鳴だけが虚しく響いた。

後で村の子達に聞いたら、この時の叫び声は教会の七不思議に数えられていて、言う事を聞かない子は連れて行かれちゃうって母親に言われたらしい。

以来、子供達は母親の言う事をよく聞くようになったとか。
めでたくないけど、めでたしめでたし。

チャンチャン。……いや、本当に怖かったです。

お勉強の時間、魔法編。

激動の午前が過ぎ、お昼ご飯を食べ終えまったりとしたティータイムへ。

今日のお昼は僕が作った。

といっても簡単な蕎麦だけだね。

四次元麻袋から出て来たのは蕎麦の袋と鳥の胸肉、ネギ、七味、めんつゆ、それと便座カバー……じゃなくて、ぴったりサイズのYシヤツ。

なのであのタイミングで出て来たのかさっぱりだけど、取り敢えず着替えてレツクツキング。

みんな蕎麦を見るのが初めてみたいで興味津々だったけど、温かい蕎麦を気に入ってくれたようであれよあれよという間に5人分茹でた蕎麦がつゆ諸共綺麗さっぱり無くなった。

ミナは初めての蕎麦に舌鼓を打って大満足、エアリイさんは猫舌なのかふーふー冷まして食べていた。

蕎麦を食べるエルフ……なんだろう、すごい光景だ。

一番蕎麦が気に入ったのはシーナで、僕よりも食べていたのにはちよっとびっくりした。

七味もたっぷり振り掛けてたし、案外辛党なのかな？

機嫌も直ったようでなによりだね。

食後のティータイムには蕎麦茶をご馳走。

これも気に入ったみたいで、珍しくシーナのにへらって顔が見れた。うん、普段見れないだけあってすごくかわいい。

ミナは村の子供達と村長さんの所で勉強会、エアリイさんは狩りをしに森へ入って行った。

僕はというと、シーナとマンツーマンで魔法についての特別授業。今の所知ってるのファイヤーとライブだけだしね。

「では授業を始めます」

「シーナ先生、よろしくお願いします」

「解らない所があったらどんどん質問して下さいね」

蕎麦茶片手にご機嫌なシーナ。

いつもより若干ノリノリだ。

「まず、魔法には大きく分けて3つの種類があります。ユーリさん、なんだと思いますか？」

おおう、いきなり当てられた！？

何だろうね、魔法の3つの種類って。

パツと思いつくのは攻撃、回復、補助辺りかな？

元気良く手を挙げてシーナに答える。

「はい、シーナ先生！」

「はい、ユーリさん」

「攻撃、回復、補助の3つだと思います！」

「なるほど……そうきましたか。確かに役割で考えるとそうなりますね」

ありゃ、って事はハズレか。

んー、シーナが考える別の答えで種類が3つあるやつ……。

何だろ、解らないや。

あ、もしかしてこの世界では3つだけ僕にしてみたら3つじゃないとか？

例えば……そう、魔法の属性とか。

「はい、シーナ先生」

「はい、ユーリさん」

「魔法の持つ属性……かな？」

「大正解です、どんどんぱふぱふ」

拍手してくれるシーナ。

前に教えたどんどんぱふぱふがこんなに破壊力あるとは思わなかった。

余りのかわいさに鼻血が出そうになる。

というかここまでテンション高いのは蕎麦茶のおかげか。

恐るべし、蕎麦の力。

「では更に問題です、その3つの属性とは何でしょう？」

そう言って僕の顔を上目遣いに覗き込むシーナ。

ああもう、なんでこの姉妹はこう色々とクリティカルなんだ！

邪念混ざりまくりな煩惱ヘッドで答えを考えてみる。

多分だけど、魔法の名前がFEちっくだから理、光、闇なんじゃないかなあ。

「理、光、闇の3つ？」

「すごい、正解です！ひよつとしてユーリさん知ってました？」

「合ってたんだ。たまたまだよ、僕の世界にある物語に確かそんな表現があったなあって思い出してさ」

「へえ、今度その物語教えて下さいね？こほん、ユーリさんが正解した通りこの世界の魔法は理、光、闇の3つで構成されています。内訳は解りますか？」

「うん、なんとなく。ファイヤーが理魔法、光魔法にはライブも含まれるのかな？」

「その通りです。光魔法には変則的ながら治癒や解毒、精神への干渉も含まれています。理魔法は解りやすいですね、火や水、雷に風なんかが該当します。闇魔法はちよつと難しいんですけど……」

言いにくそうに言葉を区切る。

イメージからして禍々しそうだし、聖職者のシーナにはちよつと苦手意識もあるのかな？

この世界でいう闇魔法に、先日僕が使ったノスフェラートも分類されるかな。

だけど闇魔法って分類がそもそも間違ってるよね。その辺りをシーナに提言してみた。

「闇魔法の位置付け、ですか？」

「うん。そうだなあ、例えばさ、シーナは闇ってなんだと思う？こんな感じ、って程度で良いから言ってみて」

「そうですね、暗くて冷たくて……怖いですね」

ちよつと首を傾げて考えるシーナ。

その仕草も姉妹揃ってとってもかわいらしい。

癒やされながら、僕はシーナの答えにちよっぴり肩を落とす。

——やっぱり、そんなイメージかあ。仕方ないって言えばそうなんだろうけど。

魔法を使うにはイメージが大切だ。効果は個人の力量に左右されるだろうけど、発揮される効果の方向性は術者が思い描く必要がある。解りやすく言えば、ファイヤーで出す火の勢いは魔力が関係するけど、ファイヤーで出た火が『どんな風に燃えるか』は自分のイメージに左右される。

使う魔法をどう捉えるかで、魔法の効果は変わってくる。

まあ何が言いたいのかハッキリ言うと、あの時僕が使ったノスフェラート、あれを僕は闇魔法として使ってない。

つまり、僕はこの世界の法則を無視した魔法を使った事になる。

どうやって、何を、どのように、使ったのか。

多分、僕とシーナの捉え方の違い——闇に対するイメージだけに止まらない相違——に、ヒントがあるんじゃないかって思う。

そんな漠然としたモヤモヤを抱えて、僕は口を開いた。

「僕の闇に対するイメージ……考え方は、シーナとだいぶ違うね」

「ユーリさんはどんな風に考えてるんですか？」

「僕思う闇は……暖かいよ」

「暖かい？」

ぽかんと呆けたような顔をするシーナ。

そりゃそうだろう、自分が思っていたイメージとほぼ180度違う

答えが返ってきたんだから。

「シーナは闇を考えた時、光の対極にあるものって想像したんじゃない？」

「ええ、だって光と闇は相反するものなんじゃ」

「そこから変えてみよっか」

「ふえ？」

「まず光の対極にあるのは闇じゃない。光の反対側にあるのは、影なんだ」

「影……ですか？」

「そうそう、光があるから影が出来るし、影があるって事はどこから光が差してるって事だよね？」

「なるほど、言われてみればそうですね。でも光と相反するものが影なら、闇って何なんですか？」

よしっ、食い付いた。

知識や発想を教えるのに一番の近道は、疑問と興味を持ってもらう事。

それが出来たら、後は互いの気が済むまで持論や疑問をぶつけ合えば良い。

「それなんだけど、僕は『闇』っていうのは万物の祖……全ての母親なんじゃないかな、って考えてるんだ」

「母親？」

「そう、例えば人間はどうやって生まれてきたのか、考えた事はある？」

「え、それは神様が人間をお作りになったんじゃないんですか？」

「修道女のシーナらしい答えだね。それも答えの1つだと思うよ」

「答えの1つ、ってユーリさんの考えは違うんですか？」

「僕の世界では神様を持たない人達も多くてね」

僕の言葉に驚いた顔をするシーナ。

一神教が世界に広く布教されているこの世界じゃ確かに信じられない事だろうなあ。

「そうだなあ、花を咲かせようと考えた時に、種を植えるよね。僕の世界の研究者は、全ての生物は種で殖えるって考えたんだ」

「種、ですか。私達人間も種で？」

「うん、肉眼では見えないけどね。詳しく説明すると混乱しちゃうから、概念的に種のようなものって思ってくればいいよ。その小さな種で人間が殖えるとして、生まれてくる種は誰が作ったんだらうね？」

「それは神様じゃないんですか？」

「うーん、難しいかもしれないけど一旦神様の事は忘れよう。神様以外で、何だと思う？」

「神様以外ですか……やっぱり親でしょうか」

「よくできました、その考え方が出発点だよ。じゃあその親は誰が生んだんだろう」

「そのまた親ですね」

「そうだね。じゃあそのまた親、更にその親……辿っていったら、一番最初の親は誰になるんだろう？」

そこまで喋って、僕はカラカラの喉にすっかり冷たくなった蕎麦茶を流し込んだ。

神様というジョーカーを使えなくて、シーナはうんうん悩んでいる。僕自身も、この先を上手く説明出来るか解らない。

妹は感覚で理解してくれたけど、論理で納得しようとした両親は最期まで理解出来なかった。何せ説明する側の僕も曖昧な感覚で、こうなんじゃないかって勝手に解釈してるだけだし。

なかなか難しいな、って思ってたらしーナが不意にぱっと顔を上げた。

「ユーリさん、ひょっとして……その最初の親が生まれる前は、何も無かったんじゃないですか」

「おおう、よくそこまで辿り着けたね!？」

正直、神様を信じてる人に、僕の世界の知識無しにその発想が出来るとは思って無かった。

中学で習うレベルの地学を知らない人に説明するのは難しいしね。

「僕達の世界では、最初には何も無かったっていうのが常識というか定説なんだ。ある時、何らかの理由で何も無かった所から、生命が、世界が誕生した。その何らかの理由の1つが」

「ユーリさんの世界の神様、ですか？」

僕の言葉を継いでしてやったり顔のシーナ。

先に言われちゃったなあって悔しい反面、僕はシーナの柔軟な発想力や頭の回転の早さに驚いていた。

実はシーナって天才なのかも。

もしかしたら僕の考えを解ってもらえるかな？なんて考えてちよっ

とワクワクドキドキしながら、僕はわざとらしく咳をした。
ここまでは色んな学者や本から得た知識を披露してただけ。
ここからは僕自身の、僕だけの言葉で説明しなきゃ。

「ここからは僕の想像っていうか妄想なんだけど、何も無かった所に『得体の知れない何か』が世界を作ったんじゃないく、そもそも何も無かったっていうのが間違いないかなって、僕は考えるんだ」

「えっと、どういう事ですか？」

「物質的な意味では、本当に何も無かったんだと思う。光や熱、その他思い付くもの全て。ただ、精神的な意味では、何かが存在していたんだと思う」

「精神的な何か……幽霊みたいなものですか？」

「うん。何も無かった場所に神様みたいな存在が世界を作り出したんじゃないく、『何も無い』っていう存在が自らの意志で世界を生み出したんだ、って僕は思うんだ」

そこまで聞いて、シーナはあっと声を漏らした。

どうやら僕が言いたい事に気が付いたみたい。

本当に賢いなあ、と嫉妬する所か感心しちゃったよ。

「つまりユーリさんは、その何も無い存在を『闇』って考えているんですね」

「大正解。正解した優秀なシーナには後で豪華商品をプレゼントしちゃおう」

「わ、ありがとうございます」

正解した事に喜ぶシーナ。
でも突然怪訝そうな顔をして僕に言った。

「ユーリさんの闇に対する捉え方は解りましたけど、なんで突然そんな事を？」

いやあ、流石シーナ。そこまで解っちゃうかあ。

……いや、多分誰でも気付いたよね。

本当はエアリィさんもいる時に言った方が良いんだろうけど、先に一般人代表のシーナの反応を見ておきたい。

今のエアリィさんだったらミナみたいになんでも受け入れてくれそうだし。

いや、受け入れてくれるのは大変ありがたいんだけど、シーナみたいに僕に対してフラットな感情を持つてる人の意見を聞いて置かないと後々危ない事が起きそうな気がする。

また波紋を呼ぶ事になるんだろうなあ、ってどこか他人事のように感じながら僕は爆弾を投下する覚悟を決めた。

「こないだの山賊騒動の時にさ、僕ファイヤー以外の魔法使ったんだ」

「そうなんですか！？2人共話してくれないから、何かあったのかなとは思ってましたけど、よく即興で出来ましたね？」

「まだ驚くのは早いと思うよ……」

「え、何ですか？」

「いやいや、なんでも。それで山賊相手に多分この世界の闇魔法を使ったんだけど」

「や、闇魔法を使ったんですか！？難易度も高く扱うのに初歩のもので数年かかるのに！」

「シーナ、落ち着いて。ここからが一番大切な事だから」

逸るシーナをどうにかなだめて、この日一番の爆弾をポイッチョした。

「……実はそれを使う時、僕は闇魔法として考えてないのにそれが使えたんだ」

「……はい？」

「この世界ではファイヤーを使うにしても、『理魔法のファイヤー』って理解してないと使えないでしょ？」

「ええ、そうですね。……え？」

「って事はさ、僕がいくら頑張っても闇魔法のライブや光魔法のファイヤーは使えないハズだよな？」

「その通りですね。え、え？」

「ゴメン、この世界に存在しない魔法使っちゃった♪てへぺろ」

舌をちよつと出しておでこに手をぺちんと当てる。

こらそこ、面と向かってかわいくないとかわわない！

……や、かわいいって言われてもそれはそれでシヨックだけどさ。

シーナは頭に？を4つくらい浮かべてたけど、徐々に顔から表情が消えていく。

そしてゆっくりと目が大きく開かれて、もうこれ以上はって所で突然立ち上がって悲鳴のような声を上げた。

「え、あ、それ、えっ、な、あああああああああつ!？」

うん、とっても素敵にパニックってるね。

こういう時は下手に刺激しないで本人が落ち着くまで放っておくに限る。

……決してヘタレてる訳じゃない、うん。だってカップやお皿割れちゃったら危ないし。

まったり蕎麦茶をすすって、シーナが落ち着くまでしばらくティータイムを満喫した。

「うう、恥ずかしい所をお見せしました」

「いやいや、見た事無いシーナの一面を見て楽しかったよ」

はうっ、と小さくなるシーナ。

顔を真っ赤にしつつも、持ってる蕎麦茶は手放さない所がちょっぴりおかしい。

ただまあ、シーナとも話し合ってたけど新しい魔法を使えるようになったのは極力ナイシヨにしておく事にした。

エアリィさんは僕が魔法使った時に一緒にいたから話すつもりだけど、ミナには黙っていようと思う。

もしかしたら、それを知ってるせいでミナが危険に晒されるかもしれないね。

「それにしても、シーナがあんなにびっくりするとは思わなかった」

「驚いて当然じゃないですか！あんな事突然言われたら誰だってびっくりしますよ！」

「あはは、そうかもね。でもあわあわしてるシーナもかわいかったよ」

「……わ、忘れて下さいっ、思い出しちゃダメですう！」

空になったカップを置いてぶんぶん腕を振り回すシーナ。

ゴメンゴメン、と頭を撫でたら真っ赤になって動きが止まる。

「そっ、そんな事してもごまかされませんかね！？」

「困ったなあ、どうしたら許してくれる？」

「……もうちょっと、撫でてくれたら、その……いい、です」

ダメだ、なんかもうかわいすぎる。

慣れない真面目モードで話したせいか、反動でもものすごい甘えたくなってきた。

耐えきれなくなった僕はシーナをお姫様抱っこしてソファに座った。

「え、あ、あのっ、ユーリさん！？」

「ああ、気にしないで。かわいいシーナに触れたくなっただけだから」

「かつ、かわ……！？やっ、ダメです、恥ずかしいっ」

わたわたと暴れるシーナを膝の上に座らせて、優しく後ろから抱き

締めた。

あ、髪の毛から良い匂いがするなあ。

くんかくんかすーはーすーはー。

……うん、堪能した。

シーナったら耳たぶまで真っ赤にして、恥ずかしがり屋さんなのか？

ちよっぴりイタズラしてみたくなった僕は、その真っ赤な耳たぶを甘噛みしてみた。

「ひゃうっ！？あっ、やあっ、あっあっ、んううっ」

やわっこい耳たぶをはみはみする度に、シーナの体がぴくぴく跳ねる。

面白くなって、僕は耳たぶを甘噛みしつつ、頭を優しく撫でてあげる。

「んやあっ、ユーリ、さんっ、あっ、それダメっ、ダメですう、ふやあ、あっ、ああっ、やあ、私っ、ばかになっちゃいますうつ、ふああっ」

小刻みに震えていた体が一際大きく震え、くてっと力無く僕へ凭れ掛かる。

潤んだ目は虚ろで、時折小さく体が跳ねる。

——あれ、これってかなりえっちくない？

意識した途端、下腹部に血液がすごい勢いで流れ込んだ。
ま、まずい、落ち着け息子、スタアアアアップ!?

しかし願い虚しく、おあずけばっかりだった息子は僕の言う事なんか聞かずにすたんだっぷ。

ふりふりと揺れるシーナのお尻の間で少年の自己主張を始めた。

「ふわあ……ユーリちゃん、なんだかカタイの当たってましゅ……。
なんでしゅか、これえ……。？」

絶頂の余韻なのか、呂律が回らないシーナがお尻を振って何が当たっているのか確かめようとする。こっ、これはまずいっ！
柔らかなお尻の感触がとっても気持ち良い。

「ちよっ、待ってシーナっ!？」

「カタイのこしゅれて、きもちいいれしゅう♪」

なんて淫乱な。お兄ちゃんそんなえっちな娘は大好物ですよ！
違う、間違えた。

今のはナシでっ！

というかパニックってないで早くシーナをなんとかしないと、息子のHP的な意味でまずい。

ここはもう一度シーナを気持ち良くしてあげるしかない。

早速僕は耳たぶを口に含み、はむはむもにゅもにゅ甘噛みを始めた。
同時に頭を撫で回すのも忘れない。

「んやあ、ユーリちゃん、んあつ、しよれ、らめれしゅう、ふああ
っ♪」

腰をグラインドさせて妖しく身をくねらせるシーナ。

まるでゲームに出て来るサキュバスみたいに、綺麗でえっちな雰囲気
を纏ってる。

実は3人の中で一番えっちなんじゃないだろうか。

一番えっちな娘が修道女……シチュエーションだけでもご飯3杯い
けそうなアレだね！

なんて考えたりして、どうにか意識をラグビー部並みのタックルを
シーナのお尻にかまそうとする息子から逸らす。

「ふあつ、やらあ、わらひ、らめになっひやいましゅう、あつ、あ
あっ♪」

扇情的な声を上げるシーナ。

多分もうそろそろ限界なハズ。

ダメ押しに耳たぶをちゅううつ、って吸い上げる。

その瞬間、シーナは体を大きく跳ねさせて、ぐったりと脱力した。

余りの強い刺激に体が耐えられなくなって失神したみたい。

敏感で淫乱でかわいいなんて最高じゃないか。

シーナをソファアに寝かせて、風邪を引かないようにお腹に薄いタ
オルケットを掛けてあげる。

これでよし。

「……トイレ行ってこよつと」

さあ、僕の強靱な精神力に惜しめない賞賛を浴びせて！

あ、やっぱりいいや。

先にトイレ行ってくるから。

ふう、ただいま。

あの後起きたシーナにジャンピング土下座をして、なんとか許してもらった。

「ユーリさんはえっちです、けだものです」って涙目で言われてちよつとゾクゾクした……いえ、なんでもありません。

帰ってきたミナは何があったのなんとなく理解したみたいで、僕の耳に口を寄せて「私ならいつでもイイよ……？」って言ってきたのはびっくりしたよ。

えろえろ姉妹め、食べちゃうよ？

まあ後でご機嫌取りに蕎麦殻の枕とペットボトルに入った蕎麦茶を贈っておこう。

——まあ、なんだかんだでシーナとちよつぱり仲良くなれたかな？

閑話——忘れられた集落から。

あたたかい。

最初に感じたのは私を包み込むような温かさ。

優しくそっと回される腕に甘えて、耳を胸に当てると愛しい人の鼓動が、私の鼓膜を、脳を、そして心を揺らす。

彼に名前を呼ばれる度に、私の胸いっぱいには歓喜が広がり心が震える。

ほら、今も私を呼ぶ声がする。

「美由里」

声を聴くだけで、私の心がダメになりそうになる。

ずっと聴いていたい。ずっと触れ合っていたい。ずっとずっと、彼の側にいたい。

彼の手が私の頭を撫でる度、彼の指が私の髪を梳く度、体が、心が融けそうになる。

きつと、この世に生を受けた瞬間から、私の魂は彼を欲していた。彼になら全てを捧げても構わない。

私の体は彼に貪ってもらう為、私の心は彼に弄んでもらう為にある。

——だから早く、私の全てを奪いに来て。

そこで目が覚めた。

目に映るのはいつもと変わらない景色。

木と煉瓦で組まれた内壁に真っ赤な絨毯。

魔法の火が灯されたカンテラに照らされて薄く影が伸び、室内を明るく照らして出す。

私の目覚めと共に輝きだした魔法の火が、やや肌寒い室温を一気に常温にまで引き上げた。

枕元に置いた時計が朝の10時を示している。

魔力で動く自動式卓上カレンダーは最後の記憶から約半年先の日を映し出していた。

今回の休眠は短かったなあ、と大きく伸びをする。

ぼきぼきべきべき。

関節が酷い音を立てる。

「んうー、快調快調。にしても随分と懐かしい夢を見たなあ。元気にしてるかな、お兄ちゃん？」

幸せな夢を思い返すと、にへらあってだらしく顔が歪む。

今日は朝から良い気分だ。

思わず鼻歌を歌いながらテーブルの上に置いてある水晶に目を向けると――、

「うそっ！？割れてんじゃん！え、えっ、いつ割れたの！？ってこうしてる場合じゃない、行かないと！」

慌てて布団を跳ね退け着替えを箆笥から取り出しパジャマを脱ぎ捨てる。

ちやつちやつと着替えて割れた水晶を片付け、急いで部屋を飛び出し

た。

あの水晶は『招きの水晶』って呼ばれるマジックアイテム。所謂魔具の一種なんだけど、ちょっと特殊な性能を持つてて普通の人には扱いにくい。

魔具は使用者が魔力を込める事で効力を発揮するけど、招きの水晶は使用者の想いを消費して発動するタイプの魔具だ。

逢いたいって想いを毎日込めて水晶を想いでいっぱいしたら、水晶が割れて想い人を呼び出す事が出来る。

普通だったら会いに行った方が早いし、相手の都合に関係無く呼び出すもんだからイマイチ使い勝手は宜しくない。

でも私にはこれ以上無い至高のアイテムだ。

なにせ本来なら二度と逢えないハズのお兄ちゃんに逢えるというチートアイテムだからね。

長い回廊を右に回ると1人の女性がこちらに向かって歩いてくるのが見えた。

背が高くスラッとしてモデルさんかってくらい足が長い。

それでいて体の要所は女性的な丸みを帯びていて悩ましげだし、胸は大きいし――ありゃFは間違いないわね。

切れ長で睫毛の長い赤い瞳と、腰まで伸びる長い緑銀のサラサラな髪の毛が相俟ってエキゾチックパンク……いや、少なくとも日本じゃないか。

まあ要約するとスゴイ美人な近所のお姉さん、って雰囲気だ。

私とお揃いの赤いローブを着てるけど、本当にお揃いなのか？ってくらい輝いて見える。

やっぱり素材が良いと服も違って見えるのね。

彼女も私に気付いたようで、甘い微笑みを浮かべて小さく手を振る。

「あら、ミューリちゃんおはよう。休眠してる間お話出来なくて寂しかったわあ。……って、あ、あら？待ってミューリちゃん、私そんなに早く走れないわよお」

上げた手をむんずと掴まえてそのまま駆け抜ける。

普段なら抱き付いて甘えたい所だけど、今は一大事。

お姉ちゃんに付き合ってぼわぼわしてたら日がくれちゃうよ。

迷路のように入り組んだ回廊を走りがてら、掻い摘んでこれからの事を話しておく。

「お姉ちゃん、起きたら水晶が割れてたの！」

「まあ、じゃあ遂にミューリちゃんのお兄さんがこの世界に？」

「そうなの、今から迎えに行くから長老に許可もらいに行くよ！返事は聞かないけどさ」

「でもそれって許可もらった事になるのかしら？」

「いいのよ、本人知らない間に抜け出して事後承諾にするより良心的でしょ？」

「わあ、ミューリちゃん優しいのね♪良い子に育ってお姉ちゃん嬉しいわ」

お解り頂けただろうか。なんちって。

この短い会話で充分解る通り、お姉ちゃんはちよつとのんびり屋で天然で良い人。

これで私達の中で一番頭が良い天才って言うんだからびっくりだよね。

何度目かの角を曲がると、やけに荘厳な雰囲気醸し出している扉が見えた。

お姉ちゃんの手を離し更に加速して、勢いを殺さずに両足で踏み切りドロップキック。

「たのもー！ー！」

「ぶべらぐあっ！」

思いつ切り開かれた扉にぶつかり何かが吹き飛んだ気がするけど気にしない。

ゴロゴロ転がって体勢を整える。

すくつと立ち上がって椅子に座って気ままにお茶を飲んでいた禿げ上がったお爺さんに言い放つ。

「という訳で、ちよつくら行ってくるわ！」

「ミューリちゃん、それじゃ誰も解らないわよお？ほら、長老固まつちやてる」

「そう？でもお姉ちゃんは解ってるからいいんじゃない？誰にも解らないのにお姉ちゃんだけ解るなんて、流石お姉ちゃん頭良い！」

「うふふ、ミューリちゃんに褒められちゃったあ」

わあい、と2人で仲良くハイタッチ。

……はっ！？いけないいけない、お姉ちゃんワールドに引き込まれちゃった。

お姉ちゃんと会話するところまでばわわしてくる。

と、さっき吹き飛ばされた衛兵のおっさん……ああ、いけない。綺麗

麗な言葉を使わないとお兄ちゃんに「めっ」ってされちゃう。衛兵の綺麗なおっさんが近付いてきた。

「待てミューリ、一体何処へ行くと言うんだ」

「決まってるじゃない、前世から結ばれていた愛しの伴侶の元よ！」
「何、遂に見付かったのか!？」

「そうなの、早く逢いに行かないとお兄ちゃん素敵で格好良くて優しくてフェロモンむんむんで一目見ただけで胸がキュンとなって思い描いただけで切なくなって触れられただけでイっちゃいそうになつて、ああ、ああ！」

「悶えるなよ！」

「これが悶えずにいられますか！待っててねお兄ちゃん、すぐイクから！」

お姉ちゃんの手を掴み直して開け放たれたままの扉を駆け抜ける。すべすべしてもちもちして思わず頬を擦り寄せたくなる感触だけど、なんとかお姉ちゃんの手から意識を切り離す。

回廊を左へ左へ、時々右へ。

階段を駆け降り再びダッシュ。

引き摺られるようになりながら横を走るお姉ちゃんが思い出したように言った。

「ねえミューリちゃん、今向かってるのって転移門？」

「そうだよ！あれならお兄ちゃんの元へひとつ飛びだもん」

「でも私魔石持っていないわよお？」

「大丈夫、こんな事も有ろうかとコッソリ研究塔からちよろまかしてきたから！」

「あらあ、悪い子♪でも恋する乙女は止められないって言うし、今回は特別に許しちゃうわ」

「さっすが、お姉ちゃんは話が解るっ！」

階段を駆け降り人通りの多い通路を擦り抜けるように駆け抜ける。
みんな何事かとびっくりしてるけど、私とお姉ちゃんの顔を見て把握したらしく声援が飛んでくる。

「おっ、嬢ちゃん遂に恋人見付かったのか！」

「そうだよ！今から抱き締めてもらいに行くの！」

「よし、行ってこい！子供出来るまで帰って来るなよ！」

「ありがと、おじさん！」

「そうかい、やっとミューリちゃんにも春が来たんだねえ」

「ミューリお姉ちゃん、結婚するの？おめでと〜♪」

「ナギさんも遂に嫁に行くのかあ。ミューリ嬢ちゃんとも仲良くな
！」

「くうっ、ミューリちゃんとナギさんが嫁に行っちゃうなんて」

「ははは、めでたい事さ、泣くんじゃないよ！それにしてもあの2人を一度に嫁に迎えるなんて、婿殿は幸せ者だねえ」

「あらあら、皆さんありがとうございます」

「みんな、ありがと、ありがとうございます！」

暖かい声援に包まれて、ちょっとくすぐったい。

みんなが祝福してくれた分より、もっと幸せになるからね！

一足早い結婚式みたいになった回廊も通り過ぎ、いよいよ目的の扉が見えてくる。

同じようにお姉ちゃんの手を離して空中に飛び上がる。

「ファルコンキイイック！」

「ヌウウウイ！」

ワートホグに吹き飛ばされたマスターチーフみたいな声がしたけど気にしない。

今度はそのまましゅたつと着地を決める。

「10, 0! なんちって」

「きやあゝ、ミュージリちゃんカッコ良い♪」

わあい、と笑顔で2度目のハイタッチ。

吹き飛ばされてピクピクしてる転移門の管理人に、すちゃっと右手を上げてサムズアップ。

「そんな訳で、ちょっくら行ってくるわ！」

左手に握り締めた魔石を割ると、周囲に魔力の渦が出来る。

開放された魔力に反応して転移門が蒼く輝き、私とお姉ちゃんの体を光が包み込む。

右手でお姉ちゃんの手を繋ぎ、私は高らかに詠唱を始めた。

「開け、空間の門よ! 私とお姉ちゃんを望むがまま、愛しのお兄ち

やんの元へ運べ！レッツ転移！」

眩い光が視界を埋め尽くし、空間が弾けるように歪んで、私とお姉ちゃんは空間を飛んだ。

「しかし、ミューリにあそこまで慕われるとは如何程の人物だったのか。それとなく同情もするが」

ふう、と溜め息を吐き出して走り去った廊下を見詰める。

と、先程まで動かなかった長老が微かに身動ぎした。

矢張り長老ともなれば何が起るのか予見出来ていたのだろう、動じず黙って送り出してやるとは流石長老。

俺もいつかは長老のようにどっしりと構えた大人になりたいものだ。

「ふわぁーあ、ちょっとうたた寝してしもうたわい」

「って、寝てたんかい！」

「ほ、どうしたんじゃロージ？何かあったんかいのう」

背伸びして骨を鳴らす長老。

アンタが寝てる間に嵐が来たのさ、とは言えずに深い溜め息を吐くしか無かった。

閑話——忘れられた集落から。（後書き）

今回はちよっぴり短いです。

それと前回のお話にはなんちゃって科学が満載です。

学校とかで話したら黄色い救急車を呼ばれるので注意が必要です。

ニート脱出の第一歩。

ぴよぴよびよ。

かわいらしい声に導かれるように、枕元へ手を伸ばす。
手探りでスイッチを探し当てぽちっと押すと、耳をくすぐっていた
かわいらしい声が途切れる。

——朝かあ。

ぼんやりとする意識で無理矢理上体を起こすと、カーテンの隙間か
ら柔らかな陽射しが目を刺激する。

ぼーっとしていたら左腕を何かが引つ張ってくる。

何だろう、と目を向けたらパジャマ姿のミナが微笑んでいた。

あれ、何でミナがここにいるんだろう。

取り敢えず笑顔を返すと、急にミナが抱き付いてきた。

「わぷっ、ミナ、何……」

「ちゅっ、ちゅ、ちゅぷっ、んっ、んむっ、ぺろぺろ、はむう、ち
ゅううっ♪」

キスされました。しかも濃厚なやつ。

突然の事に驚くけど、僕にいつまでも驚いている余裕は無い。

何故なら僕の息子が最高にハイっちゃってるからだ。

朝だからただでさえ血流が良くなってる所に、美少女の甘い匂いと
柔らかな舌触りがプラスされて気力限界突破状態だ。

思いつ切り自己主張を始める息子に気付いて、ミナがほっぺを赤く染めた。

もじもじと指を突き合わせながら、上目遣いに僕を見上げてか細い声を出す。

「あのね、私まだお子様だから気持ちよく出来ないかもしれないけど、ユーリがしたいなら……私、頑張るよ？」

わーにんぐ、わーにんぐ！

りせいがほうかいしています、すみやかにしゅうふくしてください！あれ、発音わーにんぐでいいんだっけ？

取り敢えずミナがかわいすぎて僕の理性がピーンチ！？

思わず抱き締めようとする両腕と突き上げようとする腰を気合いでねじ伏せる。

ダメだ息子、一時の快楽に負けてミナを傷付いたら後悔するぞ？

頭の中の天使と悪魔が協力して息子を取り押さえるのを確認して、僕はゆっくりとミナの体を引き離した。

「ミナ、気持ちは嬉しいけど、まだダメだよ」

「……やっぱり、私みたいな子供じゃダメ？」

「違うんだ、ミナ。ミナはかわいいし優しいし、とっても素敵な女の子だよ。だけど、だからこそ、自分を安売りなんてしちゃいけない。ミナが子供を作る年になって、自分が思い描いた大人になる時まで待つんだ。その時に、まだ僕を好きでいてくれたなら、僕の方からプロポーズさせて欲しい」

中学2年の時に考えた対幼女説得呪文がこんな所で役に立つなんて、
案外中2病も悪くないかも。
まあほとんど本心だけどね。

大人になっても僕なんかの事を想ってくれる人なんてそういないだ
ろうし、そこまで僕を想ってくれるなら、僕もその想いに全力で応
えていきたいし。

……はっ！なんか今すごい恥ずかしいセリフを言った気がする！
こういう時は……これだ！

——キリッ。

ふう、これで何を言っても恥ずかしくないぞ。

そんなしょうもない事を考えてる僕とは対照的に、ミナはうつとり
とした目で僕を見上げていた。

うっ、キラキラの目が眩しいです。

「ユーリ……うん、私大人になるまでガマンするね。あ、でもユー
リがガマン出来なくなったら、いつでも言ってるね？私の体と心はユ
ーリ専用なんだから♪」

ぐはぁっ！

僕の理性に大ダメージ！

息子軍の盛り返しに天使軍と悪魔軍は押され気味です。

いやいやミナ、せっかく僕がミナに我慢するよう言ったのに、逆に
僕が我慢出来なくなるような事を言ったらダメだよ。

悶えてる僕に、もう一度優しく触れるだけのキスをして離れるミナ。

さっきまでお腹の上にあった体温が失われていくのを、ちょっぴり寂しく思いながら、僕は枕元の目覚まし時計に目を向ける。

——おはよう、美由里。

愛しい妹の声が吹き込まれた、少し色褪せた目覚まし時計。

昨日麻袋を漁っていたら、地球の僕の部屋に置いてあったハズのこれが出てきた。

暖かくて寂しい、なんとも不思議な気持ちを覚えて、僕はこれを枕元にセットしたんだ。

一週間振りに聴いた妹の声に心が和む。

ミナやエアリィさんも素敵だけど、やっぱり妹分を補給しないと元気が出ないしね。

ふと視線を感じて顔を戻すと、ミナが優しく微笑んでいた。

「ユーリ、妹さんの事大好きなんだね」

「うん、自慢の妹だよ」

「そっかあ、ちょっとしつとしちゃう」

「嫉妬？」

「だって私の知らないユーリをいっぱい知ってるし、ユーリにそんなに愛されてるなんてうらやましいもん」

「あはは、でも妹からしたらミナの方が羨ましいかもね」

「ほえ、なんで？」

「よく僕のお嫁さんになりたいって言ってたけど、兄妹だから結婚出来ないって言ったら泣かれちゃったし。だからその辺りはミナの事を羨ましがってるかも」

「どうかなく？ユーリは私みたいな小さい子供にもよくじょうしち

やう、えっちさんだからね♪妹さんに迫られたら断れなかったかも」

「ハッハッハ、そんな事……ナイデスヨ？多分」

「あはは、ユーリのへんたいく♪」

「なにおう！？」

「わあ、ユーリが怒った♪」

ドタバタと追いかけてこを始める。

部屋を3周した所でわざとミナが掴まり、僕に擦り寄ってきた。

そのままベッドに座り、膝の上にミナを乗せて後ろから抱き締める。

「わあ、つかまっちゃった！？ユーリにえっちな事されるうゝ♪」

「ふっふっふ、そんなにえっちな事されたいなら、ミナにはすぐくえっちなお仕置きしちゃうぞ」

「ユーリさん、朝から何を騒いで……」

「「あっ」」

ある意味絶妙のタイミングでシーナが部屋のドアを開けた。

ベッドの上には走り回ったせいで顔を赤くした、少し息の乱れた2人。

ミナは僕の手を自分のまだ膨らんでもいない胸に押し当てて、僕はさっきの余韻で TENT を張ったままの下半身をミナの太腿に挟まれている状態。

ぴこーん、とどこかでフラグの立つ音が聞こえた。

「ユーリさああああん！」

こうして僕とミナは朝から雷の洗礼を受けるのでした。
ちゃんちゃん。

「はっはっは、それでユーリ君のほっぺに見事な紅葉が付いている訳か」

「まあ自業自得な面もありますよ。っていうかこっちの世界にも紅葉あるんですね、それにびっくりですよ」

テーブルを4人で囲みながら、簡単な朝食を取る。

ちなみに今日の朝ご飯担当は僕だ。

お馴染みの麻袋から取り出した食パンに甘い玉子焼きとハムとチーズを載せて、窯に入れてパンに軽く焦げ目が付いた所で取り出す簡単レシピだ。

飲み物は同じく麻袋から取り出した100%オレンジジュース。

何故か取り出した時に冷蔵庫の中に入れてたのだったくらいキンキンに冷えていた。

色と香り、それに味を見た限り賞味期間にも問題はなさそう。

やっぱりエアリイさんが気に入って、早々に1リットル飲み干してしまった。

こくこく喉を鳴らして美味しそうにオレンジジュースを飲むエアリイさんは小動物みたいでかわいかった。

シーナはムスツとした顔で蕎麦茶をすすっている。

パンに蕎麦茶はどうだろう、って思ったけど本人が満足そうだしいいか。

ミナは頭に真新しいたんこぶを作って、もみゅもみゅと小さな口で

パンを咀嚼中。

甘い玉子焼きが大ヒットらしく、食べてるパンは早くも5切れ目。そのちっこい体のどこに入るのか、お兄さんすごく疑問です。

かくいう僕はエアリィさんに指摘された通り、ほっぺに真っ赤な紅葉をくつつけている。

じんじんひりひりと痛むけど、シーナが付けてくれた傷って考えたらむしろ……はっ、いけないいけない、思考が変態チックになった。

気を付けないとまたシーナにビンタされちゃうし。

あれ、それって罰だっけご褒美だっけ？

「あ、そろそろ時間か。食べたら出発しないとね」

まったりしてたら腕時計からピーピーと電子音が鳴り響く。

示された時間は8時。

もうちょつとしたら街へ行く行商人の馬車が出発する時間だ。

「次に逢うのは一週間後か。ああ、矢張り私も一緒に行こうかな？」

「あはは、心配性ですねエアリィさんは。大丈夫、しっかり稼いできますから！」

「いや、そういう訳では無いんだが……」

皿に手を伸ばすと指先が空を切る。

ありゃ、もうみんなで食べちゃったか。

まあ腹八分目でいいかな？

って思ってたなら、ミナが持つてるパンを半分にちぎって片方を僕に

差し出した。

「はんぶんこしよ♪」

「ありがとうミナ」

「にへへ、ふーふはなんでもはんぶんこだよ」

パンを受け取り、2人で仲良くもぐもぐはむはむ。

何故かこのパンが一番美味しく感じる。

やっぱり最上の調味料は愛ですな。

美味しく頂いてごちそうさま。

さあ、早速出発の為の準備をしないと。といっても、着替えて麻袋を持つくらいだけどね。

いつもの白Yシャツと黒のスラックス、その上に灰色のローブを羽織る。

耐熱性や耐寒性、耐刃性にも優れて寝るときには毛布代わりにもなる万能ローブだ。おまけに軽くて魔法耐性まで付いている。

勿論麻袋から出て来た。

正直この麻袋を持ったら誰でもチートになれる気がする。

麻袋を肩に掛けて準備完了。

あ、肩紐は昨日シーナが付けてくれた。

裁縫してる姿はなかなか似合ってて、ちょっぴり見惚れてたら「何見てるんですか」って照れたシーナにぺちぺち叩かれた。

ツンデレさんめ。

玄関に出るとエアリイさんとシーナが見送りに来てくれていた。

「あれ、ミナは？」

「呼んだんですけど降りて来ないんです、返事もしないし」

「恐らくユーリ君と離れるのが寂しくて会いに来れないだけじゃないかな？」

「そっか、了解。お土産買ってくるから期待してて、ってミナに伝えておいて」

「ああ、解ったよ。私とシーナ君にもお土産を忘れないでくれよ？」

「あはは、勿論だよ。じゃあシーナ、エアリィさん、行って来ます」「行ってらっしゃい、ユーリ君」

「道中気を付けて下さいね」

手をぶんぶん振りながら教会を後にする。

見送りに来てくれなかったミナがちょっと心配だけどね。

朝ご飯の時は普通だったのに、なんでだろう？お土産をちょっぴり豪華にして機嫌直してもらおっと。

そんな事を考えながら村を歩いていくと、村の入り口に止まる馬車を見つけた。

そろそろ出発の準備が完了するみたいで、乗り込むのは僕が最後までいい。

商隊の一番偉いっぽい人が僕を見て、恰幅のいい体を揺らしながら近付いてきた。

「おっ、きたな兄ちゃん」

「おはようございます。お待ちせしたみたいですみません」

「いやいや、気にしないでいいさ。なんせ兄ちゃんの初仕事への門出だ、日が暮れるまで待ってやるさ」

かっかっか、と豪快に笑うおじさんに若干気圧されつつ、指定された3台目の馬車に乗り込む。

中には全身を紫のローブで隠すようにした人が座っていた。
結構小柄な人で、頭をすっぽりフードで覆っている為顔は見えない。

「初めまして、ユーリといいます。街までの短い間でですけどよろしくお願いします」

出来る限りにこやかに話し掛けてみた。

やっぱり旅の仲間とは仲良く話が出来くらいじゃないとつまらないね。

フードの人は僕の方に顔を向けると、軽く会釈をしてくれた。

——恥ずかしがり屋さんなのかな？それとも単に無口だったり。

フードの人の向かいに座ると、前の方からかけ声が聞こえてきた。
出発の合図だ。

ゆっくりと馬車が動き出し、タマタ村が離れていく。

少しだけ後ろ髪を引かれる光景を眺めながら、僕は拳を握って決意を新たにした。

——よし、こっちの世界での初仕事だ。もう誰にもニートだなんて言わせないぞ！

事の始まりは一昨日。

夕食の席で教会の運営費やシーナ達の生活費の事を聴いたのがきつかけだった。

「じゃあ教会回りは全部？」

「ええ、生前に管理費や維持費やそれに掛かる税金は神父様が一括で払い込んでいるので、実質掛かっているお金は私達の食費や日用品を買う雑費くらいですね」

「心配しなくてもだいじょぶだよ！私がユーリを養ってあげる♪」

「い、いやいや、それは男の沽券に関わるから謹んで辞退させてもらうよ」

こんなに小さなミナのヒモになるとか、いくら何でも情けなさすぎる。

自分の食い扶持くらい自分で稼がないと！

そんな訳でどこか働ける場所は無いかと聞いてみたら、エアリィさんが街の冒険者ギルドに登録したらどうかって言ってくれた。

「冒険者ギルドは仕事を斡旋するギルドでね。簡単なものは庭の草むしり、難しいのや危険なものになると山賊や傭兵崩れの掃討なんかがあるよ」

「なるほど、それなら僕にも出来そうですね」

「ここから近い街といえば北の『クワンカ』かな。確か今来ていた商隊が北へ向かうようだから、同乗を頼んでみたらどうだい？」

「そうですね、せっかくだし行ってみようかな」

冒険者ギルドかあ、なんだか異世界っぽいなあ。
ちょっぴりテンション上がったきた。

「よし、いっぱい稼いでミナもシーナも養ってあげる！」

「おお、ユーリカッコいい♪」

「わ、私もですかっ!？」

「おやおや、私は養ってくれないのかい？寂しいなあ」

「勿論エアリィさんですよ！みんな纏めて僕が面倒見ます」

思い返したら妙なフラグいっぱい立てた気がする。

っていうかあの発言って一歩間違えたら「みんな僕の嫁！」って言うてるようなものじゃないんだろうか。

……ま、まあ余り深く考えるのはよそう。

そんな訳で僕は冒険者ギルドへ向けて出発したんだ。

往復で3日くらい掛かるから実質4日しか働く時間は無いけど、その分数をこなして稼ごうかな。

なんて考えていたら視線を感じた。

先程からフードの人がチラッと僕の様子を窺ってる。

照れて話し掛けづらいのかな？

なんて思ってたら、突然フードの人が僕に声をかけてきた。

「もう、まだ解んない？」

「へっ？」

僕の膝の上に乗って、被っていたフードを脱ぎさる。
はらりと流れる紫銀のショートボブ。
くりくりつとしたかわいい瞳が、イタズラっ子のように僕を見上げていた。

「み、ミナ？」

「うん、ユーリのミナだよ♪」

満面の笑みを浮かべて僕に抱き付くミナ。

幼女特有の甘い匂いが鼻をくすぐる。

ああ、やっぱりミナはいい匂いがするなあくんかくんか。

ってなんでミナがここにいるんだ!?

正氣に戻った僕が口を開こうとしたのを察知してか、ミナは柔らかな唇で僕の言葉を封じた。

「ちゅっ、ちゅくっ、れろれろ……♪」

ミナの舌が僕の歯や舌を舐め上げる度に、ぞわりと快感が込み上がってくる。

小さな舌の横から甘い唾液が流れ込み、僕の思考を溶かしていく。

ミナの唾液を求めて舌を伸ばす。

一瞬だけ怯んだミナの舌に僕の舌を絡ませ、僕の匂いを、味を染み込ませていく。

ぴくぴくとかわいらしく震える体を優しく抱き締め、その小さな舌先を吸い上げた。

「ふむうつ、んっ、んんっ♪」

与えられる快感に身を任せて目を潤ませるミナ。

ハートマークを乱舞させながら、僕の唾液をこくこくと喉を鳴らして美味しそうに飲み込む。

突然、馬車が大きく揺れた。

道端の石にでも乗り上げたんだろう。

その衝撃でミナの体が浮き、落ちた時に僕のストラックスに張られたテントにミナの股間が擦れた。

声にならない声を上げ体を痙攣させる。

不意の衝撃に絶頂させられたようだ。

全身から力が抜け僕に凭れ掛かるミナ。

唇が離れ、荒い息を吐き出す。

「はへえ……あへえ……ゆーり、はげしすぎだよお……♪」

まだ性の目覚めも来ていないミナには刺激が強すぎたみたいで、だらしないところけ顔を僕に向ける。

僕は優しくほっぺにキスをして、脅かすように言った。

「ミナがお嫁さんになったら、もっと気持ち良くてもっとえっちな事してあげる」

「ふああ……っ、なるう……ゆーりのおよめさんになるからあ、もっとお、もっとしてえ……♪」

「ふふ、ミナはえっちだなあ」

もう一度優しくほっぺにキスをしたら、ミナはぶるっと体を震わせて気絶した。

余りの興奮と快感に脳が付いてこれなかったみたいだ。やっぱりかわいいなあミナは。

髪を撫でてあげると幸せそうに微笑んだ。

——って、つい本能に任せてキスしちゃったけど。なんでミナがいるか聴きそびれちゃったな。

次からはちゃんと流されないようにしつかりしないと。でもミナかわいいから無理かな、なんて早くも敗北宣言しつつ、起こさないよう優しく抱きかかえる。

っていうか朝ミナに言った事と真逆な事してるな僕。

あれだけキザなセリフを口にしたのに早くもミナの幼女ボディを弄ぶなんて、僕ってもしかして鬼畜？

ちよっぴり自己嫌悪に陥っていると大きな欠伸が出る。

——そういえば朝早かったし、昨日は興奮して眠るの遅かったなあ。

街に到着するのは明日の昼前。

やる事といえば精々毎食のお手伝いだ。

それまでミナとゆっくりしていようかな。

ぽかぽかと暖かい空気に包まれながら、僕も少し眠る事にした。

いざ行かん、冒険者ギルド。

どうも、最近息子に精神を奪われがちな片桐悠里です。

昨日は本当に色んな意味で危なかった。

僕にべったりなミナを見て商人さんには冷やかされるし、煽られたミナが迫ってきてピンクで気まずい雰囲気になるし、馬車の中で何回かミナを押し倒しそうになるし。

いやあ、流石に我慢したよ。

どうせなら気兼ねなく2人っきりの空間でミナの初めてをもらってあげたい……って、また思考が息子に奪われてる！？

こほん、まあそんな事はあったけど特に事件も無く1日目は終了した。

いや、ミナがいた事が事件っちゃ事件だけどね。

聴いてみたら、僕と離れたくない一心でついて来ちゃった、って事らしい。

止めても聞かないだろうって判断したエアリィさんにこっそり手回ししてもらって、ローブとか護身用のナイフとか用意してもらったみたい。

でもシーナには内緒だったみたいで、帰ったらげんこつが確定。

家族に心配掛けちゃダメだよって、叱ったらミナは案外あっさりと聞き入れてくれた。

やっぱり妹を叱る時にも使った「めっ」が効いたのかな？

取り敢えずお仕置きという事で、ミナには僕が担当する夕飯作りの手伝いを任命した。

夕食の時に僕が作った豚汁はなかなか好評だった。

商人さん達はこれを商品展開出来ないかって考えてたし、護衛の傭兵さん達は競うようにおかわりしてくれた。

僕とミナは少し離れた所で互いに食べさせあってた。

端から見たらただのバカカップルだったんじゃないだろうか。

そして2日目の朝、珍しくミナよりも早く起きた僕はのんびりと外の景色を眺めていた。

僕の住んでた所じやなかなか見られない、緑豊かな自然。

やっぱり空気が美味しいなあ、排気ガスも無いし車の騒音も無いし。ぼんやりしてたら前髪が鼻先に降りてきていた。

そういえば床屋で髪切ってもらったの2か月も前か、そりゃ伸びるよね。

「……うっとおしいなあ」

ぽつりと口に出る。

おでこや鼻に髪の毛が掛かると、チカチカ痛痒くなるから嫌なんだよなあ。

帰ったらシーナにお願いしようかな？

あ、でもそれまでチカチカに耐えなきゃいけないのか。

うっとおしい部分だけ先に切って、後でシーナに整えてもらおっと。麻袋からはさみを取り出す。

出て来たのは何故か工作用のはさみだったけど、まあ切れるからいいかって気にせず髪の毛を切る。

うん、まあこんなもんな？

手鏡で変な髪型になってないのを確認してはさみをしまう。

あ、どうせなら髪の毛も自動で処理した方がいいよね。

なんだかんだで慣れてきた僕は魔法の新しい使い方を試してみる事にした。

ずばり、魔法付呪！

大層なネーミングだけど、早い話が髪の毛にファイヤーの魔法をエ

ンチャントして燃やそうって事だ。

エンチャント出来るなら案外いい儲け話になりそうだし。

でも髪の毛って燃えると異臭するんだよねえ、どうしようか？

そこまで考えた時、昨日護衛のお姉さんが言っていた事を思い出した。

この辺には人を襲う狼が出るらしい。

その狼に髪の毛をくつつけて撃退したらどうだろう。

襲われる人もいなくなるし、狼には悪いけどこれも僕の好奇心の為、ちよつと熱いかもしれないけど我慢してもらおう。

早速髪の毛にファイヤーの魔法を宿す。

イメージは髪の毛の対象が接触したらスイッチが入って魔法が発動するピタゴラ風味。

ついでに狼を狙って追尾する魔法も付呪しておこう。

なんて名前がいいかな？

ストーカーだと犯罪チックだし、もっとナウイ名前を付けたい。

「……チェイサー」

おお、これだ！

僕の好きなアニメの主題歌から取ってみたら意外としっくりきた。

早速付呪して馬車の覗き窓から髪の毛をばらまくと、風に乗って森の奥へ飛んでいった。

微かに犬の鳴き声みたいなのが聞こえてきたのにはびっくりしたね。まさか囲まれてた？

怖い怖い、って身震いしているとミナが目を擦りながらもぞもぞ動き出した。

「ゆーりい……?」

「おはよう、ミナ」

「ゆーりだぁ♪ゆーりい、おはようのちゅう、しよお?」

寝ぼけ眼で僕に抱き付きキスをねだる小さなお姫様。

朝っぱらから余りのかわいさにお兄さん大爆発しそうです。

というか、やっぱり昨日1日で僕とミナの距離が縮まった気がする。
主にえっちな方向に。

外に出て顔を洗っていると、いい匂いがしてきた。

釣られて行ってみるとおじさんがコーンスープを温めていた。

ジャガイモやとうもろこし、カボチャなんかはこっちの世界でもポピュラーな食材で、特にとうもろこしは地球のよりずっと甘くて美味しい。

しかもとうもろこしは僕の好物。

口いっぱいによだれを溜めていたらおじさんに「待て、お座り」って言われた。

犬じゃないやい! って思ったけど体は反射的にお座りのポーズを取ってた。

妹とやっていたわんわんごっこの影響がこんな所にも!

おじさんはまさか僕が本当にお座りするとは思わなかったらしく爆笑してた。

むくれていたらコーンスープをちよっぴり多くよそってもらった。
ラッキー。

まあミナに見られなかったのは不幸中の幸いだったかな?
見られたら恥ずかしいし。

朝食の後は再び馬車に揺られる時間。

狼が来るかな〜ってドキドキしてたけど、どうやらさっきので逃げ出したみたいで、ちょっと安心。

しばらくミナとイチヤイチヤらぶらぶしている、前の方からおじさんの声が飛んできた。

「兄ちゃん、街が見えてきたぞ！」

おじさんの声に弾かれるように2人で身を乗り出して前方を見ると、活気溢れる街並みが広がっていた。

街の真ん中にそびえ立つ、一際高い真っ白な建物が見える。

あれが教会だろう。

この大陸では宗教がある程度の力を持っていて、一定の水準の教育は教会が行っている。

基本的に無料で教育や治療が受けられる為、貴族に受けは良くないけど民衆からの評判は上々。

だから民意を掴んでおく為に教会に何らかの形で支援せざるを得ないけど、元々教会に野心は無く政治や権力に色を見せないから取り入りにくく、まあ取り敢えず民衆の人気取りに仲良くしておくかってスタンスの貴族が多いらしい。

以上、エアリィさんからの受け売りっ。

僕だって偶には勉強するんだ。

まあ、今は初めて見る異世界の街にテンション上がっちゃってるけどね。

「おお、すごいや」

「おお、すごいね」

同じ反応をしてしまい、顔を合わせてクスクス笑っているとおじさんに怒られた。

「夫婦揃ってバカやってないで降りる準備しておけよ！」

「はぁーい」

商隊の皆さんに別れを告げて中央広場まで歩いてきたけど、目に映るものが珍しくてぽかんとしちゃった。

ミナも同じようできりにきよろきよと視線をさまよわせている。取り敢えず宿を探しに行く事にした。

ミナがいるからそれなりにいい宿じゃないといけないかな。

手を差し出すと、少し照れたように笑って僕の手をキュッと握るミナ。

ミナかわいいよミナ、ってのほほんとしつつ広場の案内板に目を通していると、活発そうな男の子が近付いてきた。

「兄ちゃん、何か探してるのか？」

「宿屋を探してるんだけど……この街は初めてだから、どこがいいか解らないんだ。そこまで高級じゃなくてもいいから、安心安全なご飯の美味しい宿屋ってあるかな？」

「それならうってつけがあるぜ！」

「それじゃ案内してもらおうかな？」

男の子の手に銅貨5枚を握らせると、男の子は目を見開いた。

「ちょっと、兄ちゃんバカか!？」

「いきなり失敬な!？」

「いや、だって普通銅貨1枚くれりゃいい方だぜ? 5枚なんて頭の緩いボンボンが気まぐれでバラまく時くらいしか見た事ねえや」

「いいの、これからいっぱい稼ぐ予定だし。それに後ろの子、妹さんじゃないの?」

僕の視線の先、男の子と同じ赤茶色の髪の毛をツインテールに纏めた女の子がこちらを伺っている。

手を振ったらちょっと驚いたみたいだけど、小さく手を振り返してくれた。

「偽善なのは解ってるけど、僕のいい気分を演出する為にもらっておいてよ。甘いお菓子でも買ってあげたら喜ぶんじゃない?」

「……変わった奴だな。でも、兄ちゃんバカだけどいい奴だ」

ニカッと笑って銅貨を受け取る男の子。

うん、いい笑顔だ。

ロリとシヨタには優しく親身に、それが異世界トリップでは大きな意味を持つハズ。

ちよっとした打算も含めて、逞しく生きて行かないとね!

先導する兄妹について行くと、脇腹の肉を摘まれた。

見るとミナがちよっとむくれた顔で僕を見上げていた。

「まったく、ユーリはすぐ小さい女の子の前でカッコつけたがるんだから」

「いたた、ミナ、痛いよ」

「ユーリのうわきものお」

クスクスと笑いながら僕の肉を摘むミナ。

くそう、早くも尻に敷かれ気味だ。

そうそう、路銀はシーナに借金してきたんだ。

お金稼いでくるって言ったのに、稼ぐ為のお金を借金するとか若干のヒモ臭がするけどね。

でも大丈夫、絶対にお金稼いで借金を返して、ついでにシーナにお土産までプレゼントしちゃうもんね！

そしたらシーナもちよっぴりデレたりしちゃうかも。

エアリィさんには髪飾りとか似合いそうだなあ、プレゼントしたら毎日付けてくれたりして。

でへへ、ってほんの少しニヤけたら脇腹の痛みが鋭くなった。

「いっただだっ!?!」

「もう、ユーリのおバカ!……やっぱり胸大きくないとダメなのかなあ」

小さな呟きも聞こえたけど、僕は声を大にして言いたい。

ちっぱいも大好物です！

僕とミナのやり取りを見ていた男の子が頭に?を浮かべて言った。

「兄ちゃんとその子ってどんな関係なんだ？ 兄妹にしては似てないし」

「そうだなあ、多分「夫婦だよ！」……だそうですよ？」

「疑問形で答えるなよ！ ってか兄ちゃん尻に敷かれてるなあ」

「薄々気付いてたよ、それは」

「っと、着いたぜ兄ちゃん」

足を止めるとなかなか立派な門構えの宿屋があった。

大きな看板には……見た事も無い文字。

なんて読むのか見当も付かない。

「ちよっぴり値は張るけど安宿とは比べ物にならないくらい清潔だし料理も旨いぜ」

「道案内ありがとう。そうだ、冒険者ギルドってどこ？」

「それならこの道を真っ直ぐに行って広い通りを左に曲がったらすぐだぜ」

「そっか。ほい、お駄賃」

「……いや、もうどうでもいいか」

追加で銅貨5枚を渡した僕を呆れた顔で見上げた男の子。

なんだか諦めたように溜め息を吐いて、来た道に戻って行った。

去り際に両手をぶんぶん振ってバイバイしてくれた女の子に癒やされつつ、僕とミナは宿屋に足を踏み入れた。

内装は落ち着いた雰囲気、派手さはないけど華やかな印象。

と、来客に気付いた女性が床を掃いていた手を止めて、僕達に近付いてきた。

30過ぎくらいの背の高い女性で、女将さんって形容がぴったり合いそうな人だ。

「いらっしやい、部屋をお探しかい？それとも食事？」

「5日間程部屋をお借りしたいんですが」

「朝晩の食事付きで1泊銅貨30枚、5日間ならちよつと割引して銀貨2枚と銅貨40枚でどうだい？」

「2人で寝られるちよつと大きめのベッドがあります？」

「ああ、お洒落な部屋が空いてるよ」

「じゃあその部屋をお願いします」

僕は腰に固定したポーチから銀貨3枚を取り出して女将さんに渡した。

この世界のお金は4種類ある。

一番安い通貨が銅貨、銅貨50枚で銀貨1枚、銀貨50枚で金貨1枚、金貨50枚で白金貨1枚だ。

今の会計なら銀貨3枚出してお釣りが銅貨10枚。

数学の授業中、広げたら手を繋いでる人形をプリントの切れ端で作っていた僕にとって、この単位の理解はなかなか難しかった。

テストは常に赤点タイトロープだったし。

苦い思い出に浸っていたら、ミナに手を引かれて現実に引き戻された。

女将さんに案内された部屋は2階の右奥、なかなか広くてお洒落な部屋だった。

ふかふかのソファードとシックなテーブル、そして目を引くダブルベッド。

「朝食と夕食は1階の食堂に降りてきておくれ。教会の鐘が鳴る頃には用意が出来てるからね」

「解りました、これから5日間お世話になります」

ミナと一緒にぺこりと頭を下げる。

すると女将さんは驚いたようで、頬をポリポリ掻いていた。

「今時珍しく礼儀正しいお客様だねえ、なんだかこっちが落ち着かないよ。はい、これが部屋の鍵」

「どうも。じゃあミナ、荷物置いたら早速行こうか？」

「うん、行こう行こう♪」

といっても荷物らしい荷物は着替えを入れたサックくらいしかない。ほとんど変わらない格好のまま、僕とミナは宿屋を後にした。

男の子に教えられた道を、手を繋いで歩いていく。

「なんだかデートみたいだね」

「でえとって？」

「恋人が2人で仲良く出掛ける事だよ」

「おう、デートデート♪」

ご機嫌になるミナに目を細めつつ、僕はまた1つ解らない事が増えたなあ、と思った。

こうして会話が出来てるのは、多分なんらかの魔法かそれに近い力が働いているせいだろう。

文字が違うんだから使っている言語形態そのものが違うんだと思う。不思議なのは会話していて、僕が日本語として話している言葉は通じるのに、僕が外国語やカタカナ語と認識して話している言葉が通じない事だ。

正確には通じる言葉と通じない言葉があるって事かな。

なんとなくこうじゃないかなって、理由として考えられるのは、日本語で説明出来るか否かで分けられる所。

例えば、スプーンやフォーク。

あれは『スプーン』 や『フォーク』 ってしか認識出来ないから、そのまま伝わってるんだと思う。

デートみたいに、逢い引きって言い換える事が出来る言葉は相手に伝わってない気がする。

でも『ボウル』は器って言い換えられるけどエアリイさんに通じたし、僕の考えた法則が合ってる証拠も無いからなあ。

まあいいか、伝わらなかったらその都度説明すれば。

そうこうしている内に冒険者ギルドに着いた。

入り口前方には受付、左には道具屋と歓談の出来る広場、右には依頼掲示板と食事の出来る軽喫茶がある。

独特の雰囲気吞まれていると、喫茶店の方から僕を呼ぶ声が聞こえた。

「おい、ユーリ君。こっちこっち」

「あれ、護衛のお姉さん？」

「さっき振り」

ヒラヒラと手を振っているのは、さっきまで商隊で一緒だった護衛のお姉さん。

褐色の肌に輝く銀髪のショートボブ、Dカップの胸を黒いジャケッ

トで覆っているのにヘソ出しルック、同じく黒のホットパンツに黒のサイハイソックスが眩しい絶対領域を演出、ぷりんとしたお尻やむっちりした太腿が妖艶な色香を醸し出しているのにやや幼い顔付きがアンバランスで魅力的なお姉さんだ。
なんとなく猫っぽい緑色の目が人懐っこい印象を与える。

「これからギルド登録？」

「ええ、そのつもりです」

「そっかそっか、登録終わったら一緒に何かお仕事するかい？」

「簡単な仕事で雰囲気掴むつもりだったので退屈かもしれないよ」

「大丈夫大丈夫、あたし暇だから全然気にしないよ」

「あはは、了解です」

くるっと踵を返して喫茶店へ戻っていくお姉さん。
いいお尻だ。

ちよっと見惚れていると、横でミナがほっぺを膨らませていた。

「ぷー」

「ミナ？」

「ぷくー」

「つんつん」

「ぷちう」

「あ、空気抜けた」

「もう、遊ばないでよっ」

「あはは、ゴメンゴメン」

膨れたミナのほっぺをつついて空気を抜いてやる。

しっかり付き合ってくれる辺り、ミナは良い子だね。

っと、いけないいけない、早い所登録しよっと。

受付は……わお、受付のお姉さん僕が入ってきた時のスマイル保ってるよ。

すごい精神力だなあ、と妙な所に感心しながら僕は受付のお姉さんに話し掛けた。

「いらっしやいませ、冒険者ギルドへようこそ」

「あの、冒険者として登録したいんですけど」

「はい、新規登録ですね。ではこちらの書類に必要な事項をお書き下さい」

「あ、僕読み書きが出来ないので代筆をお願いしてもいいですか？」

「はい、構いませんよ。ではお名前からお願ひします」

「名前はユーリです」

名字の方は黙っておいた。

シーナが名字持ちは貴族だって言ってたから余計なトラブルに巻き込まれるかもしれないしね。

その後も色々な事を聞かれた。

年齢、住居若しくは拠点、犯罪歴等々。

犯罪歴は有っても言う人いないんじゃないかなあ、って思ったけどちゃんと嘘を見抜くマジックアイテムがあるらしい。

確かに犯罪者を抱え込みたくはないしね。

「職業はどうされますか？」

「職業？」

「はい、これは他の冒険者とパーティーを組む際の参考になります。前衛担当であれば戦士や剣士、後衛担当であれば狩人や魔術師といった具合です」

あ、今受付のお姉さんパーティーって言ったね。

やっぱり通じる言葉には何か法則があるのかな？

取り敢えず自分の職業を考えてみる。

まあ、あんまり目立ってもヤダしシヨボいのにしておこう。

「じゃあ魔法使いでお願いします」

「魔法使い……で宜しいのですか？」

「あれ、なんかまづかったですか？」

「いえ……普通ですと魔術師や魔導師と仰る方が多いので」

「まだそう名乗れる程の実績も無いので、魔法使いにしておけば仮にパーティー組んでも余計な負担掛けないかなあと思ひまして」

「お若いのに立派ですね。解りました、魔法使いで登録致します。

これで貴方もギルドの一員です、こちらのギルドカードが貴方の身分証代わりになりますのでくれぐれも紛失なさらないようお願い致します。紛失致しますと如何なる理由であれ再発行に銀貨1枚が必要になります」

その他の注意事項や基本的な流れを右から左へ受け流す。

……うん、こういう話には僕の集中力はまるで発揮されないんだ。いざとなったらミナに聴こう。

ギルドカードを懐のポケットにしまい、依頼掲示板の方へ向かう。すると1台のテーブルに目が釘付けになった。

回転寿司でも見た事無い量の皿が積み上がっていて、その中心では銀色の髪の毛が揺れ動いている。

——予想は付くけど、なんだあれは。

若干呆れつつ眺めていると、最後の料理を食べ終わったらしくお腹をぽんぽんと撫でながら暴食天使が姿を見せた。
いったいあの体のどこに入っただろう。

「おっ、ユーリ君登録終わった?」

「終わりましたよ。っていうか、すごい量ですねコレ」

「まだまだおやつ程度だよん」

「これでおやつ程度!」?

ええい、お姉さんの胃袋は宇宙か!

昨日も僕の作った豚汁7回もおかわりしてたし。

取り敢えず依頼掲示板を眺めてみる。

薬草の採取、鉱石の採取、角ウサギの駆除、灰色狼の撃退、ゴブリンの掃討……って、この世界にゴブリンいるの!?

てっきり魔物の類はいないと思ってたけど、そんな事は無かった。
と、左腕の袖をミナに引っ張られた。

「ねえ、ユーリ。これなんかどう?」

ミナが差し出した依頼は屋根の修理。
報酬は銅貨3枚。

確かにこれなら僕にも出来るし、最初の依頼としてはぴったりかも。

「うん、いいかもね。さっすがあ、ミナは話が解るっ」
「にへへ、もっと褒めていいよ？」

頭をくしくしと撫でると嬉しそうに目を細めるミナ。
その横でお姉さんはうんうんと感心した様子で頷いていた。

「色々な依頼がある中でその依頼にするなんて、ユーリ君は人間が出来てるねえ」

「え、なんですか？」

「こういった雑務系の依頼は初心者用に街の人がわざわざギルドに依頼してくれてるのさ。簡単な仕事だけど、働いてお金をもらって喜びを知ってもらう為にね。だけど最近の若い子達はすぐゴブリン退治なんだ、って飛び出したがるからねえ。あたしだって初心忘れるべからず！って時々受けてるのに、全く困った話だよっ」

お姉さんの言葉に思わず顔を背ける人がチラホラ。

まあ、気持ちは解るけどね。

男の子ならいつだって冒険に出掛けたくなるものだ、ってCMもやってたし。

「おっと、ちょっと愚痴っぽくなっちゃったね。しっばいしっばい」

自分でおでこをコツンと叩くお姉さん。

妙に子供っぽい仕草がまたかわいい。

ちょっぴりエアリィさんに似てるかもしれない。

受付に依頼の紙を持って行って、依頼受注完了。

早速初仕事へレッツごう！

ギルドで一悶着ありました。

クワンカの街は5つの区画に分かれている。

南側に宿屋や交易店、ギルドなんかがある旅店地区。

閑静な住宅街と憩いの広場がある北の居住地区。

衛兵詰め所や図書館、歴史的建造物でもある英雄の銅像が立つ東の公社地区。

西には活気溢れる飲食店や酒場、本屋に装具屋、鍛冶屋を有する商人地区。

そして教会と大きな広場がある中央地区だ。

今僕は北にある居住地区の一軒のお宅にお邪魔してる。

善は急げという事で早速ギルドの依頼をこなしに来たのだ！

とちよつとテンション上げてお送りしているのには訳がある。

屋根の修理という事は屋根に登る必要がある訳で。

——こわっ、この中途半端な高さこわっ！

特別高所恐怖症って訳じゃないけど、この5m付近の高さって一番怖い。

多分高度5000mとかなら平気だけど、これくらいの高さだと自分が落ちたらどうなるかを鮮明に想像出来るから怖いんだと思うけど。

ちなみに屋根の修理っていつでも専門的な事はやらずに、上から木の板を張り付けて雨漏りしないようにするだけ。

元々大工さんに修理を頼んであって、大工さんが来る日までの間の臨時依頼だったみたい。

やる意味無い所か最悪屋根の状態が酷くなるんじゃないかな〜って

思うけど、そこも含めて初心者向けの依頼って事らしい。

本当に善意で依頼出してくれてるんだなあっていうのが解る。

取り敢えず傷んでる所を外して新しい木の板をはめる。

釘を使わなくていいように、パズルの積み木みたいな形に切り出した板を上からはめ込むように当てて、木槌を無理な力を込めずに振り下ろす。

こんこんこん、と小さく何度も振り下ろすのがコツだ。

こうして上手い事はまったら周りに溶かした蠟を流して完了。

冷えた蠟が隙間を埋めて水漏れを防いでくれる。

それに大工さんが修理する時も外しやすくして対処に困らないハズだ。ま、応急処置としては上出来かな？

梯子をおっかなびっくり降りると、お姉さんが出迎えてくれた。

「お疲れ様。はい、ユーリ君もお茶をどうぞ」

「ありがとう、お姉さん」

「んー、ユーリ君はあたしの事名前と呼んでくれないねえ。お姉さん寂しいっ」

「いやいや、まだ名前聴かせてもらってないですから」

「ありゃ、そうだったけ？」

お茶をすすりながら首を傾げるお姉さんを見る。

お姉さんオトボケキャラだなあ。

まあ、そんな所もかわいいんだけどね。

「あたしはティスカ・ウアー・ロ。本命はティス姉、対抗でティスちん、大穴はていていお姉ちゃんはどう？」

「どう？と言われましても」

「やん、ユーリ君敬語禁止っ」

「えっと……これでいい？ ティスカさん」

「そんな他人行儀じゃなく、もっと愛情と情欲を込めてお姉ちゃん
って呼んで」

「情欲って……じゃ、じゃあ、ティス姉」

「はうん、もっと呼んで！」

くねくねと体を悩ましげによじって悶えるティス姉。

なんだろう、色んな意味で危険な人だ。

テンション高いなあ。

ちよっぴり引いてたらミナが様子を見に出て来た。

ミナには僕の作業中に依頼人のお婆さんの話し相手になってもらっ
ていたんだ。

「ユーリ、もう出来たの？」

「うん、あれでしばらくは大丈夫だと思うよ」

「さすがユーリ、えらいえらい♪」

ミナの小さな手で頭をくしゃくしゃ撫でられる。

いっつも撫でる側だからかすごく新鮮だ。

なんだか癖になりそう。

「おやおや、もう終わったのかい。ご苦労様」

「あ、お婆さん。応急処置って事だったので周りの板はそのままに
してありますから、大工さんの仕事に影響は出ないと思いますよ」

「若いのにしっかりしてるねえ。ほれ、ギルドカードを出しなさい」

ギルドカードを差し出すと、お婆さんの手が白く光り出した。すぐに光は収まり、ギルドカードを受け取ると情報が頭の中に浮かび上がる。

『依頼内容、屋根の修理。進行状況、完遂』

これを受付に持って行ったら晴れて依頼完了って訳だ。つまり初仕事は無事成功。達成感でいっぱいになった僕は足取りも軽やかに冒険者ギルドへと戻った。

「はい、依頼完了を確認しました。お疲れ様でした、こちらが報酬の銅貨3枚です」

受付のお姉さんから銅貨を受け取ると、感動が胸に込み上げてきた。初報酬を手に入れた！

頭の中でファンファーレが鳴り響く。

後ろでミナとティス姉が拍手してくれた。

あ、そうだ。ついでに魔法付呪って仕事になるか聴いてみよつと。

「あの、お姉さん。ちょっと聴きたいんですけど」

「はい、なんででしょう？」

「魔法付呪って仕事になりますか？」

それまでザワザワと賑わっていたギルド内が一瞬で静まり返る。

え、僕今ザ・ワールド使った？

受付のお姉さんは「少々お待ち下さい」って言って、固まった笑みを浮かべたまま2階へとダッシュして行った。

もしやと思うけど僕盛大にフラグ立てた？

なんか小さな声で「あんな子供がか？」とか「今の内に連れ出す？」とか不穏な相談をしているのが聞こえる。

そんな空気を感じ取ってか、ミナが少し怯えるように抱き付いてきた。

目を合わせて、心配無いよって微笑む。

——これはまずったかなあ。なんかハイエナの群れに投げ込まれた羊の気分。

聴き方が明らかに付呪出来る人の聴き方だったしなあ。

来る途中でさり気なくティス姉に付呪の価値や常識を聞き出せば良かった。

と、2階から受付のお姉さんが急ぎ足で降りてきた。

「お待たせしました、こちらについて来て下さい」

言葉少な目に先導するお姉さんの後ろを慌てて追いかける。

ミナは僕の手をぎゅって握って離さないしティス姉はなにやら思案顔。

案内された部屋にはソファーと執務机が置いてあって、難しい顔をした恰幅の良い男の人が待っていた。

多分、この人が責任者かな？

「どうぞ、掛けて下さい」

「あ、はい、失礼します」

促されてソファーに腰を下ろす。

僕の左にミナが抱き付くように座り、右側にティス姉が足を組んで座る。

「まずは自己紹介させてもらいましょう、私はこの街の冒険者ギルドの責任者、トレスキンと申します」

「僕はユーリと言います。こっちはミナ、僕の……まあ、婚約者だと思って下さい」

「あたしはただの付き添いだから気にしないでいーよ」

「相変わらずだな、ティスカ」

色々説明が面倒だしミナを僕の婚約者という事にした。

それでいいかな？って目を向けると、ミナは僕に任せてくれるみたいで小さく頷いてくれた。

ティス姉はどうやらトレスキンさんと知り合いみたいだね。

こほん、と咳をしてトレスキンさんが僕に向き直る。

「それではユーリさん、聞いた話では貴方が魔法付呪が仕事になるか、と尋ねたそうですが？」

「はい、尋ねました」

「それは何故ですか？」

「何故、とはどういう意味でしょう？」

「魔法付呪が出来る人は何もせずとも、その特異性故に大金を手にする事が出来る。何故なら魔法付呪された装具は非常に貴重な物だからです。故に魔法付呪された装具を求める者は多い。1つの装具の為に争いが起こる程です。それをわざわざギルド内で不特定多数の者に聞かせた、その真意を聞きたい」

わーお、実はトレスキンさんプチ切れしてない！？

プレッシャーが半端ない。

僕の予想以上に魔法付呪はレアスキルだったみたいだ。ともあれ、誤解を招いたようだし素直に謝っておこう。

「申し訳ありません、魔法付呪にそれ程の価値があったとは夢にも思わなかったのです」

「ほほう、あの言葉が何を意味するのか知らなかったと？」

あるえー、逆効果！？

てかトレスキンさん僕の事全く信用してないし！

緊張と圧力で焦っていると、突然ミナが立ち上がってトレスキンさんを正面から見据えた。

「その事については私が説明します」

「君がかね？」

「はい、私の知るすべてをお話します」

何を、と思ったら、ミナは僕に振り向いて微笑んでみせた。
小さく口が動く。

『だいじょぶ』

やっと僕はミナが何をするつもりなのか理解した。

ミナは、僕の代わりに矢面に立ってトレスキンさんから僕を守るつもりなんだ。

情けない。

自分自身の情けなさに反吐が出そうだ。

こんなにちっちゃい体で、僕を一生懸命守ろうとするミナに対して
申し訳無さや恥ずかしさが込み上げてくる。

握られた右手は、微かに震えている。

僕はミナに、ありがとうって伝えたくて、左手できゅっと握り締め
た。

「ユーリは一週間前にこの国に来ました。前はユーリを拾って育て
てくれた人と、たった2人で暮らしていたそうです。だからユーリ
はこの国の常識や魔法や生活のちしきがありません。さっき受付で
お姉さんに言った事も、本当に知らなかったから出た言葉です。ユ
ーリは人をだましたり傷付けたりしない人です！」

「それはそれは。俄かにはとても信じられない話だがね」

「首都にある魔術師ギルドに、ナカシュという人がいます。その人に確認して下さい。ユーリのすじょうを知っている1人です」

ナカシュの名前が出た途端、トレスキンさんの眉間にシワが寄った。確認の為に姉さんに向かってせよとしたのをミナが呼び止める。

「ユーリの事をたずねる時に、魔法付呪の事は言わないで下さい。ユーリを利用しようとする人がいるかもしれません」

その言葉で、ナカシュの上司の人を思い出した。

確かに僕が魔法付呪出来ると知ったら嬉々として乗り込んで来そう
だ。

でも僕は、そんな事は気にする事さえ出来なかった。

凜とした態度で僕を弁護してくれたミナに、心底見惚れていたんだ。
真剣な横顔に、僕の為に言葉を紡ぐ姿に、冷静で回転の早い頭脳に、
震えながらも退かない強い意志を感じさせる瞳に。

5分か10分か、それとも一瞬にも満たない時間か。

ミナに見惚れていた僕は、お姉さんが部屋に戻ってきた音で意識を
取り戻した。

「確認しました。確かに、ミナさんの言う通りユーリさんは特殊な
事情をお持ちのようです」

「そうか。……ミナさん、ユーリさん」

その声にびくつと震える僕達に、トレスキンさんは頭を下げた。

「疑ってしまい申し訳ありませんでした。確認の取れた今、正式に謝罪させて頂きたい」

「あ、頭を上げて下さい。僕もちよつと不注意でしたし」

「トレスキンさん、それならお願いがあります」

僕の言葉を遮って、ミナが口を開いた。

「これから起こる、他の人達がユーリにする行動への対策と一緒に考えてもらえますか？」

「それでしたら、是非お手伝いさせて頂きたいと思います」

振り返ったミナは僕の唇に指を当てる。

任せて、って目が語ってた。

その仕草に不思議と胸が高鳴る。

「ではユーリさん、貴方が付呪出来るのはどのような魔法ですか？」

「はっ、はいいい！？あ、僕が知っている魔法はファイヤーとライブだけです」

思わず声が裏返っちゃった。

その反応にミナがクスクスと笑いを零す。

「知っている、というのは？」

「そのままの意味で……僕が聞いた事のある魔法はその2つだけなんです」

「ねえ、ユーリ君。今朝使ってたのは魔法じゃないの？」

突然、それまで黙っていたティス姉が口を開いた。

今朝使ってたって……あ、もしかして狼相手に実験してたの見られてた？

「あれは、なんて言うか……僕が勝手に創作したやつだから」

「は、創作!？」

「ユーリ、朝何かやってたの？」

「う、うん、昨日狼が出るかもって聞いたから実験してたんだ。髪の毛長くなってきてたから、ちょっと前髪切ったやつにファイヤーと創作の追尾魔法を付呪して、狼を驚かせようとしたんだ」

「あ、それで前髪短くなってたんだ」

「い、いやいやっ!?! 2つも付呪とか普通じゃないから!?!」

ものすごいティス姉が驚いている。

なんだろう、またフラグ立てた気がする。

せっかくだし、僕はここで付呪について整理してもらった。

基本的に付呪が出来る人は珍しく、ほとんどが王宮で働いている。その理由は付呪したマジックアイテムを悪用されない為だったり、ライブの杖みたいな有用な品を安定して供給する為だったり、付呪出来る人を保護する為だったり。

付呪には専用の道具が必要で、魔力をかなり消耗するから付呪出来るのは1日に1個が限度だったりする。

更に付呪は1つの装具に1つの魔法しか組み込めない。

一番安価な発光の付呪でも、装具に付呪するだけで銀貨10枚、付呪された装具の相場は銀貨12枚だそう。

ライブの杖なんかは治療が目的だから銀貨2枚くらいで国が販売してるらしい。

こんな所かな？

魔法の創作うんぬんに関しては……発想と想像力を元にやったら偶然出来たって事にして誤魔化しておいた。

口の堅いギルドの人とはいえ、まだそこまで信用出来ないからね。取り敢えず僕の付呪に関しては、ライブだけ付呪出来るって事にし
て広める事で決まった。

下手に隠すよりは大っぴらにそこまですごくないって言った方が追求されないらしい。

それに攻撃系の付呪じゃなく治癒系の付呪なら、よからぬ人達に目を付けられにくいだろうって思惑もあるみたいだ。

ついでに僕の付呪行為に関してはギルド預かりにした。

僕への依頼はギルドを通して行う事で、余計なリスクを減らす為だ。そこまで話して、僕はやっと自分やミナがどれほどの危険に晒されているか気付いた。

一時話し合いを中断して、部屋を借りて誰も部屋に近付けないようにしてもらい、ミナを守る為の付呪を組み込む事にした。

「ミナ、何に付呪しようか？」

「ユーリがくれた、この指輪はどう？」

「うん、いいよ。ちょっと借りるね」

ミナから指輪を受け取り、思い付く限りの加護を与えていく。
耐熱、耐寒、耐衝撃、耐電、耐風、耐震、耐刃、耐弾、耐爆、耐毒、

耐煙、耐圧、耐水、耐音、耐霊、耐光、耐魔法、耐武器、耐臭……
そろそろ耐がゲシュタルト崩壊してきた。

他にもミナに対して悪意のあるもの、敵意のあるもの、害意のあるもの、健康を害するもの、怪我を負わせるもの、不快にさせるものなんかを弾くようにする。

真空、深海、高熱、低温等の人体に悪影響を及ぼす環境に対してもブロックするように調整。

効果範囲はミナの両手を広げたくらい。

言うなれば無敵バリアーだ。

やり過ぎ？ミナの為なら何だってするさ！

完成した指輪をミナに返す。

「これで大丈夫だよ」

「ありがと、ユーリ」

「お風呂の時も外さなくていいように改良したんだ。試しに消えろって念じてごらん」

「んっ……お、消えたよユーリ！」

「出す時は出ろって念じれば出るよ」

「お、便利だあ」

左手をにぎにぎして指輪を出したり消したりするミナ。

ようやく一安心して肺の空気を吐き出す。

これで誰もミナに手出しは出来ない。

誰にもミナを傷付けさせるもんか。

不意に頭を抱きかえられた。

顔を上げると、困ったような寂しいような、そんな笑みを浮かべたミナと目が合った。

「ユーリ、もうだいじょぶだよ。こわくない、こわくない♪いいこいいこ♪」

「ミナ……?」

「だいじょぶだよ。私はどこにも行かない、ずっとユーリの側にいるから。ユーリが私を守ってくれるみたいに、私もユーリを守るから。だから、怖がらなくてもいいんだよ」

その言葉で、張り詰めていた糸が切れたような、そんな気持ちがした。た。

ゆっくり、僕が抱え込んでたもやもやが溶けていく。

——そっか、僕は怖がってたのか。

家族を失って、異世界に放り出されて。

ミナやシーナ、エアリィさんに出会って。

また人の優しさに触れて、離したくないって思っ

自分の不注意でミナを危険に晒して、ミナを失うかもしれないって気付いて。

体から力がすんと抜ける。

「よしよし、いいこいいこ。落ち着くまで、こうしてるから」

小さな手が僕の頭を撫でる。

不思議と安らぎをくれる手に甘えて、しばらく僕はミナに抱き締め

てもらった。

ギルドで一悶着ありました。（後書き）

色々と難産でした。

最後の方は文体が混乱しています。

今回は後で黒歴史認定なお話になりそうです。

初めて、恋をしました。

ギルドでの付呪についての話し合いを終えて、僕とミナは宿屋へ帰ってきた。

色々とハートブレイクしてた情けない僕の代わりに、ミナがその辺の話を詰めてくれた。

僕的能力を見極める為に5つ程ライブ——正確には自動回復を付呪した指輪を作り、その引き取りとこれからの仕事の手付け金として、金貨3枚を収入として得た。

庶民の1日の食費が銅貨15〜20枚だから……と、取り敢えずいっぱい食べられる額だ。

それと、あの後から部屋に帰るまで、ずっとミナに手を握ってもらっていたのは内緒だ。

さっきまでの幼児退行してた僕は黒歴史行きです。っていうか幼児退行多いな！

でもまあ、ミナに撫でてもらえるならたまには幼児退行もいいかもしれない。

ティス姉は気を使ってくれたのか、飲食街へと消えて行った。

去り際に「たらふく食うぞ」って言ってたけど……気を使ってくれたんだよね？

自信無くなってきた。

そして今、僕には新たな問題が。

問題っていうか、自分でもよく解らないんだけど。

——ミナの顔が見れないっ。

部屋に戻って一休みしたら、何故かミナを正面から見れなくなって

た。

なんだかよく解らないけど、ミナと目が合うと息が苦しくなったり胸が苦しくなったりする。

呼び掛けようとしても、

「み、ミナ……？」

「なあに、ユーリ？」

「あ、えっと……なんでもない」

胸が詰まって何も言えなくなる。
なんでだろ？

ミナの指輪に付呪した効果が僕にまで影響してるのかな？
理由は解らないけど、このままじゃまともに会話も出来ない。
どうしたもんかなって考えてたら、ミナの方から声を掛けてくれた。

「ねえユーリ、お腹空かない？」

「う、うん、そうだね。どっ、どこか食べに行こうかっ」

ミナの声を聴くだけで心がふわふわ飛んでいきそうになる。
普段ならすらすら言える言葉もつかえつつかえになって、最後の
方は声が裏返ってた。

困惑する僕にミナが抱き付いてきた。

左腕を組まれ、くりくりとした愛らしい目が僕を見上げる。

「じゃあ行こ、デートデート♪」

デート。

さっきは普通に口に出来た言葉が、やけに特別なものに感じる。ほっぺ所か耳まで熱くなつて、僕は壊れた人形みたいに首をかくかくと振る事しか出来なかった。

ミナに腕を引かれ、部屋を出て飲食街へ向かう通りへ。

なんなんだ、このワクワク感は。

組んだ腕に伝わる温もりに3割、指を絡めるように繋いだ柔らかな手の感触に5割、立ち上る甘い香りに1割の意識を持ってかれる。

「おいし〜ね、これ♪」

「え、あ、うん」

知らない間に屋台で買い物していたみたいで、僕の手には鶏肉とレタスらしき野菜を挟んだパンのような料理が握られていた。

かぶりつくと、白いピリ辛のソースが溢れ出す。

でも味は全然解らなかった。

もぐもぐと妖しく動くミナの唇は美味しいのかもしれない。

そんな事を考えてたら、ミナが僕に顔を寄せてきた。

長い睫毛も、澄んだ瞳も、美術品みたいにすごく綺麗だ。ぺろり。

唇の端に、湿ったものが触れる。

「にへへ、おいし♪」

いたずらっ子みたいに笑うミナ。
何をされたのか理解した途端、急激に顔の温度が上がっていくのが解った。

——いつ、今、僕の唇に、ぺ、ぺろって!?

あうあうと口をぱくぱくさせる僕の手を握って、ミナは歩き出した。慌てて横を歩きながら、味の解らないパンを口に押し込む。
ふらふらと幾つかの露天を冷やかして、僕とミナはアクセサリーショップに入った。

ミナはキラキラした目で、猫の置物や食器を見つめる。

「わぁ、かわいいねこれ」

「そ、そうだね」

正直見てなかった。

猫グッズにはしゃぐミナしか、僕の目に入らなかったからだ。

ぐるっと店内を見て回って、そろそろ出ようになって思った時に、それに出会った。

棚の端に置かれた小さな髪飾り。

かわいらしい花びらの部分に濃緑の宝石が飾られてあって、不思議と目が離せなくなった。

そんな僕の元に店員さんがやってくる。

「お気に召しました?」

「ええ、ミナに似合いそうだって」

「元の花と宝石にはそれぞれ特別な意味が込められているので、贈り物として買われるお客様もいらっしゃいます」

「特別な意味？」

「ええ、花言葉と宝石言葉とでも申しましょうか。それぞれ『純愛』と『献身』で、併せれば『私の気持ちを貴方に捧げる』と言った意味になります」

私の気持ちを貴方に捧げる……な、なんだか恥ずかしいな。

ミナにこれを贈ったら変な意味に取られないだろうか。

そんな葛藤を感じ取ったのか、店員さんは薄く笑って言った。

「日常の感謝として贈っても大丈夫ですよ。花言葉や宝石言葉は数多くありますし、普段から気にしている方は少ないですから」

「そ、そうですね。……じゃ、じゃあコレを下さい」

「お買い上げありがとうございます」

銀貨20枚を払って懷にしまう。

あ、でもコレいつ渡そう。

また1つ悩みが増えた瞬間だった。

その後もミナと2人で北の広場にある噴水で遊んだり、中央広場の教会を見学したり、色々と歩き回った。

笑ったり驚いたり、素敵な表情を見せてくれるミナ。

僕はチラチラとミナを見て、ミナが「なあに？」ってこっちを見たら慌てて視線を逸らして、しばらくしたらまたチラチラとミナを見ていた。

変に思われてなければいいなあ、って思ったけど、そんな僕を見てミナはクスクス笑っていた。

――ああ、やっぱりミナはかわいいなあ。

日も傾いてきたから今日は散策終了。

宿屋に戻ってソファで寛いでいると、隣に座るミナが突然僕のほっぺをつつき始めた。

むにむにむに。

やわっこい人差し指の感触にドキドキしながら、目だけミナに向ける。

「じーっ」

なにやらすごい見られてた。

照れくさくなって目を逸らしたら、回り込んで僕の目を見つめる。

さっと目を逸らす。

とてとて回り込むミナ。

目を逸らす。

とてとて。

さっ。

とてとて。

ささっ。

がしっ。
捕まりました。

——な、なんだろう、怒らせるような事しちゃったかな？

恐る恐るミナの目を覗き込む。

そこには怒りの色は無く、ただ嬉しそうに僕を映す瞳があった。
綺麗な瞳に心を奪われて固まる僕。

さっきまで街の賑わいや鳥のさえずりが聞こえていたのに、今は痛いくらいに何も聞こえない。

時間が僕を置き去りにしたんじゃないかって思うくらい、僕の世界は止まってしまった。

『——ッ』

音がした。

本当に小さな、音。

『——ドッ』

知っている。

この音を、僕は知っている。
心臓の音だ。

『ッ、ドッ、ドッ』

胸元で、掌で、足先で、腰元で、耳の裏で、喉の奥で、或いは――
全身で。

僕の世界で1つだけ動きを止めずに、その存在を主張している。

『ドクッ、ドクッ、ドクッ』

音色は、まるで僕を急かすように。
うるさいくらいに鳴り響く鼓動が僕の体を支配していた。

『ドクンッ！ドクンッ！ドクンッ！』

目の前の女の子が、愛しい。
それしか考えられなかった僕は、そっと頬に添えられた手を外して
立ち上がった。

「かつ、顔洗ってくるっ！」

そのまま一目散に部屋を飛び出した。
背後からはミナの「もうっ」って呆れを含んだ、どこか嬉しそうな
声が聞こえてくる。

帳簿を付けていた女将さん呼び止め、冷水を張った桶を用意してもらった。

宿屋の裏にあるこじんまりとした庭で頭から冷水を被る。

何度か冷水に頭を浴びせて、ようやく僕の思考も落ち着きを取り戻した。

まだ頬や耳は熱いけど、自分の気持ちに向き合うだけの余裕は生まれたみたい。

――僕は、僕は。

「僕は……ミナに恋をしたんだ」

言葉にすると、スッと今までの感情を受け入れられた。

あのドキドキもふわふわも、全部ミナが好きだから。

顔を真っ直ぐ見られなかったのも、咲き誇る笑顔にずっと見惚れていたのも、触れ合った手を離したくないって思ったのも、全部。

「……よしっ」

懐にしまった髪飾りを撫でる。

まだドキドキは残ってるけど、このドキドキも全部ミナにぶつけてやるんだ！

結果なんて、今はどうでもいい。

僕がミナを好きだって気持ちを、全部伝えたい。

宿屋に戻ると、びしょ濡れの僕を見て女将さんはニヤツと口の端を

吊り上げた。

女将さんは何も言わずに、背中をバシッと叩いた。

お礼を言って階段を駆け上がる。

ほんのちよつとの距離なのに、ミナの待つ部屋がすごく遠くに感じる。

廊下を駆け抜け、勢いよく扉を開け放った。

「ユーリ、わ、どうしたの!？」

びしょ濡れの僕に目を丸くする。

タオルを取りに洗面所へ向かおうとするのを制して、僕はお姫様に片膝を着く。

僕の行動に混乱するミナに、僕は自分の気持ちをぶつけた。

「ミナ、僕の話聞いて欲しい」

「な、何、ユーリ？」

「僕は……僕は、ミナが好きだ!」

突然の告白に再度目を丸くするミナ。

構わず、僕は言葉を続けた。

「今日、やっと解ったんだ。どこへ行っても、何をしてても、僕はずっとミナを追っていた。ミナの笑顔が見る為ならなんだってする、ミナが喜んでくれるならどんな事でもしてあげたい。もし僕がお爺さんになっても、ミナが隣で笑っていてくれれば、後は何もいらな

い。僕はミナの事が好きだ、大好きだ！ミナ、僕と――僕と結婚を前提に付き合って下さい！」

懷から取り出した髪飾りを、ミナへ差し出した。

言い切るのと同時に頭を下げたから、ミナの表情は解らない。

1分か2分か、30分か10秒か。

時間の感覚が無くなっている僕は、永遠に近い時間が過ぎ去ったように思えた。

――もしかしたら、ミナは髪飾りを受け取ってくれないかもしれない。いい。

そんな暗い、泣き叫びたくなるような不安が胸を横切ろうとした瞬間、僕の手は温かいものに包まれた。

見なくても解る、優しい小さな手。

弾かれたように顔を上げると、満面の笑みを浮かべたミナが、そこに立っていた。

頬には一筋の光が伝っている。

髪飾りを受け取ったミナは、そのまま僕に抱き付いて言った。

「ユーリのバカ、バカバカばあか」

「ゴメン」

「そこで謝るユーリはもつとおバカ。私は逢った時から、ユーリの事を好きって解ってたのに」

「ゴメン」

「ゆるしてあげないもん、ユーリと結婚して、たくさん子供産んで、

ユーリがおじいちゃんになって死ぬ時までゆるしてあげないもん」
「うん」

「でもユーリが死んだら悲しいから、やっぱりゆるしてあげない」

「じゃあ、生まれ変わったらまた、ミナに逢いに行くよ」

「逢いに来るだけ？」

「まさか。もう一度言うんだ、僕と結婚して下さいって」

「ユーリを待ってたら、私おばあちゃんかもしれないよ？」

「構わないよ。ミナがおばあちゃんだったら最期の時まで側にいて看送ってあげる。その後、生まれ変わったミナを探し出して、大きくなるまで待って、もう一度告白する」

「なら、ゆるしてあげる」

少し体を離して、目を閉じて僕を見上げるミナ。

その柔らかな唇に、僕の唇を重ねた。

今日僕に、優しくてかわいくて小さな――世界一のお嫁さんが出来た。

夢見心地だった僕達を現実に戻したのは、背後で起きたドタバタという何かが倒れる音。

びっくりして振り返ると、数人の若い女性や女の子がひしめき合って床に倒れていた。

一番下で潰れていたのはなんと宿屋の娘さん。

なんでもびしょ濡れになった僕を見掛けて女将さんに訳を聴いたら居ても立ってもいられず、仕事を放り出して覗き見していたらしい。

それを見た他の宿泊客や従業員が集まっていつの間にか出歯亀タワ
ーが。

廊下には更に多くの人が困ったように笑いながら立っていた。

……どうやら僕の一世代の告白は宿屋中に響き渡っていたっぽい。
恥ずかしくて固まっていると、娘さんの頭に女将さんがげんこつを
振り下ろした。

うわ、ごいんって音したよ！？女将さんは僕達に頭を下げると、謝
罪も込みで僕とミナの結婚祝いを一足先にやろう、と提案してくれ
た。

その日の夕食はすごく豪華で賑やかなものになった。

こうして、僕の仕事初日は笑顔と祝福に包まれながら過ぎて行きま
したとき。

ミナとイチャらぶっ。(前書き)

注意・今回から若干えっちな描写が増え始めます。苦手な方はご注意ください。

ユニーク5000突破しました。

ありがとうございます。

こんな駄文で良ければどんどん垂れ流しますので、どうぞご贔屓に。

ミナとイチチャらぶっ。

「ユーリ、起きて、朝だよ……？」

耳をくすぐる甘く耽美な声。

すぐ近くから聞こえた言葉の意味を寝起きで鈍っている頭が理解しようとする。

朝ってなんだっけ、って呆けていると僕の唇に何かが触れた。

「ちろちろ……ちゅ、ぺろっ」

柔らかくて温かいものが触れ、僕の唇を濡らしていく。

鼻を上る蠱惑的な匂いに導かれて、反射的に舌を伸ばした。

舌尖が唇を湿らせていたものに触れる。

ぴくんっ、って怯えたように跳ね上がったそれは、すぐに僕の舌へおずおずと絡まってきた。

伸ばした舌を伝って、蜜が僕の口へと流れ込んでくる。

その味で、僕はやっと状況を理解した。

目を開くと、僕のお嫁さんが小さな舌を僕の舌に絡ませながら、だらしないところ顔を披露していた。

「ふぁん、ちゅ、れろれろ……」

「んっ……おはよう、ミナ」

「にへへ、おはよう、ユーリ」

幸せでとろとろになった瞳で僕を見つめるミナ。

そっと抱き締めると、嬉しそうに両足を絡めてきた。

じかに伝わる体温がくすぐったい。

僕もミナも、裸だ。

理由は……その、ごによごによ。

ま、まあ、そういう事だ！

「ねえユーリ、今日はどうしょっか？」

僕の考えが伝わったのか、同じく頬を赤く染めながら口を開くミナ。
優しくその唇を味わいつつ、今日の予定を思い返す。

今日はギルドで付呪の仕事があるくらいで特にイベントは無かった
なあ。

「ちゅ、はむっ、何か適当に仕事探してみようかな」

「じゃあ、んっ、ついて行っても良い？」

「ついて来てくれないと寂しくて泣いちゃうよ？」

柔らかい体をぎゅっと抱き締めてくるっと体勢を入れ替える。

小さなお嫁さんを組み敷いて、2つのぷっくりとしたさくらんぼを
舌で転がしながら、僕はいたずらっぽい目でミナを見上げた。

「でも出掛けるのはミナをもっとかわいがってからでもいいよね？」
「ふぁっ♪うん、私の体、ユーリでいっぱいにしてえ、あふれるくらい、しよお♪」

結局出発したのは2時間後。

ぽっこりとお腹を膨らませて幸せそうに痙攣するミナを撫でながら、溺れてるなあって気付いた僕だった。

「もう、ユーリきちくすぎい」

「えー、だってミナも離してくれなかったじゃん」

「あんなにカッコいいセリフ言ったのに、たった1日でガマン出来なくなって私にいっぱいそそぎ込むんだもん。きちくきちくう♪」

「ううっ、ミナがいじめる」

「いいこいいこ、なでなで♪」

「わあい、ミナ大好き……って、アレ？ いじめたのミナじゃない？」

「バレちゃった？」

「だましたなあ、がおー！」

「わあ、ユーリが怒ったあ♪」

ギルドの喫茶店の一角を占領してイチヤイチヤらぶらぶし始めた僕とミナを、信じられないものを見たような表情を浮かべて凝視するティス姉。

口に運ぼうとしたパスタがずり落ち、テーブルの上でカランと音を立てるフォーク。

僕達の余りの変貌ぶりに、開いた口が塞がらないという言葉を体現している。

でも僕はミナとイチヤイチヤらぶらぶするのに忙しいから構ってあげられないんだ、ゴメンね。

焼き菓子をつつまみ、ミナの口元に持って行く。

「はい、あーん」

「あーん♪」

「口の端に欠片が付いてるよ？ぺろっ」

「んやあっ♪」

「ああ、もうっ、ミナはかわいいなあ」

膝の上に乗せたミナの口の端を舐めると、焼き菓子の甘さとミナの匂いが脳を刺激する。

しばらくミナの唇を堪能していると、受付のお姉さんがやってきた。右手には依頼書、左手には2種類の付呪用の指輪が入った籠を持っている。

「ユーリさん、ミナさん、ティスカさん、おはようございます。ユーリさん、こちらが今回の依頼書です」

「おはようございます。じゃあ早速やっちゃいますか。ティス姉、行ってくるね」

「う、あ、えん」

受け答えが怪しくなってるティス姉はさて置き、お姉さんに先導されて2階の角部屋へと向かう。

勿論ミナと手を繋ぎながらだ。

角部屋に入り質素ながら気品の漂う椅子に腰掛ける。

お姉さんは付呪用の指輪を僕に見せて、問題が無いか確認する。

「ライブを両方に付呪して下さい、但し片方は意図的に効力を下げるようお願い致します」

「了解、すぐやっちゃいますね」

僕は指輪を手に取り2秒くらいで付呪を終え別の指輪に手を伸ばす。1分もしない内に自然回復量増加がエンチャントされた指輪が出来上がった。

イメージとしては5秒で総HPの1%を回復するのと、10秒で総HPの3%を回復する2種類。

だいぶ性能落としたけど、それでもかなり良質なエンチャントに分類されるらしい。

付呪による消耗も微々たるものだし、たった1分で金貨20枚だなんて、随分とぼろ儲けしちゃったなあ。

ほくほく顔で指輪をお姉さんに渡すと、1つ1つ確認して良い出来だと頷いてくれる。

「これで依頼は完了ですね、ありがとうございました。こちらが報酬の金貨20枚です。必要量は揃いましたのでギルド側からの依頼はしばらく無くなりますが、今後は付呪された装具をお持ち頂ければその都度買い取りさせて頂きます」

1階に戻ると依頼受付に長蛇の列が出来ていた。

依頼受付は依頼掲示板の奥にあって、文字通りギルドに依頼を出す受付だ。

依頼人はギルドに依頼の概要と期間、報酬なんかを伝えて依頼掲示板に自分の依頼を張り出してもらう。

普通ならワイバーン退治とか失われた秘宝の搜索とかの高額報酬が期待出来る依頼が出た時に、依頼掲示板に一獲千金を目指すパーティーが刺さってるんだろうけど、一体何で依頼受付に？

ギルド職員のお兄さんが忙しく依頼掲示板に依頼を張り付けていくのに興味を引かれて、掲示板を覗き込んだ。

分類先は採集、収集の板。

昨日は4、5つくらいしか張り出されていなかった掲示板が、今日は端から端までびっしり埋まっている。

その中の1つを手に取り読み上げ……ミナに読んでもらった。文字の勉強もしなくちゃなあ。

「依頼内容、装具への付呪。報酬は銀貨40枚、だって」

「へっ？」

「昨日の騒ぎを見て、みんなユーリ君に依頼を出してるのさ」

いつの間にか後ろにやってきたティス姉がつまようじをシーハーさせながら答えてくれた。

お行儀悪いですよ。

「みんな直接頼もうとしてたけどギルドの方から盛大に釘を刺されてねえ。これなら文句無いだろうって事で、みんな依頼受付に殺到してる訳さ。しっかり付呪の報酬が銀貨40枚ぼっちで受けると思ってるんだろうかね？」

呆れ顔で僕の頭に溢れんばかりのおっぱいを乗せるティース姉。
昨日の僕ならあわあわしてただろう。

でも今はかわいいお嫁さんがいるから僕の心は揺れ動きません！
ぷにぷに。

動きませんよ？

ぽよぽよ。

動かないってば。

ぱふぱふ。

……でへへ。

「めっ」

「いだっ!？」

だらしなくニヤニヤしてたら、ミナにおでこを刺された。
触ってみたら皮膚がミナの爪の形にへこんでる。

ぷっくりほっぺを膨らませて、僕をむっとした目で見上げるミナ。
そのほっぺをつんつんつついてみる。

「ミナ？」

「っーん」

「ミナちゃん？」

「っーん」

「みーちゃん？」

「っ、っーん」

お、みーちゃんって呼び方はちよっぱり気に入ったみたい。
昔妹が見つけて来たぷちツンデレの猫にそんな名前を付けて遊んだ
のを思い出した。
前から抱き締めてほっぺをつんつんしながら耳元で囁く。

「みーちゃん」

「ぷ、ぷいっ」

「こっち向いたらキスしてあげる」

その言葉に顔を真っ赤にして固まるミナ。

こっちを向こうとするけど、一応怒ってるんだよってアピールもし
てる訳だからそっぽを向かないといけない。

うーうーとかわいらしい唸り声をあげるミナをもっといじめたくな
るけど、それよりも早くミナの笑顔が見たい。

すっかりミナの虜だなあ、って他人事みたいに考えながら僕は口を
開いた。

「ゴメンね、ミナ。僕はえっちだから色んな女の子に目移りしちゃ
うけど、僕が一番好きなのはミナだけだから」

「そ、そんな事言ってもダメだもん」

「ミナが好きだよ。大好き。かわいいなって思う子がいても、お嫁
さんでいて欲しいのはミナだけだよ」

「う、浮気するユーリの言葉なんか信じてあげないもん」

あにゃ、なかなか手強い。

でもそっぽ向きながらチラチラ僕を見るのは反則だと思います。
好き好き攻撃でダメだったから今度は泣き落として揺さぶってみよう。

「そっか……嫌われちゃったかあ……」

「え、ゆ、ユーリ？」

突然しょんぼりと落ち込んだ僕に慌て始める。
そっと体を離し、屈んでミナと視線の高さを合わせて力無く微笑んだ。

「ゴメンね、ミナ。本当はずっと側にいたいけど、僕がいたら迷惑だよ。もうミナには近付かないから、安心して。今までありがとう、楽しかったよ。それじゃ、元気でね……」

そのまま肩を落としてとぼとぼ歩き出す。
ギルドの入り口のドアに手を掛けた時、背中にどんと何かがぶつかる。

振り返ったら、目に涙を溜めたミナが僕の腰に抱き付いていた。

「ミナ……？」

「ユーリ、ごめんなさい、ひくっ、もういじわる言わないからあ、ぐすっ、行っちゃだよ……」

「こんな僕でも、ミナの側にいて良いの？」

「いいのっ、ひぐっ、ユーリがいいのっ、ユーリじゃなきゃだあ」

「あぁっ、ミナっ！」
「ユーリい！」

がしつと抱き合い、お互いの温もりを交換して心の隙間を埋め合う。
頬を伝う雫をそっと指で払うと、ミナは飛びっきりの笑顔を見せてくれた。

「あぁ、ミナ……愛してる。世界で一番、ミナが好きだよ」

「私も、ユーリが好き……。ユーリ以外の人がいなくなっても、ユーリさえいてくれれば、いいの」

「ミナ……」

「ユーリ……」

涙を溜めた瞳に誘われて、僕は小さな赤い唇にそっとキスをした。
大好きだよ、って伝わるように優しく何度も、何度も。

「うわぁ……ユーリ君誑しで鬼畜だぁ」

「失敬な!？」

引き気味のテイス姉に思わず突っ込む。
鬼畜はともかく、誑しとはひどい。

「あのセリフは無いわ……ユーリ君って結構軟派？」

「いやいや、あれは昔妹とやったおままごと『嫌いって言ったけど

本当は大好きなの！素直に慣れない私を許して』編のセリフから引用したやつだし」

「なにそのダサいおままごと！？」

「ダサいとは失礼な。僕のかわいくて賢くて天使のような妹が考えたおままごとだよ？正直これをダサいと言うティス姉のセンスの無さに脱帽」

「え、悪いのあたし！？」

「それに僕がミナから離れる訳ないじゃない。ずっと一緒にいるって約束したし、愛するお嫁さんを放ってなんかいられないよ」

「そーそー、私もユーリ大好きだからずっと一緒なの」

「一緒だもんね〜？」

「ね〜♪」

わあい、と笑顔でハイタッチ。

そのまま抱き締めてむぎゅむぎゅ。

ティス姉も解ってないなあ、僕がミナから離れる時はどっちかが死んだ時だけだよ？

すぐ転生して迎えに行くけど。

今のは寸劇はミナも解ってて遊んでくれてたし。

っていうかミナも役者だなあ、とっさに涙浮かべて絶妙のタイミングでやってくれるんだもん。

そんな事を考えていると、ミナはクスクス笑いながら僕の耳に口を寄せた。

「でも、構ってくれないと、本当に泣いちゃうからね？」

その言葉で、僕の心がきゅってなった。

いたずらっぽい目で僕を見上げる姿はいつもと違って、妖艶っていうか大人びた魅力に溢れてた。

誑し込まれているのは、ひょっとしたら僕の方なのかもしれない。ま、ミナと一緒にいられるならいいか。

なんだかんだですっかりミナの虜になっている僕だった。

話が進まないからと強制的に引き離されてしまった僕とミナ。

ああ、手を繋げないのがこんなに苦痛だなんて！

いや、ティス姉挟んだ隣にいるけどさ。

「それで、一体どうしたの？」

「いやさ、ちょっと2人に手伝って欲しい依頼があってね」

「僕達に？」

なんとも齒切れ悪くティス姉が切り出したのは、街の北にある一軒の豪邸にまつわる依頼。

この街に古くからある豪邸なんだけど、ある日幽霊が出るって噂になって誰も寄り付かなくなっちゃったんだ。

取り壊そうにも、必ずアクシデントが発生するみたいで工事が全然進まない。

仕方がないから放置してたんだけど、やっぱり気味が悪いからギルドに街から依頼を出した。

今まで色んな人がどうにかしようって挑んだらしいんだけど全部失敗、巡り巡ってティス姉の所にお鉢が回ってきたみたい。

ただ、1つ問題が。

ティス姉は幽霊の類いが大の苦手で、とても1人では対処出来ないって事で僕達に手伝って欲しいんだって。

「って訳なのさ。お願い、手伝って？」

「僕は大丈夫だけど、ミナはどうする？」

「私も平気だよ、ユーリがいるもん」

「ありがとっ、恩に着るよ」

承諾した途端キラキラした目で僕を見つめるティス姉。

僕の手を握ってぶんぶん振りたくる所を見ると、相当幽霊が苦手なんだなあ。

「怯えるティス姉もかわいいなあ」

「んえ？」

おっと、口から本音がだだ漏れだった。

ティス姉はちょっぴり頬を赤く染めて、そっぽを向きながら呟いた。

「毎回思うけど、ユーリ君って恥ずかしいセリフ堂々と言うよね」

「だってティス姉本当にかわいいから」

「だ、だからそういうの禁止い！」

照れまくるティス姉。

余り耐性が無いのか真っ赤になってる所もかわいいなあ。

ニヤニヤしてたら、照れ隠しなのかティス姉にでこぴんされた。痛かったです。

取り敢えずお昼過ぎにまたギルドで待ち合わせて、それまでは各自用意って事になった。

幽霊退治って何持って行けばいいんだろうか。

掃除機かな？

ま、何よりもまずミナとイチヤイチヤしよつと。

え、色ボケのロリコン？

ハハハ、面と向かって賞賛されると照れますな。

靈魂が住まいし廃屋。

どうも、ついさっき7回戦を終えてお疲れモードなユーリです。
ちよっと早めのお昼ご飯を食べて宿屋で休憩してたけど、お盛んな
年頃の男の子と愛らしいお嫁さんが一緒の部屋にいたらやる事は1
つ。

猿か！ってお叱りはごもつとただけど、はっきり言ってミナ相手に
我慢出来る方がおかしいと思う。

気だるい体を起こして、指先に魔力を集中させる。
生まれたのは縦に薄く広がった円環状の水膜、名付けてアクアリン
グ。

これを通り抜ける事で全身の汚れやバイ菌なんかを濯ぐ事が出来る
んだ。

2秒でおっけーな簡易お風呂みたいなものかな。
通り抜けさっぱりした所でミナを起こす。

「ほら、ミナ起きて。そろそろ準備するよ？起きないといたずらし
ちゃうよ」

「あはっ……♪んあぁ……っ♪」

体を揺する度に小さく跳ねて、軽く絶頂を迎えるミナ。

……ちよっとやり過ぎたかな？

取り敢えずお姫様抱っこして「あんっ♪」アクアリングを潜り抜け
「やらあ、ゆーりのみるく、ながれちゃうう」綺麗になったミナを
ベッドの端に座らせ「ゆーりい、もつとしよお」ダメだ、このまま
じゃまた理性が無くなる。

指先に魔力を集めて沈静化の魔法をミナに掛ける。

悦びに囚われていた顔がちよつとずつ落ち着いていき、くりくりした瞳に理性の光が戻ってきた。

「……ほえ？ ユーリ？」

「おかえり、ミナ。色んな意味で。さ、そろそろ準備するよ」
「え、うん。あれ？」

多少記憶が混乱してるみたい。

無理矢理抑えつけられた感情の推移に思考が追いついていない弊害かな？

沈静化魔法は要改良、っと。

オリジナル魔法はなかなか副作用が強いのが欠点だなぁ、と僕は1人ごちる。

昨夜、ミナの初めてをもらった後に痛みを抑える魔法を試しに使ってみたら、ミナがえろえろっ娘になった。

どこをどう間違ったのか、僕が使った魔法は痛みを抑えるのではなく、痛みを快楽に変換する魔法になった。

快楽を倍増させる効果もあったみたいで、早くも4回戦目でミナが僕の上で腰を振り始める始末。

ま、まあすごい気持ち良かったけどね。

試行錯誤の結果、僕のオリジナル魔法には幾つかの法則が見付かった。

まず、創作時に抱いたイメージに結果が大きく左右される事。

痛みを抑える魔法を使う時も、もっとミナを気持ち良くしてあげたいてって思っただのが効果に反映されたみたい。

今の沈静化の影響も、急に感情が落ち着いたら何が起こったか解らなくなるだろうなぁ、ってチラッと思っただけだ。

今のも充分厄介だけど、それ以上に厄介なのがもう1つの法則だ。

それは、最初に使った魔法の効果がある程度固定されてしまう事。これはまあ、仕方ないっちゃ仕方ない事だけだね。

新しい魔法を創ろうにも、最初に使った魔法を効果の基準にしちゃうから、どうしても微調整くらいしか出来ない。

だから、似たような効果の魔法を創りたい時は微調整に微調整を重ねて、こっそり効果を入れ換えるしかない。

微妙に使い勝手が悪い気もするけど、オリジナル魔法を創れるってだけで満足するべきかなあ。

「ユーリ、準備出来たよ」

思考の世界に意識を飛ばしてる間にミナの準備が終わっていたみたいだ。

ミナが着ている服は午前中に２人で買ってきた、ワインレッドのシヤツと色を合わせたフリルがあしらわれたスカート。

まるでお姫様みたいな気品とかわいさがミナの魅力を存分に引き出している。

ミナはスカートの裾を軽く持ち上げて、くるくると回り始めた。

「にへへ、似合う？」

「うん、すごくかわいい。このまま連れ去ってしまいたいくらいだよ」

「連れ去らなくても、私の体も心も、ユーリ専用だよ♪」

僕のツボを的確に突いてくるミナ。

またベッドに押し倒したくなるのをなんとか我慢して、右手を差し

出す。

「行きましようか、お姫様」

「どこまでもついて行きます、旦那様♪」

僕の手を取ったミナは向日葵みたいな笑顔を見せてくれた。

「お、きたきた。やつほーい」

「お待ちせ、ティス姉」

相変わらず食べ終わった皿でバベルを創造している褐色お姉さんの所へ歩いていく。

ホント、この細い体のどこに入ってるんだろう。

……おっぱいかな？

「おっ、ミナちゃんその服かわいくてオシャレ！」

「にへへ、ユーリが選んでくれたんだよ」

「へえー、ユーリ君もなかなかセンスいいじゃない」

喋りながらすごい勢いでお皿の上から料理を消していくティス姉。あっという間にデザートまで平らげて、お皿を返却口まで持って行く。

「なんであれで太らないんだろう？」

「羨ましいなあ……」

「お待たせっ、それじゃ出発……どしたの、2人共？」

疑問と羨望の視線を受けてちよっぴりたじろぐティス姉。

びくってした時に豊かな胸がぶるんって震えてた。

……うん、ミナの胸もあれくらいになるまで揉んで大きくしよう。
取り敢えず詳しい話を聴きながら、その豪邸を目指す事にした。

「今まで依頼受けた人はなんで失敗したの？いくらなんでも腕利きの冒険者なら原因くらい突き止められそうだけど」

「ん〜と、罠にやられたって報告が1割、不死者にやられたって報告が3割、6割は音信不通で行方不明だね」

「不死者って……ゾンビ？」

「うんにゃ、スケルトンしか確認されてないよ」

その言葉に胸を撫で下ろす。

屍肉の臭い撒き散らされると集中力や思考力が低下してくからね。
視覚的にも辛いし。

内臓がはみ出たまま襲い来るゾンビ……うわっ、肝臓飛び出してるよ！キモッ！

うん、今のは僕が悪かった。

もう少しダジャレも勉強しないとな。

それにしてもスケルトンしかないってのも不思議だね。

普通アンデッドダンジョンならスケルトンだけじゃなくゾンビやゴ

ーストもいるハズなのに。

「ティス姉、幽霊が出るって噂になる前の情報は無いの？」

「ああ、幽霊が出るようになるちよつと前に先代の当主が行方不明になったんだってさ」

「行方不明？」

「詳しい事は解らないけど、ある日突然姿形が忽然と消えちゃったんだって。一部の人は冥界に連れ去られたんじゃないかって」

「冥界？なんでまた」

「晩年、黒魔術に手を出したって話が残ってるよ。それで魂諸共引きずり込まれたって言ってる人もいる」

内心、僕は舌を巻いた。

全体像は見えたけどさあ、余計に気が進まないよこれは。

僕の予想だと、原因は十中八九先代の当主さんだ。

黒魔術を始める理由なんて学者でも無い限り、怨恨による仇討ちか不老不死だ。

多分先代は不老不死の秘術とか思って死霊転生でもするつもりなんだろう。

老衰か服毒自殺した後で霊体を予め用意した器に移して幽霊騒ぎを起こして、家族や使用人、様子を見に来た隣人やギルドから派遣された冒険者の血肉を手に入れてるんだ。

考えるだけでも吐き気がする。

胃から酸っぱい臭いが上がってきた。

と、繋いだ右手を引っ張られる。

「ユーリ、大丈夫？」

「うん、ちょっと気持ち悪くなったただけだから」
「無理しないでね？」

ミナの優しさが胸に染みる。

ただ、このままその邸宅へ向かっていいのだろうか。
少なくともミナは宿屋へ戻した方がいい気がする。

恐らく凄惨な結果が待っている事は間違いないだろうし、向けられる悪意だって半端じゃないハズだ。

そこまで考えて、ミナの指輪に幾つかエンチャントし忘れたのがあった事に気付いた。

慌ててミナに指輪を出してもらい、付呪を重ねていく。

「耐精神干渉、耐幻惑、耐変性……いっその事耐非物理干渉も重ねておこう。それに精神保護、肉体保護、自然治癒、能力維持……あ、そうそう、デイスペル無効も付けておこう。うん、こんなもんだ」

「わ、なんだかいっぱい」

「現時点で考えられる最高の防護付呪してみた」

「ありがと、ユーリ」

お礼にキスしてもらった。

たまりません。

思わず抱き締めて舌入れちゃった。

うん、美味しかった。

「それで、ミナは一旦戻ってもらおうと思うんだ」

僕の予想だけどって前置きして、さっきの想像を話してみる。
2人共すごく沈痛な面持ちだった。

自分の勝手に家族を殺すって事が可能性としてあるだけでも信じられないみたいだ。

ミナは僕を心配しながらも、宿屋で待つ事を了承してくれた。

念の為部屋まで送り届けてから、女将さんに了解を得て宿屋全体に結界を張っておく。

相手が本当に死霊術師ならこれぐらいの対策をして対等なくらいだ。
気を張って邸宅へと足を向ける。

道中、会話は少ない。

流石に幽霊屋敷へ出向くのにピクニック気分ではいられなかった。
北の居住地区の東側へ行くと、目標の邸宅が姿を見せる。

それと同時に空が暗くなり、霧のようなものが立ち込め始めた。
前に進む度に霧は纏わり付いてくる。

全身に鉛が積まれたような重さが襲い、息苦しさを感じる。

「ゆ、ユーリ君、やっぱり帰らない?」

「帰りたいけど、どうやら帰してはくれないみたいだよ」

「え、な、嘘っ!??」

いつの間にか僕の袖を掴んでいたティス姉に背後を示す。

今まで僕達が歩いてきた道は霧に吞まれて掻き消されていた。

幻惑の類だろう、恐らく真っ直ぐ後ろに歩いて行っても、あの邸宅の前に出る。

もう向こうは僕達に気付いたハズだ。

それなら、来たやつを片っ端から吹き飛ばすに限る。

後味は悪いけど、スケルトン相手なら成仏させるくらいの気持ちで

戦える。

だから、僕は敢えて前衛を買って出た。

「ティス姉、戦闘は僕がやるよ。代わりに罠の解除や閉鎖された扉の開錠をお願いね」

「りよ、了解っ」

「さ、行こっか」

この時、戦闘への緊張と高揚からティス姉に防護付呪をし忘れた事が、最悪の結果を招く事になるのを僕はまだ知らなかった。

一步一步、辺りを警戒しながら進む。

まだ通りではあるけど、既に相手方のテリトリーに入ったって考えた方がいいだろう。

100m程進むと急に視界が開け、古めかしい門を構えた邸宅が姿を見せた。

豪邸と呼んで差し支えない程の大きさを誇る邸宅は、今やその輝きを失って久しい。

ここからは更に警戒しなくっちゃ。

ぐっと握った手に力を込める。

ティス姉は僕の左後ろから服の裾を掴んでついて来る。

普段なら癒される所だけど、今はそんな余裕は無い。

錆び付いた門は開かれているけど、なんとなく嫌な予感がする。

「待つて、ユーリ君。門の前に糸が張ってある、罨だよ」

そう言つてティス姉は腰のポーチから小さなナイフを取り出して、門に張られた糸へ投げつける。

ザッ、と門の後ろに溜まっていた落ち葉を掻き分けて、斜めに切り揃えられた竹が門の中程で交差する。

気付かずに足を踏み入れていたら、首が飛んでいたはずだ。

全力で殺しに掛かつてくる事実思わず唾を飲み込む。

「ありがとう、ティス姉」

「ううん、罨なら任せて。その代わりしっかり守ってね、騎士様」

「はは、頑張るよ」

周囲を警戒しながら門を潜り抜ける。

どうやら他に罨は無いみたいだ。

地面にも特に変わった所は無い。

——変わった所が無い？

慌てて振り返って錆び付いた門に視線を巡らせると、違和感の正体が解った。

血が付いてない。

さっきの竹には切断面に赤黒い染みが付いていたのに、周りの土や外壁や門には一切血痕が残っていない。

相手が死霊術師なら飛び散った血を回収するから、門や土に血が付

いていなくても不思議は無い。

——なら、なんで竹にだけ血が残ってるんだ？ いや、あれは本当に竹なのか？

その考えに至った時、僕は反射的にティス姉を抱きかかえて前方に跳んだ。

一拍遅れて、僕達が立っていた場所に鈍い殴打音が響く。

「ひいっ!？」

ティス姉が短く悲鳴を上げる。

視線の先では、1体のスケルトンがメイスを打ち下ろしていた。

僕は内心で舌打ちをしながら指先に魔力を込めた。

「ファイヤー！」

放たれた魔力が獄炎となってスケルトンを包み込む。

わずか2秒後には欠片も遺らずに消え失せた。

油断したなあ、罠が発動したら効果を現す術式かあ……大方、落ち葉の中に転がってた頭蓋骨の裏にでも彫ってあったんだろう。

もう少し意識を巡らせないといけない。

ホラー系のサウンドノベルをプレイするみたいな心境で捉えないと、こういった仕掛けは見破れない気がする。

それでも考えないと向けられる殺気に精神が耐えられないから、つて理由もあるけどね。

「ユーリ君……」

「あ、ゴメン。とっさに抱きかかえちゃったけど、痛くなかった？」
「う、うん、大丈夫。ありがとね」

横抱きに使っていたティス姉を下ろす。

強く抱き締め過ぎちゃったかな、余裕無くてゴメンね。

取り敢えず、第一関門は突破だ。

ここからが本番だな、って気合いを入れ直して玄関を見据える。

僕達が手を触れずとも、古びた重厚な玄関の扉は耳障りに蝶番を軋ませて僕達を招き入れた。

葬想——初めての恋と、永遠の別れ。

あたしが最初に抱いた印象は、女の子みみたいな男の子。

この国では珍しい漆黒の短い髪と、あたしより少し低い身長。

ちよっと中性的な顔立ちには、美男子とまではいかなければいいけれど間違いない整っている部類に入る。

声も声変わりしたにしては随分と高めで、声色を変えれば女の子と間違われるんじゃないかな。

ローブを纏ってるから身体の線は見えないけど、肩幅や手の大きさを
見る限りは華奢のように思える。

何より変わってると思うのは、彼が纏ってる空気。

普通あの年頃の男の子といえば、やんちゃ盛りで落ち着きが無い
てのが相場と決まっている。

なのに彼は年相応の快活さはあるけど、どこか母性……いや父性を
感じさせる落ち着きを持っていた。

思えば、この時からあたしは彼に惹かれていたのかもしれない。

ただ接触する事は出来なかった。

一応あたしは商隊の護衛として来ていたから、客人の彼とのんびり
している暇は無かったんだ。

それに彼は、同じく客人として乗っていた少女と四六時中イチャイ
チャしていたし。

流石のあたしも、あの桃色空間には入り込めなかったよ。

翌朝、私は商隊を取り囲む殺気に気付いた。

恐らく吼狼の群れだ。

群れの長が指示を出し獲物を狡猾に追い詰める狼で、退治するには
長を殺すのが効果的だ。

如何に狼と言えど、頭を失えば烏合の衆同然。

警戒しながら長を探すあたしの目に飛び込んできたのは、森の一角を冷めた瞳で眺める彼の横顔。

太陽のような笑顔を振り撒いていた彼が侮蔑的な表情を浮かべていた事に衝撃を受けた。

一体どうしたのかと問い掛けようと思った時、風に乗って彼の呟きが届いた。

うっとおしい、と。

苛立ちを秘めたその言葉に、あたしは震え上がった。

何故、何が？

形さえ整わない疑問が溢れる内に彼は馬車の中に引っ込んでしまった。

様子を見ようと一步踏み出したあたしの耳に、再度彼の呟きが届く。

「チェイサー」

放たれた言葉は聞き覚えの無いもの。

一拍遅れて馬車から何かが飛び出す。

――髪の毛？

漆黒を纏った彼の髪の毛は導かれるように風に乗って、潜んでいたもの達に突き刺さる。

潜んでいたものは吼狼だった。

吼狼に突き刺さった髪の毛は瞬時に獄炎を巻き上げ、一瞬でその肉体を燃やし尽くした。

突然の襲撃と長を失った事で、残った吼狼は我先にと背を向けて逃

げ出した。

彼はその結果に満足したようで、起きた少女と戯れ始めていた。あたしは護衛としての仕事を取られた事に怒りを覚えるでもなく、しばし瞼に焼き付いた彼の横顔に魅了されていた。

彼との再会はすぐだった。

というより、あたしが待ち構えていたんだけどね。

こっそり話を盗み聞きたら、彼は冒険者ギルドで仕事を探してるみたいだったから、護衛を終えたらすぐさまギルドで待ち伏せしてたって訳。

彼もあたしの事を覚えてくれてたのには、ちよっぱり胸が高鳴った。彼の登録とちよつとした自己紹介を終えて依頼掲示板へ向かう。

どれを受けるのか気になって彼を見ていたら、ミナちゃんが差し出した依頼に決めたようだ。

討伐系かと思いきや、2人が選んだのは雑務系の依頼。

後で受けようかと思っていた依頼を掲示板に戻して、あたしは2人のついて行く事にした。

この時は興味だけで動いてたつもりだったけど、今思えば多少ミナちゃんに嫉妬していたのかもしれない。

彼の寵愛を一心に受けるミナちゃんに。

だからあたしはちよつとだけわがままを言った。

敬語の禁止。

呼び方もティス姉って愛称に変えてもらった。本当はティスカって呼び捨てにされたいんだけど、それはもうちよつと仲良くなっただらだと思う。

何より、彼に呼び捨てにされるのを想像しただけで恥ずかしくなってきたちゃうし。

依頼はすんなり終わった。

男の子らしく工作は好きなのか、すぐに弟子入り出来そうなくらい鮮やかに屋根を修理した姿には、ちょっぴりキュンてきた。

ただギルドに帰って、少し面倒な事に。

彼が付呪の仕事は無いかと遠回しに尋ねたのが原因。

流石に驚いたけど、更に驚いたのはミナちゃんの対応。

今はギルドマスターに収まってるけど冒険者時代は『般若の化身』なんて呼ばれてたトレスキン相手に一步も退かず、彼の潔白を証明してみせた。

ミナちゃんの彼を想う気持ちが力となって溢れ出ているみたいだった。

それを見たあたしの胸に去来したのは、諦念か尊敬か、はたまた恋慕か。

――恐らく、全部。

ミナちゃんを見つめる彼の瞳に浮かぶ感情に、彼の事をこんなにも想う事が出来るミナちゃんの姿に、ミナちゃんの心をここまで魅了し心酔させてしまう彼という存在に。

あたしは彼の一番になる事を諦め、あたしは行動を起こせるミナちゃんを慕い、あたしは彼の見せる深い愛情に惚れた。

この日は彼を追い回す事を諦め、ミナちゃんに任せる事にした。

彼も自分の気持ちに気付いたんだろう、ミナちゃんを熱っぽい瞳で見つめていた。

あたしのような砂漠の民と呼ばれる種族は生涯にたった1人だけを愛し、尽くす。

但し相手に愛する人がいたなら、諦めて別の人を探すという変則的な一夫一妻を強いる掟が存在する。

普通なら掟に従い、彼の事を諦めるのが通例であり、当然の事でも、あたしが彼を諦めるには少し遅過ぎた。

——彼の一番じゃなくてもいい、掟に逆らっても、彼の側にいたい。

そう心に決めた瞬間、ギルド職員があたしを呼び止めた。

思えばこの時、あたしの命運は定まったんだと思う。

翌朝、あたしは昨日退いた事を軽く後悔していた。

目の前には今まで以上にイチチャイチャする彼とミナちゃんの姿。

2人に何があったのかが解り、ちよつと頬が熱くなった。

彼の瞳はミナちゃんしか映っていないし、ミナちゃんは彼の事しか見えていない。

何より、ミナちゃんの未成熟な肢体から立ち上る濃厚な雌の匂いが、その隙間から香る彼の雄の匂いが、それを証明していた。

その匂いに当てられ、お腹の奥が甘くキュウって痺れる。

叶う事ならあたしも彼の雌にして欲しい、この子宮の渴きを彼で潤して欲しい。

彼が2階に消えるまで、あたしは熱に浮かされたように淫らな妄想に囚われていた。

雄の匂いが薄れ、はっと現実に取り戻される。

切ない。

彼が欲しい。

彼に求めて欲しい。

思考さえ奪われたあたしは、少し積極的になる事にした。

戻ってきた彼に背後から抱き付いて頭に胸を乗せる。

たまに彼があたしの胸やお尻を見てたのには気付いてたから、これなら誘惑出来るかも。

よ、喜んでくれるかな？

上から軽く押したり前に回した手で押さえつけてみたり。

と、ミナちゃんが彼のおでこを少しむくれた顔でつついた。

喜んでくれてたみたい。

でもその後の2人の喧嘩……遊び？には色んな意味で驚いた。

「うわあ……ユーリ君誑しで鬼畜だあ」

「失敬な!?!」

怒られた。

後でミナちゃんにも聴いてみたら、あれは彼に乗って合わせた冗談みたいなものらしい。

ちょっと安心。

騒ぎが一段落した所で、彼にお願いを申し出る。

内容は、昨日あたしにギルドが持ってきた幽霊騒動の原因究明及び解決。

実は、あたしは幽霊や骸骨といった不死者が大の苦手。なんていうか、無理、生理的に無理。

話を聴くのも怖いし戦うなんて以ての外。
だから彼に是非とも手伝って欲しい、と伝えると彼は快諾してくれた。

安堵で、私は胸を撫で下ろす。

嬉しさの余り彼の手を勢いに任せて握った後に、手汗をかいてないか心配になった。

「怯えるティス姉もかわいいなあ」

「んえ？」

突然のセリフに変な声が出た。

かわいい？あたしが？

彼にかわいいと言われたら、嬉しくて胸が高鳴るけど恥ずかしくて照れくさい。

だからそっぽを向いて怒ったフリをした。

「毎回思うけど、ユーリ君って恥ずかしいセリフ堂々と言うよね」

「だってティス姉本当にかわいいから」

「だ、だからそういうの禁止い！」

逆効果だったみたいで、彼は眩しい笑顔をあたしに向けてきた。

顔が一気に熱くなり耳まで真っ赤になる。

なんとなく悔しくなって、彼にでこぴんしてやった。

相談の結果、ミナちゃんは宿屋に残る事になった。

理由は途中で彼が話した、今回の幽霊騒動の真相らしき予想。確証がある訳じゃないって彼は言ってるけど、あたしにはそれが真相としか思えなかった。

物的証拠は無いけど、状況証拠は彼の話を裏付けるものしかない。そんな危険な場所にミナちゃんを連れては行けないって事で宿屋まで送り届ける。

その途中で彼はミナちゃんの指輪に付呪をしたんだけど……その量も質も、この世界の法則を根源から覆しそうなものばかりだった。ギルドで話したのはライブだけって事だったけど、彼は明らかに大陸一、いや世界一の術師に間違いなかった。

送り届けた後で気付いた彼はあたしに内緒にしておいて欲しいと頼んだ。

「ティス姉、さっきの付呪についてはみんなに黙っててくれる？」

「……1つ約束してくれたらいいよ」

「僕に出来る範囲の事で、合法的なやつなら何でもいいよ」

む、失礼な。

あたしは何も荒稼ぎしようとか考えてないのに。

ちよつとむくれたあたしは、悪戯心とほんのちよつとの勇気を振り絞って、言葉を紡いだ。

「じゃ、じゃあ、この依頼が終わったらさ」

「うん？」

「あたしと……ううん、あたしをユーリ君の愛人にして」

「へ？あ、愛人っ！？」

「うん、ホントはお嫁さんがいいんだけど……ミナちゃんがいるか

ら我慢する。だから、代わりに愛人。あたしもユーリ君の事気に入っちゃったしね」

照れが入って最後の方は冗談めかして喋ってしまった。彼は少し頬を赤くして、考えておくよ、とだけ言った。照れてる彼もかわいかった。

目的の邸宅に近づくに連れ、口数も減ってくる。

周囲には微かに霧が降り、あたし達の視界を妨げ始めていた。恐怖のせいかな全身が重く感じる。

その感覚で恐怖が増大し、更に足の進みが鈍くなっていった。

「ゆ、ユーリ君、やっぱり帰らない？」

「帰りたいけど、どうやら帰してはくれないみたいだよ」

「え、な、嘘っ!？」

彼が背後を示す。

振り返った先、今し方歩いてきたハズの道は濃霧に包まれ数歩先すら見通せなくなっていた。

彼が言うには、これは結界の一種で例え真っ直ぐ後ろに進んでもあの邸宅の前に出るように細工されているって事らしい。

閉じ込められた。

その事実が、更にあたしの恐怖を煽る。

いつの間にか、あたしは彼の服の裾を握り締めていた。

この手を離したら、二度と彼に逢えない気がした。
慎重に一步一步進んで行くと、目的の邸宅が姿を現した。
不思議な事に周囲に纏わり付いてきていた霧が、邸宅の敷地内には
一切掛かっていなかった。
錆び付いた門は開かれたままで、不気味さをより一層強めている。
更に一步踏み出した時、視界の端で何かが光った。

「待って、ユーリ君。門の前に糸が張ってある、罨だよ」

細い弦が門の下に張られていた。
あれに足が引っ掛かったら罨が作動する。
あたしは彼の服を掴んだまま、器用に片手で収納袋を開き小さなナイフを取り出した。
腰溜めで投擲し、弦を断ち切る。

『ザンッ!』

大きな音を立てて、竹のような外観の仕掛け罨が門の先で交差する。
まるで巨大なトラバサミだ。
この罨も、幾人かの血を吸ったのだろう。
所々に赤黒い染みが付着していた。

「ありがとう、ティス姉」

「ううん、罨なら任せて。その代わりしっかり守ってね、騎士様」
「はは、頑張るよ」

軽い冗談で無理矢理緊張をほぐす。

門を潜り数歩進むと突然彼が振り返り、あたしを抱きかかえて前方に飛んだ。

何を、と思ったあたしが目にしたのはメイスを振り下ろしたスケルトン。

「ひいっ!？」

思わず悲鳴が漏れる。

恐怖に戦くあたしとは対照的に、彼は落ち着いた様子で魔法を放った。

彼の炎がスケルトンを包み、一瞬で灰すら遺さず燃やし尽くした。

凜々しい横顔に、胸が高鳴る。

助ける為とはいえ、あたしは今彼に抱きかかえられていると意識しただけで頬が熱くなる。

「ユーリ君……」

「あ、ゴメン。とっさに抱きかかえちゃったけど、痛くなかった？」

「う、うん、大丈夫。ありがとね」

自分でも信じられないくらい甘い声が出ていた。

彼はあたしをあやすように微笑み、そっと立たせた。

少し惜しく感じる。

とはいえ、ここからは心を引き締めないといけない。

蝶番を軋ませて玄関の扉が開く。

薄暗い室内には冷たい空気が流れ、生者の存在を否定するような気配を滲ませている。

中へ足を踏み入れた途端、背後の扉が勢い良く音を立てて閉まる。飛び上がりそうになるのを意思力で捻じ伏せ、同時に彼を掴み床へ倒れ込むようにして屈む。

『ダダダダッ!』

幾重にも連なる刺突音が響き、一瞬の静寂が戻る。頭上に突き刺さったのは鉄の矢。

恐らく床に圧力板が張られていて、侵入者が上に乗ると同時に扉が閉まり仕掛け弓から矢が発射される仕組みになっていたんだろう。暗さに目が慣れると広間の全体が見えてきた。

左右に2階へ続く階段があり、正面左奥の扉は多分食卓、正面右奥の下り階段は地下貯蔵庫へ続いているのだろう。

不意に視界が明るくなった。

同時に左右から骨の軋む音が聞こえ、カランと長剣だった鉄の欠片が床に転がる。

「罾といいスケルトンの配置といい……首謀者はかなりの悪趣味だね」

彼が呆れを滲ませて微笑む。

一息吐いて立ち上がり、周囲を見渡す。

どうやらこの区画の安全は確保出来たようだ。

彼と話し合った結果、先に2階から調べていく事にした。
階段を上り扉を開けた瞬間、扉の向こうに立っていたスケルトンと顔を合わせた。

「ひううっ!？」

「ファイヤー!」

一瞬で燃え尽きるスケルトン。

恐怖の余り彼に抱き付いちゃったけれど、彼はあたしの頭を優しく撫でてくれた。

ちよっと落ち着いた。

心の中で彼の存在がどんどん小さくなっていくのが解る。

その後も順調に罨やスケルトンを撃退し、2階も残す所後1部屋となった。

罨が無いのを確認して扉を開けると、その部屋は他のものと少し気色が違った。

質素な部屋の中には机が置いてあり、その上には1冊の本が鎮座していた。

罨が無い事を再度確認し、周囲の警戒を彼に任せて本を読み始めた。
この本は先代当主の息子が遺した日記のようだ。

日記には以下のような事が書かれていた。

『王年期334年5月7日――父は最近地下に籠もりがちだ。巷では父が怪しげな魔術に傾倒していると云った噂まで出始めている。
このままでは我が家の名に傷が付くかも知れない。父はもう57だ、そろそろ隠居を薦めてみようと思う。』

王年期334年5月8日——何だっと言うんだ！父にそれとなく家督を自分に継がせるよう進言したら、お前のような奴に私の栄光を渡すものか、と言ってきた。代々受け継がれている先祖の威光に甘えているだけの父に、一体どれ程の栄光や成功が有るものか！気は進まないが、父にはやや強引な方法で交渉のテーブルに着いてもらおう。

王年期334年5月13日——遂に父を説得する事が出来た。此方の誠意を持った対応が功を奏したようで、父は自分の意志で家督を継がせる旨を認めた誓約書にサインをした。去り際に忌々しげに私を睨み付けていたが、あんな痩せ細った体の老人に一体何が出来ようか。この家は今日から無能な父ではなく、この私がより良く導いていくのだ。

日付は無い——ちくしょう！あの老いぼれはとんでもない事を計画していやがった！闇魔法の中でも禁呪指定されていた黒魔術に手を出していたなんて、誰が気付くものか。奴は私達家族や隣人であるアノシユ家の人間を糧に不老不死を手に入れようと画策している。だが奴の思い通りに等させるものか、地下の部屋から抜け出す際にある仕掛けを施しておいた。奴が何体生贄を集めようと、徒労に終わるだろう。ああ、目が霞んできやがった。部屋の外で奴の手先と成り果てた弟だった骸が扉を壊そうとしている。最期に奴の怒り狂う姿を嘲ってやる事が出来ないのが心残りだな』

彼の予想が正しかった事に驚きつつ、日記の内容を伝える。
苦い顔をしていた彼だったが、仕掛けの下りで強い興味を示した。

多分、その仕掛けの謎が解ければ先代を葬り去る手助けになるハズだ。

あたし達は来た道に戻り、地下を目指す事にした。

やはりと言うべきか、地下に向かうに従ってスケルトンの数は増えていく。

貯蔵庫を抜け更に奥へ進むと、壁一面に謎の術式紋様が描かれた一室に辿り着いた。

恐らく、この先が先代の眠る墓所だろう。

「何だろうこの紋様。ユーリ君、解る？」

「ちよっと待ってね。解析の魔法は……サーチでいいか」

呟いて壁面を眺めていた彼の視線が、ある箇所で止まった。

その箇所到手を触れ煉瓦を押す。

低い稼働音が響き、壁が左右に割れた。

広い通路の奥には玉座が控え、錫杖と冠を被った1体のスケルトンが足を組んで座っていた。

多分あれが先代だろう。

『よくここまで辿り着いたものだな、矮小な者共よ』

「っ!？」

低く囁れた声が耳を通さず直接脳内に響き渡る。

先代であるスケルトンはゆっくりと立ち上がり、錫杖の先を向けて仰々しく構えた。

『もうじき儂の術式は完成する。お前達は最後の生贄となるのだ』
「ふざけた事を、お前の勝手に何人の人が犠牲になったと思ってるんだ！不老不死なんてくだらないものの為に！」
『ほう、活きが良いのう。お前の血肉は素材としても申し分無さそうじゃ』

彼は怒気を露わにして先代に喰って掛かるが、先代は余裕を崩さない。

圧倒的優位にあると思っているのか、その構えにはどこか弛緩が感じられた。

怯えるあたしに、彼は耳打ちする。

「ティス姉、一瞬でいいから奴の注意を引けないかな？」

「……うん、やってみる」

子細は問わずとも、彼が何かに気付いたのが雰囲気で伝わる。

多分日記に書かれていた仕掛けについて発見したんだろう。

なら、あたしのする事は1つ。

恐怖で震える足を叱咤して、収納袋からナイフを抜き出し先代へ数本投げつけた。

真っ直ぐ四肢へ向かうナイフは、直前で見えない何かに当たり弾かれた。

『何をするかと思えば、随分と短絡的な行動をするものだ。その程度で儂がくたばるとでも』

「ディヴァイン！」

先代の言葉を遮り彼が吼える。

その言葉が周囲に吸い込まれるのと同様、先代を取り囲むように4本の光の柱が出現した。

その中央に、一際太い光の柱が上から振り下ろされる。

『無駄だ！この体に幾ら魔法を放ったとしても』

「いや、狙いは……その錫杖の術式だ！」

『何っ！？』

彼の言葉通り、光は錫杖へ向かって収束を始めていた。

膨大な光の圧力に耐えきれず、錫杖の表面に幾つものヒビが走る。

硝子が割れるような音が響き、錫杖は先代と共に砕け散った。

光は役目を終え消え去り、静寂が戻ってきた。

「……か、勝ったの？」

「多分ね。先代を繋ぎ留めていた術式は無力化したよ」

思わずぺたんと床に座り込む。

張り詰めていた緊張の糸がぷつんと切れたのが解る。

見上げれば、彼が頭を撫でてくれた。

「そうだ、討伐の証拠になりそうな物が無いか探してくるね」

なんとなく照れくさくなって、立ち上がり部屋の中へ足を踏み入れた。

ずっと握っていた彼の裾を離れた途端、右手が寂しく感じる。

振り返って彼に抱き付いてみようかな？

そんな事を考えたあたしの右手が、弦に触れた。

天井に仕掛けられていた鎌が空を切り裂きながら、あたしの心臓目掛けて半弧を描き、

『ザンッ！』

あたしの生が、終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5486x/>

起きたら異世界でした。

2011年11月20日16時35分発行